

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成四年二月二十五日印刷
平成四年二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷七七七号



日川協加盟

No. 777

二月号

第16回全日本川柳和歌山大会

日時 6月14日(日) 午前10時開場

会場 和歌山県民文化会館大ホール

会費 3000円(昼食・記念品代共)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「はるかに」 塩見一釜選

「陽」 竹本瓢太郎選

「城」 西尾 栞選

3・5×18センチの句箋1枚に1句ずつ記入
各題2句、無記名、封筒に住所氏名を明記し、
投句料1000円(定額小為替、現金書留)を
同封のうえ、左記へ

投句先 〒542 大阪市中央区谷町7丁目1-39

新谷町第2ビル206号

日本川柳協会大会係あて

宿題 第二部(当日出句・締切正午)

「砂」 北山紀世選

「和む」 小林由多香選

「宴」 占部晴美選

「加減」 荻原柳絮選

各題2句・各部の各題とも未発表作品に限る

前夜祭 6月13日(土) 午後7時〜8時半

会場 ホテル東急イン

費用 8000円

平成3年版

日本川柳秀句・推薦句集

日本川柳協会編

■A5判・208頁 価3000円(〒260円)

全国1200名の川柳作家が4年間に発表した作品から
自選した句を渡邊蓮夫・亀山恭太・西尾 栞の3選者が
選び抜いた秀句100句とその基礎となった2800句の推
薦句を収録した現代川柳の代表的句集

●昭和57年版・同59年版・同61年版・同63年版の在庫があります。

1冊1000円(〒260円)の特価で頒布しますのでお申込みください。

発行/申込先

大阪市中央区谷町7-1-30
新谷町第2ビル206号

日本川柳協会

選句は選者の創作

西尾 栞

年末年始の多忙は、私だけではないが年齢の故か、人が五分か十分で出来ることが、三十分も四十分もかかる。だから仕事が進まない。二月号の巻頭言をあれこれと考えていたが、良い思案も浮かばない。手元にある本を読んでいると面白いのがあったから、一、二書きぬいてお茶を濁したいと思う、赦されよ。

○ たった一句だが、面白い言葉がある。

菊池寛「文才のある文学青年程、困ったものはない」

藤田嗣治「きれいな猫より私は汚ないみじめな猫が好きです」

高浜虚子「選句は選者の創作です」

名医真鍋嘉一郎「一病は長生きの基」

吉川英治「大衆は大智」

初代中村吉右衛門「小唄は私の独り言です」

小林一三「金を儲けたという実感がないのです」

武者小路実篤「雑誌にたのまれたら書くことわるより書く方が早い」

××××××××××

京都にロケで行っていた新珠三千代が、目にもものもらいが出来た。「いい眼医者がないかしら」と相談すると、大田と云ういいお医者さんが、嵐山電車の駅からタクシーで十分ほどのところにあると宿の女中が教えてくれた。そこで新珠さんは助監督と一緒に嵯峨に行った。駅を出て車を走らせると三分くらいのところは大田という大きな看板の出ている病院があった。「タクシーで十分でなくて、歩いて十分だったのだわ」と思って車を降

りた。実は大田という病院は親戚同士で、今入って行こうとしたのは眼科の方ではなくて、精神科の方だった。それとは知らず、助監督と一緒に入ってゆくと、院長と看護婦が出てきて「サア、こちらへ」と親切に言うてくれる。

新珠さんは宿からきつと電話を入れてくれたのだろうと思いつつ診察室へ入った。

「さあここにおかけなさい」と言われたので、「新珠三千代でございます」と挨拶して腰をかけた。院長は新珠さんを見ず、助監督の方を見て、「この人は、いつからそう思いこんでいるのですか」

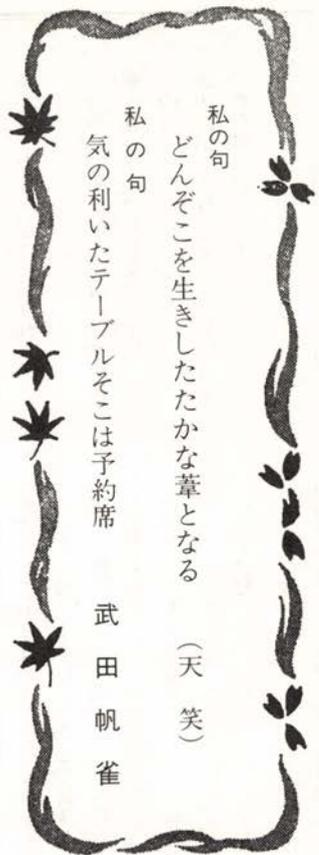
××××××××××

講談師の竜崎貞山氏が酔っぱらって交番の前を通る時、誰何(すいか)され、

「お前は何者だ」

「私はコータンシ(好男子)という」

「馬鹿野郎」



私の句

どうぞこを生きしたたかな葦となる (天笑)

私の句

気の利いたテーブルそこは予約席 武田帆雀

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 選句は選者の創作……………西尾 栞……………(1)

川柳の総合雑誌を……………田中透太……………(2)

川柳塔(同人吟)……………西尾 栞……………(4)

自選集……………東野大八……………(38)

川柳の群像 川村好郎……………(42)

■古川柳 柳籠裏三篇研究(十二丁)……………(44)

水煙抄……………黒川紫香選……………(46)

秀句鑑賞 [同人吟]……………小林由多香……………(66)

水煙抄……………榎本蒨児……………(67)

路郎賞・川柳塔賞中間発表表……………(68)

大空のころろ……………橘高薫風……………(71)

川柳の総合雑誌を

田中透太



『番傘』誌昨年九月号の
エッセー「人間諷詠・考」
の中で保木寿氏は、俳句に
近い川柳が増える一方で、
俳句も人を詠むべしという
結社が増えつつあり、川柳

も高枕で眠っておれない、と述べている。
不勉強な私には耳の痛いことではあるが、
それにしても現在、未だに川柳の総合雑誌が
ないのはどうしてだろうか。俳句や短歌は毎
月数冊の総合雑誌が発刊され、句集や歌集、
評論なども数多く出版されて書店の文芸コー
ナーを賑やかにしている。それに比べて川柳
は、俳句コーナーの隅で古川柳の本や入門書
など数冊を見るだけで、とても俳句や短歌と
肩を並べるまでに至っていない。

川柳の総合雑誌は、過去に短期間ではある
が二誌が発刊されている。一つは構造社の『川
柳』で昭和52年11月創刊、以後隔月刊から季
刊、不定期になり、29号で廃刊になった。も
う一つは昭和55年7月に創刊の叢文社の『川
柳時代』で、4号で廃刊。当時「さっぽろ」誌
で斎藤大雄氏が次のようなことを書いている。

句評リレー……………	高須賀金太・桜井千秀・矢野佳雲・土橋 螢 ……	(72)
銀河系……………	河内天笑選 ……	(76)
茴香の花……………	八木千代選 ……	(80)
「仕える」……………	吐田公一選 ……	(82)
一路集「手帳」……………	片上英一選 ……	(82)
「卵」……………	浅野房子選 ……	(83)
初歩教室「散步」……………	辻 白溪子 ……	(84)
一月本社句会……………	各地柳壇(佳句地十選／高須賀金太) ……	(86)
■各地句会日より 川柳塔あおもり……………	小寺 花峯 ……	(90)
柳界展望……………	二月各地句会案内……………	(101)
■編集後記……………	正坊・楓楽・射月芳 ……	(103)
		(105)
		(106)

座右の句

台所覗いてかえる里の母

私の句

泣きに来た海が他人の顔をする

(宵明)

野村京子



「川柳雑誌が書店にあり、川柳書が書店の文学コーナーか詩のコーナーに飾られている。『全国川柳年鑑』が確実に発行される。それが心ある川柳人の理想像であり、夢であった。その夢のひとつを出版社である雄山閣、たいまつ社、構造社出版が実現してくれた。だがみんな駄目になったのは、川柳が市場に出る資格のないことを、ある面から立証したものである。なぜ、川柳は売れないのであろうか。

川柳人の夢をかなえるためにも、俳句に勝る川柳を作るためにも、川柳の総合雑誌の復活、発行は不可欠であると思う。川柳はこれまで各社ごとにも同人・誌友が作句に精進し、柳社主催の大会では、柳人の交流と親睦を図りながら作品の向上に切磋琢磨してきた。そして、日本川柳協会では、川柳の普及と社会的地位の向上をめざして、『日本川柳秀句・推薦句集』を刊行し、成果をあげつつあるが、残念ながら書店には出されていない。また、川柳句集も年々増加しているが、殆ど柳社の手で売られており、川柳人以外の人の目に触れる機会はない。

川柳が文学である限り主体性を保ち、個性豊かに俳句や短歌と競い合わねばならない。それには柳社を越えたところで作品の発表や研究、柳論(評論)など、自由活発に行う場が必要ではないかと思う昨今である。



西尾 栞 選

大阪市 板東倫子

あと七回賀状書いたら新世紀

ドラフト選手一億円の幼な顔

偽物の時代は人工臓器まで

ぜいたくは小原庄助ほどでよし

猫までが自律神経失調症

アベマリアほんとの愛を恋うてます

鳥取県 新家完司

好きな店同級生のママがいる

まむし酒効くと思つて飲めば効く

雨の日のこの世は少し暗くなる

震度七きつと硝子の雨が降る

にんげんが作った鳥はよく墜ちる

焚き火でもしようか誰も来ない秋

熊本市 永田俊子

マスクして心の中を覗かせぬ

修羅の火をくぐつて静かな壺の肌

反対へ走るかなしい義理があり

嘘すこし盛った小皿が白過ぎる

長いものに巻かれた足がもつれ出す

本当の友を見つけた裏通り

松原市 小池しげお

寒ばたん土の温さを離さない

白い歯を出して顔色読ませない

正論と思うようではまだ若い

じつくりと象を触ってきたらしい

はつきりとけじめをつける五寸釘

息子には千年杉を見せておく

竹原市 小島蘭幸

赤ちようちんの椅子よ眠つていいですか

庭雀いつか私のためのひらに

嫁ぐ日が近いピアノの音がする

負けても負けてもママさんバレーにぎやかな

お祈りをしてもサーブが入らない

伊丹市 榎谷寿馬

続くもの信じて除夜の鐘を撞く
尊氏も死んでドラマの年暮れる
車椅子の低さへ世間が高くなり
猿回し表彰状をさるに見せ
ハンガーの服も疲れたまま暮れる

米子市 林荒介

目の疼くものを見詰めて目放せぬ
千代紙も古い言葉でたたまれる
面の数どんでん返しの旅ならむ
ラムネ玉記憶の底でよく弾む
蕎麦搔きに仕来りのある草の屋根

下関市 石川侃流洞

盃をコップに変えて乱気流
裸木の風がつめたい六地藏
日溜りへ猫が偽善を繰り返す
肩書が路傍の石にしてくれぬ
先生が一番ひどい一輪車

島根県 堀江正朗

神さまに試されている勘のズレ
盃に箸にも力満ちあふれ
怖いこと聞えぬように耳も老い
想い出す北支北満脈を打つ
力瘤行き場ないから抱く炬燵

島根県 堀江芳子

盃にいい顔ばかり溢れさす
いっしょに頑張ろうねと主治医から
あるときは読めぬカルテに気が和む
ほめられて七十歳を忘れてる
献立に夫の記憶の彩を添え

大阪市 江城修史

つらすぎる痛みが見えぬ腎不全
ある別れ握り返した手の温み
三猿を守れば馬鹿だ阿呆だと
盾となる妻に坂道どこまでも
酸欠の街で今日も生きてます

松原市 玉置重人

紙コップその場限りのおつきあい
自転車もモラルも駅前^に捨てる
見られてると知ってるらしいニューモード
十二月小鳥の餌を播^すっている
方便のつもり^の嘘にけつまずき

奈良市 宮口笛生

クリスマス苺過保護に育てられ
渋滞の長さに堪える十二月
登校が駆け足になる朝の冷え
肩書きがとれて老人会の椅子
深酒はやらぬ葉^にしてる酒

鳥取県 土橋 螢

いのち預けるロマンズの真最中
実力と金のギャップにはさまれる
傷ついた小指にカットバンをはる
ほうとうの俺をときどき見失う
ガラス戸越しの文学を読んでいる

米子市 林 瑞枝

漫画チックなハガキと笑う今日の福
夕焼けを背負うおんなの二十五時
自分史の一章ごとにある花野
即興の夫のコントが効いてきた
存在感 夫の大きい独り言

藤井寺市 吉岡 美房

暖冬のせいかもソ連溶けて行く
山茶花の辺り冬の陽集まれり
正月の間だけでも丸い顔
お目出度う十日も言えばすり切れる
終章を飾れる雪を待っている

唐津市 田口 虹汀

白いから私は雪が大好きで
海の青胸の痞えをとってくれ
目の鱗、心の鱗とれて春
日の丸に笑顔笑顔の皇太子
肩に手をおいて可笑しくない夫婦

唐津市 仁部 四郎

丹前の袖に寓話が隠れてた
新調の袖に貫く妻の意地
ヒロインの涙は涸れず新世紀
初めての椅子で温める砂時計
長のつく椅子のサイズにはめ込まれ

唐津市 久保 正敏

ダメなものダメと女に教えられ
シナリオがねじれて寒い夜となる
明けまして今年猿に知恵を借る
惑星を支配出来ると思う猿
別宅の略図が秘書のメモにある

東大阪市 森下 愛論

年金の余生で見てる世の移り
飲み過ぎてまた三猿を忘れてる
ひとときの安らぎがあるカウンター
粹な話老いの私をかきたてる
落ちる陽の早さに嘆く孤独感

岡山市 嘉数 兆代賀

地図にない今日のドラマへ帆をあげる
心の中に森をつくって独り住む
流れついた岸で再起の芽が育つ
二人三脚アンタお前の中で古い
捨て石の位置で明日の灯を守る

和歌山市 内田 結実

真夜中の猫の眼と男の目

傷一つ背負って女は強くなる

八尾市 宮西 弥生

岬まで追いかけてきた冬の虹

終わりましようロングコートがひるがえる

いろいろな他人と出合う朝の駅
耐えぬいた分だけ世界広くなる

がむしゃらに生きてきたよね小銭入れ

水仙を活けて寂しき深くなる

生きている限りの絆久し振り
ご近所に遠慮がつづく遅帰り

島根県 小砂 白汀

和歌山市 西山 幸

新聞が歩いただけの初春の雪

誇れるは親からもらった歯が五本

悪知恵の螺子をときどき捲いてみる
さよならへ振ってしまつた手が白い

かんとんに生命賭けると言うカラス

ゼロ一つ添えたらさつと売れました

自己弁護する唇が赤すぎる
湯豆腐が煮えても父はもういない

走らねば競馬ファンに相すまぬ

落下したりんごに罪はないものを

大阪市 西出 楓楽

奈良県 田中 紀美代

ぬか床の底は女の痛み知る

しがらみの義理へ擦る墨濃く薄く

あの人の心ゆさぶる言葉選る
虚栄心くすぐるウインドー斜に歩く

尊徳を真似て近視になりました

売り言葉誰も買わない日の孤独

思い出をひもとく道に櫟の木
案内の地図に犬まで描いてあり

ジョークしか通じぬ若者たちの街

なんでまた女系家族にメスの犬

和歌山市 福本 英子

西宮市 林 はつ絵

雑兵でよかつた開戦五十年

媚びたりはせぬ落柿舎の冬の花

米糠の効用を聞く今更に

争いを幾つ見てきた目が痒い

そのうちが追っかけてくるごみの山

老松を春の作法で活けている
なんとなく神に近づく除夜の鐘

タクト振る妻を焦らしてばかりいる

この時季でよいのかアロエ花つける

魚ごころライターの火がすぐに点く

倉吉市 奥谷弘朗

順番に文句があつて和がくずれ
ぐるめ旅食わず嫌いが居て困り
ライバルの影が射程距離にある
凄いのが出て順番をくるわせる
どん底を耐えた男に無駄が無い

廿日市市 林野甦光

出稼ぎがジェットで帰る松の内
議事進行 異議はお金で買つてある
肩書を落とすと急に眠くなり
習字教室 忍の字ばかり書いている
白い地図抱いて妹が旅に出る

笠岡市 松本忠三

坊さんが毛を生やしてつまんない
わたしだけ悪者になる仲に入る
同僚の二つ返事に迷わされ
善人が浮名を流す軽はずみ
寄付金の下を参考までにする

鳥取県 松下たつみ

目的をもって雑音など聞かぬ
裏庭のボスになろうと咲く椿
二兎を追う自分を哀れとも思う
方言を捨てるな街が冷えてくる
満ち足りて意欲がひとつずつ消える

美禰市 安平次弘道

風紋に風の思いが伏せてある
本心にふれると動くのど仏
計算が下手で寝返るのは止そう
誤解とけぬままに仏に借りが出来
本音少しもらすと酒を酌ぎこぼし

今治市 矢野佳雲

切り札を出さずにすんだ笑い声
寢言では嘘は言わぬとそば枕
学歴はないがみんなにあてにされ
お早うと定期券見ぬ始発駅
川二つ出合うてからは名がかわり

岡山県 二宗吟平

神仏に頼る外なし受験の日
発表会古風豊かな芸揃い
碑に書いて今さら悔いる事もない
三秀吟抜けて先祖に見てもらい
よろこびに文字放送の出るテレビ

米子市 小西雄々

無と思う祈りの視野へ鶴が翔ぶ
山頭火より持ち味の喜劇織る
万札を小銭尊敬していない
またしても小銭へ犠打のサインくる
玉手箱もでかい葛籠もみな誤算

豊中市 田中正坊

尼崎市 春城年代

良心も邪心もあつて生きのびる
重いのち軽い生命の脳死論

天女にも悪女にもなる男運

老いらくの恋 一休も良寛も

国禁の本読みし日も多喜二の忌

鳥取県 林露杖

堺市 楊井二南

ふる里に空家が増えて冬に入る
また今日も俺より若い友が死に

年金のくらし補てんが欲しい暮れ

猪鍋の誘いに重い腰を上げ

もう少し幕が引かれぬ猿芝居

倉敷市 小野克枝

米子市 政岡日枝子

恍惚の顔が笑つた祝い膳
母の道広げてくれる子等のあり

ワテンポ遅れて妻の生返事

背を伸ばすことの無かつた亡母よ亡母よ

あと少し歩き続ける花の土手

尼崎市 春城 武庫坊

鳥根県 榎原秀子

都市騒音になれた耳持ちジャズが好き
ラガー突進魔法の水が生きている

石置いた屋根で民話の続き聞く

自画像のバックに白い雲を描く

過去棄てて夢の彩色考える

有線で今朝から流す冬のうた
カレンダー数々貰う十二月
青春のおもいが残る紅絹の裏
白菜をさつくり割って漬ける幸
初雪を唇にうけ頬に受け

片言が通じて航路恙無い
雲泥の差では素顔は見たくない
舌打ちをしながら聞いて置く頑固
無料だと聞けば警戒したくなる
年寄りの多事多忙とは趣味のこと

満月の波にあばれぬ訳がある
方言をたくさん知っている机
過労死をするなど首に言いきかす
旗印 虹に向かつて見せておく
人恋うて島の踊りは夜更けまで

パールハーバーわたしは恋の真つ最中
土壇場になると本音が遠慮せず
人のお役に立ってさっぱりした心
語りべの村の大樹に寒の月
女から女性上位をあげつらう

片言が通じて航路恙無い
雲泥の差では素顔は見たくない
舌打ちをしながら聞いて置く頑固
無料だと聞けば警戒したくなる
年寄りの多事多忙とは趣味のこと

柳井市 弘津柳慶

拍子木の柀もあざやかに暮が降り

仲裁へ子が辛辣な意見言い

姑は夫婦の愚痴を知らぬ顔

おっとりとしていて彼女盗まれた

お見合で相手の話拍子抜け

松江市 柳楽鶴丸

出雲美人におとらぬクーニャンについて見とれ

歴史が育てた美人と踊る

你好 厕所 謝々だけで旅をする

中国の有料トイレにびっくりし

和洋折衷 我が家のチャンコ鍋

松江市 舟木与根一

町内の空気に合わず十二月

偏差値を背負って無人駅を発つ

金回り悪い男の風邪マスク

胃カメラを覗いて地獄めぐりする

二コマの漫画のオチは妻まかせ

和歌山市 牛尾緑良

遅咲きの一勝だから大切に

致死量を越えた夫婦の無言劇

乾杯ですませた妻の誕生日

生きようと決めると明日が見えてくる

旅半ば妻が後押ししてくれる

高知県 赤川菊野

マルクスに炎えた昔が馬鹿ばかり

夢にみたベレストロイカ夢と消え

兄が逝く身辺整理急がねば

伴走の亡夫がだんだん風化する

都落ちして人間をとりもどし

大阪市 津守柳伸

方円の水に従う福寿草

歯車の軋みに耐える過労癖

一日の早さ予定が振りまわす

新米に友情沁みる奮闘記

ダイエット三日坊主のとし女

堺市 藤井一二三

犬の重み人の重みの落葉鳴る

柿熟れるまで待つ知恵を鳥は持ち

拘って生き三猿を意識せず

六十五歳を実感老人医療です

祝筈の由来も初春の有難し

和歌山市 堀端三男

貴く意地と捨てる意地あり人生譜

家計簿に亡母の生きざま克明に

八分目で手を打つ癖も親譲り

波かぶる覚悟が出来て気が軽い

また小さくなったと想う肩を揉む

大田市 藤田 軒太楼

富山県 舟渡 杏花

中とつてうまく宥めた年の功
背伸びして余生へ励む老いの坂
親指を立てて基仇やって来る
母方に似た凶太さに期待する
暗転の濡れ場悲しく幕が下り

大阪市 本間 満津子

寝屋川市 江口 度

小春日和もすこし達者で居られそ
歎びが買えぬ句を忘れた市場籠
オヤ愚痴っぽくなったようだと
言う枕
了見がせまい狭いと深呼吸
恩師の忌 沈丁花の香春近く

寝屋川市 柴田 英壬子

和歌山市 桜井 千秀

葉牡丹を一對買って年を越す
シルバー人材もうふんぎりはつ
いてい
カシミヤの手触りこれからの味方
故郷の土温いでしょおとうさん
(納骨)
思索するときどき家事を挟みつ

寝屋川市 稲葉 冬葉

堺市 高橋 千万子

一月の予定に産後頼まれてい
る
二月の暦若い歯科医にまた逢
える
病院のヘルスメーターに情が
ない
炎の命 水のいのちを持ち合せ
帯枕低く世間を知りつくす

辻褄を合わす臨時の使者に立
つ
男女同権 男めしたく物語
しきたりを嫌うヤングの祭り
好き
マンションへ先祖の宝みな捨
てて
人間尊重そんな言葉に泣く遺
族

島根県 西村 早苗

逢った日の帯ゆっくりと解く余韻
娘のための汚れ役なら買うて出る

コトコトと春の息吹く昆布煮る

中庭にもう動いてる土の音

こんな事になるとは知らず同乗者

奈良県 上田 翠光

自由化へ豊葦原の底力

自由化がどうあれ堆肥の山つくる

今更に堆肥を土の母と呼ぶ

頂点の孤独しみじみゴルバチョフ

遊のある暮しに遠く乳しぼる

奈良県 天正 千梢

のびる節目かまたひとつつまずき

我欲でよごした事に気がつかず

馴れる事を許してくれない大自然

卑怯者借りものの権威振りまわし

乗り継いで今年もつづく猿芝居

弘前市 真喜内 實

小さいが気に添わないと鳴らぬ鈴

あちらから掛ける声待つ里の道

売り言葉買わざる黙秘強くなり

痛い掌が知る会長の親心
ふくよかな冬の木の芽の孫の顔

大阪市 河井 庸佑

的を射た短いスピーチ喜ばれ
年下の若い感覚から学ぶ

思いやり忘れて人の道はずし
謙虚さを忘れ自分を見失う

平常心忘れてひとりうろたえる

大阪市 黒田 真砂

庭の紅葉も一枚そえて夜の膳

松葉ジュース毎朝枝を切るつらさ

点滴に明日は明日はと夢画く

三歳は三歳なりの理屈言う

一坪の庭にも巡る四季の唄

岸和田市 植山 武助

亡父の帽子が何時もの所にかかっている

昔の事知ってどうする考古学

君が行くなら行くと言われて行く旅行

ご隠居が豊かになって来た長寿

外遊をウンウンと聞いている

神戸市 中村 ゆきを

登りつめ遙かに五重塔が見え

二ん月の星にロマンの手をかざし

二年目の春を天神さんに賭け

つっぱりを生徒の親もキンキラキン
浴用車 霊柩車も走る松の内

和歌山市 松原寿子

ここは楽園だいこん足は気にしない

(ワイキキビーチ)

巨艦アリゾナ波に揉まれて語り継ぐ

(パールハーバー)

心だけ抱いて下さい潮風よ

(同)

プレスリーを偲んで抜けるヤシ林

(カウワイ島)

誘われてわたしも溶けるショータム

(ポリネシア)

米子市 石垣花子

ワンテンポ遅れ補聴器返事する

ふる里の火種に足は向けられぬ

チーズとも言わず仁王のいいポーズ

仁王立ちして守り抜く鍵もある

めちやくちやに病んでる森も学校も

出雲市 園山多賀子

因習の風化を誓う花八つ手

落葉焚く煙水子仏を温める

影法師までがわたしを追いかける

他人から悠々自適と羨まれ

猿知恵の三猿守り生き延びる

香川県 松村迷観子

時差ボケの旅が続いている平和

ナースにはベッドと廊下は別の入

方角がどうのこうのと年齢かいな

八十年古里訛りが消えぬまま

その先は聞いても無駄と言う返事

岡山県 矢内寿恵子

流されて押されて稲荷の初詣

人間の驕り諫める普賢岳

親も子も走る夢見るカタツムリ

子に孫に優しい夢よ吊し柿

悲喜劇をがっちり背負う父の肩

和歌山市 内芝登志代

百歳の双児へ拍手するばかり

ふる里の記事は何度も読みかえず

やぶ椿容姿崩さず地に還る

母さんが要の位置で安心だ

大切に育てた花で墓詣り

米子市 寺沢みどり

皿いち枚割れて半端な生き残り

背を向けた隙へ大波よせてきた

凧へ開き直りの顔晒す

陽を浴びて玉虫色の鳩の首

寄せ合った机も個室主張する

米子市 沢田千春

台風をかわして島の低い屋根

かたつむり遊びすぎたかなくなる

いつの日か火の絵を画こう筆を選ぶ

一言に毬はずんで草の中

救急箱の中でアカチン欠伸する

大和高田市 岸 本 豊平次

冬の顔交えて秋の風が吹く
霜の道犬の散歩も足ばやに

波風は立てまい一言喉で止め

セールスが来てるか近所の犬がほえ

趣味多彩友がふえてる年賀状

西宮市 門 谷 たず子

持ち時間だいじに回る夫婦独楽

いつまでの倅せふたりの猿芝居

日々好日それぞれが持つ花暦

正月は亡母のきまりのままで明け

寝返りの三度目からは不眠症

姫路市 人 見 翠 記

白寿まで生きる積りの読書欲

口紅を忘れているよと娘の注意

善人と信じた人が詐欺師とは

宝石が過去の私を知っている

恐怖感無病息災と同居する

美面市 坪 田 紅 葉

秋色のポブラ並木に旅ごころ

美容院週刊誌もたのしみで

お見舞に週刊誌もそえて行く

燃えさがる紅葉バックにハイポーズ
アメリカのガールのほうが日本的

高石市 浅野 房子

物知りのニュースソースは週刊誌
道祖神片手拝みにひとり旅

ため息も欠伸も同じすぐうつる

信じてた大樹がゆれてきた不安

食べるだけ食べて秤に乗っている

大阪市 大塚 節子

炭焼珈琲一割がたは気分料

日記帳 今年も節分まででした

寝姿もおもいおもいの終電車

戦争を知らぬ雑炊新年会

有名税言うていられぬ暴露記事

寝屋川市 岸 野 あやめ

頂いてこわごわ食べるふぐの味

抜けぬはず伝家の宝刀錆びている

女にも年輪 手術の痕がある

落ち葉して樹々は新芽を蓄える

自己愛の極みヌードの写真集

宝塚市 丸 山 よし津

喝采に酔わずあしたの芸磨く

失った愛はかえらぬ冬の海

幸せの絵はわたくしの彩で描く

支払いの甘いカードの蟻地獄
初出勤やる気の背広よく似合う

青竹を踏んで毒舌衰えず

羽曳野市 田中透太

悔い一つ父を背負ったことがない

嫁が来るボンボン船で島に着く

行き先は環状線に乗ってから

アルバムに貼れぬ面影抱いて秋

岸和田市 福浦勝晴

心血を注いだ作がボロのチョン

面影を追えば悔悟に突当る

百薬の長と名医もコツブ酒

ぶっちゃけたところ自然に罪はない

満員車ノツポに腹が立つ病氣

岸和田市 高須賀金太

窓際であと一周がきつくなり

わたくしを乏しい語彙が苦しめる

ゲートボールの老人をほくは嗤えない

バブル弾けてやけに目立ってきた空き地

節曲げるのは棺桶の中でする

岸和田市 古野ひで

停退へ逆転をする妻の位置

フルムーン夢に終わった夫が逝き

あの人の好きなラグビー見えています

世の流れ老いの小走りまにあわず

犬と猿それでも仲いいあにいと

大阪市 神夏磯典子

ブランドの人気を知らぬ母の指

平凡な筋書 子が変わる

もう意地をはったりしない蟹の泡

カラオケは唄う宗教かも知れぬ

いっどうなるか背中合せて唄ってる

有田市 松井かなめ

下の暮しされど幸せと思う日よ

何の列ああ売出しの景品場

七十に近い夫に喧嘩売る

茶粥炊き紀州の冬をいとおしむ

古希近く父ちゃんなぜか光り出す

八尾市 宮崎シマ子

孫二十歳私の二十歳を再現し

屠蘇に酔い孫にも酔うて早寝とす

欠点を曝け合うてる冬木立

朝シャンをすれば昨夜の傷が癒え

流れ雲放浪の子に里心

八尾市 鷺見章

信号の赤酔眼は未だ確か

ダイエット効果ベルトの穴一つ

月に影並べて次の世を妻と

緋前掛みな若からぬ蕎麦処

靴音は犬が知ってる午前二時

神戸市 山口美穂

十和田市 斉藤 劼

テレビドラマ炬燵で師走忘れてる
誓文払いと昔は言っていたそうな
病気とも仲良くつき合い五十坂

日々忙しなおなお忙し歳の暮
耳遠い老母との会話はすれ違い

呉市 横田英詩

天下りの道に絨緞敷いてある
風の私語このアベックは続かない

減私奉公する気はないと離婚する
それっぽっちのお布施で煩惱消えますか
千客万来質屋は不況風が好き

守口市 羽原静歩

ふり向けばわが人生の幾山河
漱石も子規も浮世の苦勞人

錦鯉あれが百万二百万
アルバムにシッポク料理の匂いする
地球儀のデコボコ戦争繰り返し

西条市 片上明水

亀の真似したばっかりに負けました
振り切った手が冷たくて冷たくて
夕刊と塾へ行く子が擦れ違い

借金を全部払うと明日が消え
冷や酒の方がきり出しよい話

街中に昔を好きな馬具屋あり
応援歌に涙が止まぬ落ちりんご
受験子は落ちないりんご丸かじり

再会の話に花が返り花
Vの字をラガーに描き渡る雁

京都市 山本規不風

死の保存説俺は茶毘髻残し度し
百年の大樹巢穴に雛温し

人妻の薔薇に炎えてる冬の蝶
コマ切れのチーズを病妻へ口移す
新築へ別れた人も敵も来る

和歌山市 木本朱夏

北国の落ち葉拾って逢いに来る
ユトリロの絵のように街暮れなずむ
いのち短し慕情抱くこと許されよ

気のきいた台詞をさがす冬の森
コーヒーが嫌いやなんて手間な人

西宮市 奥田みつ子

性格を合わし合わせてまだ夫婦
脳味噌がある時砂と入れ代わる
逆玉を狙う男の細い首

傷ついているのかブランコにひとり
師走かな無口な父がな無口

和歌山市 若宮武雄

大阪市 藤田頂留子

本年は木から落ちまい猿の意地
出直しはかくあるべしという冬木
泥沼へダイヤが落ちてゆくドラマ
みかん剥く所作も本場という流儀
血圧を思えば怖い宝くじ

八尾市 高杉千歩

出雲市 吉岡きみえ

ポッペンと語りつくして寒の月
夫婦かなときどき波長合うときも
愚痴盛ったお皿一枚売れ残る
価値観の違い聞かないことにしよう
繰り越しの赤字もつけてしまいい風呂

米子市 青戸田鶴

島根県 松本文子

初春へ私の鈴もはずませる
木枯しも木梓の窓を恋しがる
居眠りの好きな机をもっている
障子張り替えて闇からぬけ出そう
背番号みんな知ってるコンピューター

米子市 菅井とも子

両面が部屋を明るくしてくれる
韓国と日本の蟹の食べくらべ
分捕られた島でお経をあげている
首実験するまで返事のぼしとく
父と子の谷をうずめる孫の顔

高知市 北川竹萌

神のみぞ知る地球儀のジグソーパズル
栄養展嫌いな物も食べなさい
週休二日だろうか寒波すぐゆるみ
仕舞た屋をビルに化けさず地鎮祭
血圧に叱られている好き嫌い

ジャンボくじもしやもしもで日が迫る
男には男の話鍋煮える

本物の恋になりそうブチトマト
花道をあるくと浮いて困る足
スプレーでかためた愛が崩れだす

万葉の歌人と同じ落葉踏む
人許す頃には豆も煮えてくる
夫婦愛もう卒業をして爪を切る
膝小僧抱くと私らしくなる
私の池で泳いだり溺れたり

兼六園旅行の記念吊り松と
加賀城址見て満腹の菓子処
浜汀 高速バスの千里浜
山門に縮締め直す永平寺
嫁心日差し温もる老いの部屋

大阪市 北 勝美

大寺に東西南北 門四つ
東門に遙拝所のあるお寺
古寺の柱の木目浮き上がり
夜の門閉めぬお寺に慈悲がある
除夜の鐘終らぬうちに電話ベル

今治市 越智 一水

三猿通して母は人とは争わず
合掌で人間心の穴をうめ
病氣した人がやさしい人になり
茶を立てて人と争うこと忘れ
散る落ち葉夢抱かせる一茶の忌

尼崎市 奥山 美智子

雪しぐれひとつの愛で満ち足りる
冬火花 酔えない酒を飲んで
よっぼどの事かしきりに口にする
ふたり舟 思い止まることはない
冬景色 夢のながさをそこはかと

竹原市 森井 菁居

毎日が火中をくぐる現役で
やぶれかぶれになつたら冴えるテレパシー
ひらめきをつなぎ合わせて茶房出る
ハイウエーの何処かにきつと落とし穴
地球儀も知らない地球破滅の日

岡山県 小林 妻子

三猿を誓いお腹が減ってくる
団欒も少し悲しい雪積る
死に真似で年の瀬だけは越しました
家も名も捨てそれから本物だ
裸足でも消費税だけいただこう

京都市 松川 芳子

一言が多いと思う老婆心
その先は言わず互いの胸のうち
長生きをして逆縁の刑を受け
根回しをせつせと二十一世紀
自分史の老後を飾る舞扇

七尾市 松高 秀峰

国会も三点セットにもめている
クラス会羽織袴で来る男
影法師深々垂れる初詣
ひと呼吸待てば名案浮ぶはず
金もなく責任もなく寝正月

五所川原市 加藤 彩人

落ちりんご賽の河原の石に似る
落ちりんご無念の涙が土葬する
地獄にも札束好きな鬼がいる
米びつが空で天下取る話
本当の男 中身で勝負する

高槻市 川 島 諷云児

この齡に未練はないが休肝日
存在を知らせるために手を挙げる
鈍行に乗り換え余命引き延ばす
ごきぶりも俺も必死に生きている
定年の猿に手綱を緩くする

八尾市 古 川 覚然坊

死に神に正月の無いカーブム
孤老生活晦日元旦区別なし
人生の誤算晦日の重い足
見たような顔だと猿に見詰められ
人間と出逢って猿は悪くなり

姫路市 中 塚 遊 峰

ちと遅い種を播いてる老母ひとり
逝く秋を惜しむつわ花坪庭に
失言と詫びて本音はしまつとく
愛憎を背中で消して寡婦も古希
石橋を叩いた余生佗しすぎ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

行列の中に不安な僕がいる
モヤモヤを洗ってくれたブナの森
詰め甘い王手を妻がかけてくる
壮大なドラマ母さんとの出会い
忍ぶ地がいくつかあった母の章

奈良県 長谷川 春 蘭

秋の雲縹渺として街遠し
そして今愛の惰性か老いの恋
振って見て土鈴の音を耳で買う
この逢瀬電車が来れば来る別れ
余生なお句の杖しかと握りしめ

弘前市 肥 後 和香子

決めました騙されましようレモン噛む
傷つける言葉は一つ「イイ人ネ」
青春に愛し抜かないつけ大き
イブセンのノラを住まわせ君を待つ
一二〇%の幸福の中死を想う

広島県 田 村 新 造

風葬のごとく裸に戦友を剥ぎ(雪のシベリア)
ふるさとの夢でも見よう雪しきり
望郷の胸かきむしる冬の星
シベリアの脳症食べる夢ばかり
粟粥の分配で揉めなぐり合い

海南市 三 宅 保 州

君を抱くために生まれてきたのだよ
抱くときは共に溺れる覚悟です
猿芝居とても人間臭すぎる
肖像画描くと亡父の顔になる
男には真一文字の口がある

鳥取県 さえき やえ

もうけにはならぬわらしも履いてみる

にがい葉のまされ命つないでいる

三足のわらじをはいて主婦をする

付添うてやがてわたしも呆けてゆく

ふる里の駅にゆれてるタブレット

和歌山市 細川 稚代

ほんとかな夕べあなたに聞いたこと

浮かれても所詮一人の影法師

血の濃さがしんどいなどと言わせない

天災も人災もあり不眠性

初霜をうけて甘みの増す野菜

出雲市 金村 青湖

母の手に土が生きてる寒大根

初日の出拝す漁夫の背の曲がり

海鳴りの確かさ年の改まり

里の海 離散家族の噂絶え

漁火の没してしばし冬の海

西宮市 西口 いわゑ

新聞のチラシも暮れの顔でくる

すれ違うものに音あり十二月

十二月 地球ゆっくり回ってる

三面鏡 女の歴史受けつがれ

その後の飲むニュアンスでついでゆく

和歌山県 天満 三千代

気のりせんままに乗ってた口車

やりなおしきかぬ命の洗濯だ

行末はどうあれ今日のすばらしさ

ないしよ話が四方八方とびまわる

二つ三つ消した跡ある日記帳

静岡県 藪田 獏 沓

歩行器でなお見る意欲眼の手術

相部屋に女の見舞い多い人

ふと漏らす愚痴が幸せそうに見え

追い風にのって一代社を興す

ふる里をダムに平成枯すすき

鳥取市 両川 洋々

青ばかり減るクレヨンで夢を描く

ふる里の風へ仮面はきつと脱ぐ

この貨車も檜山行の番らしい

人格がへソから下に見当らぬ

千の目をだますむなししい嘘でした

岡山市 川端 柳子

出会い触れあい旅になさけの二つ三つ

看護婦をがんばる夫の一大事

美女と野獣 見舞の花束抱いてくる

かけがえのないのは父母の破れ傘

するすると疑惑ほぐれた縦の糸

京都市 都倉求芽

黒石市 相馬一花

元旦の鏡に今年は母が居ず
行きつくは同じ男坂女坂

年の瀬を妻のリードで百貨店

経済安定か知らぬが0の多いこと
しばらくは手がつけれぬ地図出版

お多福が居るから楽しい初笑い

姫路市 丁坪サワ子

来年の約束してる古稀傘寿

女の子欲しと五人目産む勇氣

夢喰う虫居てくれました娘に縁談

騙されて騙されて弾む母の毬

ブランドはどうあれ母の手編み着る

和歌山市 青枝鉄治

亡き母の教えが生きる数え唄

錦着て帰った里はグムの底

小さな男の好きな黒めがね

保証印押すとぶっつりお世辞消え

女ゆえのいくさもあってシヤネルの5

米子市 新正子

握る手にわたしの思慕を解き放つ

わたくしを包んでくれる糸電話

繕った影をたたんでから眠る

虹の橋渡って魔女になりましたよ

迷信を捨て切れないでいる案山子

地獄にも隠して持参するお金

ネクタイを隣の妻に褒められる

息吐いて滑るとスキー巧く見え

義理チョコを貰えぬ夫に妻が買う

米子市 金山夕子

つなされた鎖に少し慣れてきた

弁当を包む布地に凝っている

弱いものにより弱くなっているポスト

仲良しゴッコ オミヤゲゴッコ楽しそう

王様の踊りそろそろ飽きてきた

竹原市 時広一路

天秤を借りねば違いわかるまい

人工の地下の流れは知らぬ雨

日の丸が無ければ万国旗とは言えぬ

ライバルを失い足が疲れだす

テトラポット瀬戸の海しか知らぬ幸

広島県 藤解静風

年輪のわかる言葉が肚に沁み

ぜいたくな願いでしょうかぼっくり死

一段落してコーヒーのいい時間

忘年会辞してひとりの灯にもどる

大正琴ごときに妻を奪われる

和歌山市 福井桂香

片便り書きつづけたい人がいる
雨の日はあめの心で聞くりズム
愛されて抱かれ上手になる人形
勤のよい女で少うしくたびれる
いつとても愛想笑いが出来まへん

岡山市 荻野 鮫虎狼

十二月妻の素顔が美しい
焔方の妻も酔うてるお元日
居候へ葱の青さが先に煮え
輝がある愛人の手の温み
同窓会ブスが指輪を嵌めて来た

和歌山市 山田 高夫

どの道を行こうと磁石北を指す
来ると邪魔来ないと寂し孫である
効くという暗示にかけるコマージュ
血圧が高いと老妻が言い触らす
生活の知恵貧しさのためにある

鳥取県 江原 とみお

岬では驚くほどの声がある
手籠めにしても思ったときもある
太陽の裏で交際しています
驚いた振りしてくれる友がいた
小銭貯めていたとむらいの裏ばなし

豊中市 吉田 あずき

一二三大きく心広げましよ
自分の輪で回り出してる酔心地
言い訳の整わぬうちタクシー着き
約束は皆破られて老い一人
薔薇を描く薔薇の美しさが判る

寝屋川市 堀江 光子

ふぐ鍋を衆議一決見合せる
途中から時雨とともに行く嵯峨野
病む人の鋭い勘が慌てさす
無礼講にもおのずからある作法
煤払い済めば灯のいろ春を待つ

岸和田市 芳地 狸村

ダイバーにジンベイザメが戯れる(海遊館)
窓際の男も理想持っている
灰釉にこころとられる備前焼
百態の狸に迷っているみやげ
なんとなく利口に見える女文字

八尾市 山下 美津留

光射す明日にしたい猿と居る
反骨の猿になる気の屠蘇を酌む
愚痴いっぱい持った男に突当たる
業深い女が闇へ走りだす
かけ声に弱い男で活けを買う

姫路市 大原葉香

ちぎれ雲絆を捨てて風に生き
見舞客みんなきれいな嘘を言い
記事ニュース路地裏までもしのびこみ
方言が段々風化する団地
数え年相手次第で使い分け

大阪市 井上白峰

欲と影吾が人生につきまとう
憧れの椅子で冷たい風に逢う
捨て駒の謀反巖しい王手飛車
任されて叩いた胸が疼きだす
充電が過ぎてロレツが回らない

加古川市 吐田公一

終つてもいい頃だろう子守唄
意地を張る母は甘いと知りつくし
埋蔵文化昔の知恵を探るへら
終戦の痛みを分かつ孤児と母
新米の気持にさせる二度の職

岡山市 山本玉恵

ときめきを压えた指でドアを押す
追憶をまだ捨て切れぬ花しおり
台所で妻が煮つめている本音
二つ目の仮面脱ぐのはこのあたり
都合の良い事ならゆるるイヤリング

大阪市 北山悟郎

健常者の愚痴しきり聞く身障者
人権を隠れ蓑にするタニが居る
高利回り拝金の欲が度を外す
うだつが上らず背伸び疲れ果て
こぼれ陽が僕に開眼させてくれ

河内長野市 井上喜醉

無気力へ怖い余生の風車
善人の仏ごころが裏切られ
夢走るだけで楽しい雪の宿
ひと言で断る主婦のインターホン
葬式と見舞が続きグロッキー

米子市 茂理高代

二次会は息のかかった花ばかり
わだかまり踊っていれば解けてくる
満たされていると短い砂時計
陽の当る場所に机おいてみる
満天の星が濁くと雪になる

岡山市 井上柳五郎

自惚れと見栄いらぬ金使い合い
いらん世話だった助言でまたもめる
判決は無罪 犯人ない悲劇
懐古談酒杯もはずむ夜も更ける
健康法猿知恵もよし老いの初春

富士宮市 渥美弧秀

回復へ晩酌がつく生きてるぞ
独り酒旅の妻から弾む声

晩年の夫婦に富士は温かく

二ヶ月の寒さ吹き飛ぶ富士見酒

炊事の手弾むハミング早春賦

竹原市 岡本清水

食べられる身の反抗か河豚の毒

幸せは五体無欠の農作業

茶の席に和む心と端正と

八通りの果樹植えてあり四季の味

訪う事と思えば安し長電話

今治市 野村京子

埋葬は波にまかせてカモメの死

紫の闇にシヤネルの匂う乱

女とは他人の窓をよく覗き

終章の我が身を思う冬の蠅

お月さまに恨みつらみを聞かしてる

和歌山市 田中輝子

散り急ぐ花にも花の旅があり

目の位置にダイヤが光る初対面

守備範囲守り批判がきつくなる

脚光を浴びて修練の続く坂

一枚の名画でしたね橋の上

吹田市 山本希久子

閉じ込めておいて民話を生んだ雪

街へ出て帰らぬ子らを待つ灯り

占いがはずれて人の来る日なり

空は灰色 原因不明の熱が出る

人混みの無関心さに救われる

鳥取県 西原艶子

嫁もらうまでは息子へごほんつぐ

常備菜こころの傷へ届かない

姑退院今日一日は丸く住む

華やいだ後の孤独が深過ぎて

校則をはみ出す勇氣まで育ち

出雲市 久谷まこと

春風に開いた胸がしゃべりだす

振り返る度にふくらむ恐怖心

感情をむき出しのまま画布に塗る

今日からは酒で消したい過去の夢

定退の孤独を雲が風が呼ぶ

鳥取県 土橋はるお

恋をして犬が鎖を切っている

子分の方が女にもって怪しからん

いい顔をした崖石が積んである

ポリーナスの話聞くのが阿呆らしい

大根の首を切るのが怖いのも

鳥取市 小谷 美つ千

阪南市 坂口 公子

先を読む男より先に眠るべし

土壇場で被つてられない鬼の面

ひいふうみい逢うも訣れも風の中

平凡に泳ぐ手はない赤い靴

奥歯をかんで母は疑うこと知らぬ

有り余る知恵が拾うた黒い靴

鉛筆を持つといねむりしたくなる

好調と言えないときの高笑い

ここから安らぐ父の腕まくら

吉報へ目つぶし食つた計算器

島根県 石田 清泉

香川県 木村 明人

万歩計おトイレ序に数に入れ

未だ燃える父ちゃん髪を染めて居り

週休二日疲労感まで倍にする

ストレスを赤提灯へ消しに行く

長命の血筋を信じて趣味多芸

死ぬ時も金で序列が決りそう

胆石とコレステロールの根比べ

冗談に本音も少し混ぜて置く

寝静まる頃からファイト湧いてくる

来世も一緒とも思いコリたとも

藤井寺市 福元 みのる

鳥取市 美田 旋風

気楽さも毎日ならば鬱になる

ローマ字で初めて読めた旅の駅

ひとり用土鍋役立つ妻入院

落人の村で暮らしの知恵学ぶ

宿題は母さん遊ぶのは父さん

子に車とられ自転車磨く朝

出世欲棄てた頃から惚け始め

本堂に寄付の序列が書いてある

ラッシュにも馴れ人間丸くなる

過労死に遠い窓際でも困る

西宮市 秋元 てる

名古屋市 越村 枯梢

好きな酒好きだけ飲んだ仏さま

ゴール近く最終ラウンド杖だより

かと言ってビールも駄目な無粋者

「妻にて候」二男がおんな連れてくる

蘭鑄の泡退屈な王妃さま

注射打つナースは孫と同年

母老いるキャリアウーマンの娘に仕え

涅槃まで長し短し床に伏し

玉野市 小谷 仙山

動かざる信の一字と柿の色
雑草をうらやむほどに落ちこぼれ
初光この平凡を何時までも

鮮やかに散って悔いない柿落葉

宇部市 平田 実男

還暦のまだ登らねばならぬ坂
素人の手品疲れのひどい鳩

仕合わせに浸り仕合わせ考えず
居士大姉やと孝行出来ました

町田市 竹内 紫鏑

ワープロの刷りぞめ賀状さかさまに
辞書につく手垢も税が追う仕事

老人パス今日はどこまで行ったやら
不惑ではポジ 古稀ではネガの顔

松山市 谷 真風

親子の愛 弁慶 玉虫 小玉虫(テレビ映画武藏坊弁慶)
米寿の友へ祝いを言いに今日小春

健康なおしゃべりがありがたい家庭
庭の花自慢を聞いてあげ貰う

倉敷市 稲田 豊作

行動派の中におちよこちよいも居る
大学を流石出ている知能犯

スーパ―が出来て家計簿赤になる
働いたお金を妻に拝まれる

唐津市 浜本 義美

薬を打つ人がまだ居る注連飾り
御仏を拝む木魚の音も春

明日がある明日があると髪を染め
ブラジルからの便り従姉が生きていた

唐津市 浜本 ちよ

まだ続く噴煙のろし何時降ろす
風向きはどうあれ善人前向きに

どんぐりの生活で近隣仲が良い
雑木は繁り手入れの木は倒れ

唐津市 山口 高明

この島で朽ちる覚悟の四度の初春
清く正しく生きておとこに縁が無い

業落す雨にうたれて奥の院
もう独りの僕が抱いてる不発弾

唐津市 筒井 朴竜

産みたての卵で今朝が蘇り
新大臣秘書の手帳が振り回す

スケジュール手帳いっぱい今日を駆け
明神さん仕える曳山の唐津っ児

諫早市 原田メイシユン

台風一過普賢は何日終るやら
忘年会上座に座りのぼせ呑み

呑みすぎて一つ覚えの安来節
先生と言われてその気で呑む阿呆

東大阪市 崎山美子

汗と涙下地にピエロの顔つくる
頑固だが明治の父は義理がたい
同じ傷もって相手の痛みしる
疑っているらし妻のすまし顔

岸和田市 清野こう

単車の子帰り待ってる間の不安
洗いざらい打明け胸を撫でおろす
柳友の訃報しみじみ見る写真(あいきさんの死)
祖母達者 電話はいつも留守ばかり

岸和田市 原 さよ子

来る年に期待を込めて燃えている
味のある言葉何度も口ずさむ
うそつけぬ自分時には憎くなる
万両の紅冬の庭を乐しませ

和泉市 西岡洛醉

寒ばたん飛鳥に王朝の香り蒔く
ワープロに水茎の字が見当らぬ
仕舞風呂妻は謀反を流しとく
猿真似が上手で夢の無いお人

島根県 藤原鈴江

いつの日もそばに居たいと思う人
一身を犠牲に生きたひとり言
目に見えぬ糸が操る人の世や
生きてゆく幸せ川の水涸れず

島根県 北川民子

スパイスが効きすぎました愛の鞭
松茸も八百屋さんでの話だけ
繕いのできぬ十指よ秋の冷え
湯上りの体操夫は目をそむけ

羽曳野市 吉川寿美

優先席ゆずってくれた日のシヨック
常夜灯亡母のところがわかる齡
ユトリロの街もひっそり秋深む
仮退院時計のネジを巻き直す(夫仮退院)

岡山県 千原理瑛

節目節目を大切に生きてゆく
胸中にとげ一本ささったまんま
足にマメ心に闘志完走す
ふしあわせ支えてくれる血の絆

貝塚市 行天千代

老いの目に裸写真馬鹿らしい
念願の黄色のバラが咲きました
木枯しに耐えて年越す枇杷の花
仏滅だ外出するのは明日にする

河内長野市 植村喜代

寺の庭座ると秋が寄せて来る
三割引き無理に買うことない物を
山添いの雨が山添いの雪に入る
国会の暴力やめて子が見てる

鳥取県 津村 八重子

気の強い母にもあった涙つば
世の流れ四季折おりの詩がある
夢すてて歛と歩んだ半世紀
娘も孫も帰りやれやれ腰のばす

岡山県 岩道 博友

嘘を言うマイクの音量変えている
三猿が今年の運勢対話する
着飾ったスタイル他人の時間取る
責任感少し忘れて風邪と言う

堺市 一瀬 福一

朝寝して怒った顔が起きてくる
一年の計になかった手術台
ぜいたくな都会で売れる握り飯
食べるだけですと立派な蔵を建て

出雲市 小玉 満江

町内にうでぐみが居て嫌われる
気の毒な話と夜汽車乗り合わせ
地下茎がこんなに深い仲たがい
ふまれても一円玉に意地がある

出雲市 小白金 房子

罪一つわびて写経の灯に座る
母となり男となつて寡婦の意地
飼葉桶ころがし牛の息荒く
牛代金神へ一夜の夢を置く

出雲市 板垣 夢酔

おでん屋で呼ばれる社長たかが知れ
酔うて出す名刺に誇りなどはない
クラス会離婚した友みな奇麗
入浴に陽は海原へ身を沈め

鳥取県 谷口 次男

マドンナが表通りを往来し
政治家もヤクザも同じ顔に見え
借金を払いに行つて午前様
イヤな世を山下清が救います

和歌山県 岩崎 瑞穂

因縁の宿痾前世の償いか
億のつく土地とは知らぬアワダチ草
達者すぎ盥回しの母の日々
若き日の不満埋めたい老いの旅

加賀市 細呂木 魯木

失意の日ふと誘つてる森の闇
今日だけは弥陀も苦笑のクリスマス
飽食の上塗りおせちの豪華版
ニューモード追えば休日少すぎ

弘前市 村田 善保

七癖も八癖も見抜き和を保ち
還暦に新たな彩を溶く絵皿
一本の縫った藁に神を見る
行く川を見つめ少年の貌となる

豊中市 辻川慶子

モンタンの枯葉ながれる珈琲店

スポーツ紙隣の顔が覗き込む

おでん鍋今日の話題も煮えてくる

反省と努力で貰う猿の賞

大阪市 坂本仙吉郎

山近く海近く小魚釣りや茸狩り(望郷の句)

城下から高浜街道松並木

米どころ勝鬨という地酒あり

伊与節の朝市の町三津ヶ浜

羽咋市 三宅ろ亭

見てくれは悪いがなかなかの器量人

専門はと問えば化粧の心理学

ツンドク丈はんもの学者とはいえぬ

フンドシは健康おシヤレで見直され

大阪市 渡部さと美

冬を越す関所と思う風邪寒波

後継ぎを生んで後継ぎどこも無し

いつからか息子の視野にいるらしい

朝闇のあいさつ同じ万歩計

五所川原市 加藤彩人

雪は愛 忍の一字を教えこむ

たかが女されど女の掌の温み

うぬぼれをがつんと砕く父の槌

美女という皮一枚にある値打ち

鳥取県 羽津川公乃

障子張るピシッと決まる冬の景

打ち合わせ通りに包む義理一つ

醤油工場見た銘柄が好きになる

へそくりでときどき赤字埋めている

鳥取県 乾喜与志

赤い椿に初雪もたわむれる

よろこんで王子が障子破っている

裸のひとと君が代うたう千秋楽

炉辺暖話からくち酒にイワシ焼く

米子市 川上より子

温泉につかって止まるやじろべい

手品師の老父は時を止めている

ポケットがしゃべる夫の日曜日

灯を消してこれからお母様に逢う

大阪市 寺井東雲

大国になった国民不安がり

松の虫寝かすこも巻用意でき

ローン止めボーナスあてにできぬ額

証人を呼べば結論出るやろか

鳥取県 上田俊路

ひと波乱あって二人の愛戻る

同情が過ぎて愛すれすれにいる

台北で西門町の灯が招く

戦陣の雑煮の味が懐かしい

大阪市 富岡温子

和歌山県 寺田裕美

甘言のちよつとに負けてからの仲
次の頁開く楽しみ持っている

いい事を孫が言うから欲が出る

鋭さは抜けたが丸い老いの日々

川西市 松本 ただし

網膜の中に生きてる七回忌

古地図に朱線引いてる置こたつ

この先に団地が出来る辻地蔵

害虫も天からもらった命持つ

伊丹市 梅田 宣司

鐘の音暮れるに早く高瀬川

灯を寄せて易者がこわいことを言う

好きやねん道頓堀の灯も寄席も

大ジョッキ女は弱き者ならず

箕面市 椎江 清芳

こしひかり食べた雀が昼寝する

貸し衣裳昨日他人の着た喪服

舞台裏ピエロの鼻が落ちていた

諦めに似た留守番の犬の顔

鳥取市 前田 一枝

犬猫もスターになれる顔を持つ

叱るのはよそうと思う児の寝顔

へそくりがたまつた頃に歯が傷む

一つなと効いてくれるか薬づけ

如来様の御手に乗れるは幾人ぞ
絵の中の柿が熟れてるうれしい日
めつたなことで人差し指は使えない
並んだらきつと負けると思ひこみ

米子市 光井 玲子

皿だけは洗つてあつた妻の留守
老母の膝猫と毬とが寄つてくる
大切な心の中の貯金箱

海ねこの指定席かな神の鳥

米子市 白根 ふみ

年金でサンタクロース暮れのこる
炬燵からおとぎ話が出るあそび

やがて冬 春のドラマがよぎり出す

懇ろにこなして行こうのこり火を

倉敷市 井上 富子

福耳に今日も聞こえる笑い声

来る年へ倅せくける春小袖

心情を汲めば眼鏡にたまる露

堤防を破る日もあり女川

大阪市 松尾 柳右子

検査した結果良しとて薬くれ
年金はまだ貰わぬとハリあんま

ファミリーに三猿揃う二月です

湯豆腐に漬物あれば事足りる

静岡市 安本 晃 授

頑固さが売り物父は喇叭卒
一言が妖精となる種をまく
もう一つの生き方がす妻の足袋
虚無感の沸騰点にある美学

倉吉市 淡路 ゆり子

小銭ジャラジャラ祭はとうに済んでいた
生まれ順あって小指も我慢する
煙草を止める勇気を妻に試される
満期のお金なんだかんだと持ち帰り

大阪市 塩田 新一郎

冬將軍時將軍に巻いた旗
馬鹿話しながら齒科医奥歯抜き
庭石に話しかけての日が暮れる
こんな世は死にたい者は死ねば良い

出雲市 石倉 芙佐子

鬼千匹出てから広い家になる
一匹の鬼が残って指図する
意地悪な鬼より怖いからっ風
鬼女の面外して眠るひとりの夜

弘前市 小寺 花 峯

雪の降る日は選挙などやれませぬ
信頼の仮面は重くはずせない
念仏を唱えて頭軽くする
ひらがなで語る恋の優しさよ

吹田市 栗谷 春子

小六月千本釈迦堂湯気の中
みじか日を思い出したり忘れたり
連休のおとこ男の影がない
人恋わぬなんて嘘でしょ冬の月

倉敷市 田辺 灸 六

泣きに来て明日への砂を握りしめ
橋架かる島がふれあう瀬戸日和
すがりつく机が冷える入試前
皿模様透けて無口の刺身フグ

島根県 石飛 水 煙

放浪の旅にも希望持っている
どん底に落ちて開眼するもよし
人間の不信人間いる限り
洗髪迎える春へ恙無し

大阪市 榎本 露 児

宗旨替え明日から妻を拝みます
土地の人富士が見えても見えないでも
コインランドリー子供をつれた男来る
チューリップの球根春を約束す

吹田市 井上 照 子

まだ白髪隠して女たらんとす
茶柱が立って活動的になる
前世の約束姑に尽くさねば
正直がもう売り物でない時世

伊丹市 山崎 君子

思いきりはめはずしたい暮れの町

お歳暮に注文つけてくる電話

宅急便一つ一つにある情け

掘ごたつ隣の足が気にかかる

西宮市 瀬尾 六郎太

武家文化匠の技の東照宮(日光詣で)

手打ちソバ棒の動きでうまさ増し

銀杏の木雄雌交互秋深し

七五三お色直しも出てきたぞ

茨木市 堀 良江

生命呼ぶ小さな滴り陽に透いて

討ち入りがすめば第九へゆずりませ

みあかしがかすかに揺れて餅豊か

探しもの出てこぬままに年明け

島根県 高野 律子

小走りの老母を追ってる枯れ落葉

消しゴムで消せない過去が二つ三つ

幸せと言っても別な愚痴もある

バラが散る心残りのないように

大和郡山市 坊農 柳 弘

泣く武器はもう捨てました五十路妻

風紋の薄い砂丘へ旅の黙

暖冬でスキーリフトも空回り

食べ盛り晴着の帯に物申す

福岡県 横地 正好

正月の笑いの渦に母が居る

空揺れる漸く着いた母の旅

健やかな喜寿がペダルで口ずさみ

いたずらを叱る叱らぬ使い分け

鳥取市 春木 圭一郎

にくい人恋の残り火まぜにくる

休日は損得抜きに遊びたい

主婦業に慣れて皿数減ってくる

あちこちに焼け木杭が置いてある

島根県 佐々木 芳正

涙腺のゆるむ話へ女寄る

子の寝息妻の言い分聞いてやる

親爺の海に浮かぶ子の舟母の船

雑踏の中へ美人を見失い

鳥取県 幸家 單車

故郷の風が私に温かい

三猿の掟を破る情報化

保護色になって味方の列にいる

甘い香に迷った蟻が列みだす

鳥取県 西川 和子

三高の揃う釣り書き没にする

お付き合い義理を贈れば義理が来る

めちやくちやに走ってゴール見失い

これが縁ばたばた嫁に行きました

大阪市 町田 達子

住み慣れて買物好きが行く都心

紀伊国屋の雑踏「血族」買って行く

故郷便今年も健康チェックする

第九聴く思う人あり遠い日よ

和歌山市 山川 克子

非道い目におうてからです無口です

ワイ談の好きな男で憎めない

夢醒めてみれば語るも阿呆らしい

泣きにきたおんなを抱いた薄い胸

岡山県 池田 半仙

急ぎ足出来ぬ腰痛にも困り

とんとん調子に乗れてふと不安

十二月年金の額同じだけ

強情は弱さのカバーかも知れず

境港市 細木 歳栄

クランケもナースも十色医師然り

医師は皆我が子のような人ばかり

高鳴りを押さえて君に茶を点てる

国税の還付嬉しくまたわびし

鳥取県 石尾 かつ乃

算数が解けて嬉しいランドセル

大空を泳げと風の糸を張る

顔が利く父に背いて霜を踏む
めちやくちやの孫台風に長居され

富田林市 片岡 智恵子

湾岸であけ雲仙とバブルはせ

水ぐるま止まると疼く傷がある

冬抱いたままで流れる西の空

習性へ鮭の哀史はまだ続く

堺市 柿花 紀美女

生きるこつ時には別な人となり

年ごとに足ばやに来る十二月

無責任な事を並べる評論家

除夜の鐘まだきまらない子の進路

和泉市 岡井 やすお

両方が謝る気持なら終る

休め休め素直にうけて後れとる

好投の陰に姉さん女房捕手

京の寺空から観るもよかろうて

八尾市 吉村 一風

物指しを変えて見直すことにする

鍋ぐつぐつおしゃべり一寸やめにする

理髪屋の話つぎつぎ多彩なり

ターゲット下げて暮らしの目を変える

大阪府 榎山 隆

空気では無いとつくづく妻の留守

麻雀をするつきあいの換気扇

凶鑑しか虫を知らない塾通い
ミス日本やがて三段腹になる

師走には師走の歩き方になり
分かつてはわからなくてもする拍手
ペットの領域こえて成長した別れ
その事はいわずにおこう雪つもる

守口市 結城 君子
島根県 加本 義良

焚く煙ドラマも失せて秋残る
どん底で仇な小鬼と握手する
味噌汁が口に合っている内助
白い髪十二月八日を語り継ぐ

守口市 森 川 まさお

おでん屋の大阪弁が幅利かす
人好きのする人粕汁二杯食う
暖冬をもて余してるアルバイト
マスクすればブツブツ呟く癖がある

寝屋川市 平 松 かすみ

だんだんと可愛い鬼になる夫婦
医者きらい保険きらいで生きている
ふらふらの日本を留める釘がない
奥の手は十七文字のペンの鞭

竹原市 信 本 博 子

キューピットの矢を向けられて不整脈
ロッキングチェアみそぎのようにぼたん雪
古里へ続く道なりハイウエー
そろそろと夢の積木へ手の震え

出雲市 竹 治 ちかし
車窓見る妻が少女になつていく
家や子を気にして妻の旅終える
子の背押す風は父なり母なりき
感謝する心が湧いてからの老い

和歌山県 西 口 忠 雄

言うたあとときよんとしてるのは魅力
政治家の大風呂敷に穴があき
妻騙すついでに姑も騙しとく
悪意なし善意もないから恥もない

岡山県 花 田 たけ志

不手際を夜半の寝覚めがまた責める
堂々と言えぬ弱味にさいなまれ
銭金になれば出て来るエネルギー
消費税バブルのつけを負うでなし

池田市 岡 本 吉太郎

何もかも知った顔してほけ始め
ついうっかり口がすべって老いさびし
それぞれの思いを青い山脈に
口だけの親孝行でもほしい日日

宝塚市 吉 田 笑 女

血の絆時にのびたりちぢんだり
七十の坂道風に誘われ
又聞きの噂大きくふくらませ
辛苦してやつと通した針の目処

大阪市 中西 兼治郎

減刑に他人が力寄せてくれ
プライベート他人活字にして騒ぎ
新世界日銭をのんで酔いつぶれ
倅せにしますと男みんな言い

大阪市 上田 柳影

十二月猫も昼寝は許されず
よく笑う友本心は淋しがり
他人には言えぬ話を聞かされる
単身赴任の夫を送る駅の雨

奈良市 米田 恭昌

性善説無人売場の盛りみかん
七五三家紋の重味など知らず
身内より他人につくす心意気
手加減はしないママのヒステリー

仙台市 川村 映輝

米寿迎え目標二十一世紀
顔を拭くタオル新品初日の出
鉄のカーテン遂に完全破れたり
忘れること忘れ得ぬこと忘年会

倉吉市 渡辺 菩句

お裾分け大根は泥ついたまま
すべり台そこにあるから滑ります
葉切らすと死ぬぞとドクターのたまわく
生きているうちに花実は咲かすんよ

鳥取市 武田 帆雀

孫と寝て見事な地図を背に貰う
嫌いではない酒 妻の忘年会
妻の愚痴聴こう禊がまだ済まぬ

鳥取県 乾 隆風

陣羽織みそぎしたとは言えないね
床の間に一升瓶を飾っている
古稀の戌ことしの申とおだやかに

十和田市 阿部 進

背伸びしたとたんに足をすくわれる
無人駅善意の鉢の花香る
古里に素直になじむ道がある

大阪市 岡田 ふみ

迎春の折目正しい老夫婦
スーパ一の野菜売場に四季がない
疵に玉探して友だち賞めてくれ

大阪市 清水 利武

好奇心何処か似ている俺あいつ
もたれ合いながら夫婦の日を重ね
シングルベル平和な街を騒がたて

鳥取県 山根 八重

王将に負けぬ貫禄歩にもある
昇格にまだ貫禄がついてこず
母の手が笑顔忘れぬ飯を盛る

芋粥を作ろかぼたん雪が降る
バカになる顔ただいま研究中
女系家族なにが不足か縁がない

鳥取県 田村 きみ子

鳥取市 岩原 喬水

三猿は無用にしている夫婦仲
諸行無常そろそろ経も覚えとく
胃カメラに医者言葉を待つ長さ

大阪市 神保 拓生

往診の途中で医師がくすり飲む
病窓をゆっくりよりよぎるちぎれ雲
集金に来てすき鍋の匂い吸う

大阪市 松永 すすむ

晩酌の量きめて呑むあじけなさ
いやしいと思いつつのむコップ酒
言わでものことは言うまい酒の席

豊中市 三宅 つえ子

目の高さ変えて笑いを取り戻す
白鳥の飛び立つ夢にペンを取る
時として耳樂しますほめ言葉

岸和田市 三輪 通彦

年金になって夫婦の歩幅合う
憶測で物をいうからもめてくる
身に覚えある相談に知恵を貸す

農民の耳の鼓膜を破る声
噂には誰もがうさぎの耳を持つ
鬼門など無いマンションが建ち並ぶ

豊中市 江口 明光

鳥取県 黒田 くに子

何げない所作へセンスのあるお人
娘の仕種わたしの昔見るような
せかされて服のボタンが止まらない

豊中市 滝北 博史

傷のある女とばかり見合います
対岸はアメリカだけでない日本
お互いの影はとづくに仲直り

和歌山市 北山 好笑

宝くじ夢という名の落し穴
ご指名がなくてふくれる喉仏
もち肌の甘い誘いに負けた石

尼崎市 田中 薫

初芝居お寿司の折は上にする
花道を入ると十年経過する
七三で柀頭を打つ死出の旅

香川県 成重 放任

あの患者この患者とて得意客
安らかな寝込みをおそう不意の客
想い出も胸に収めて北の宿

茨木市 藤井正雄

ナンバー2乾杯だけの役がつく

竹トシボ見事に飛んで寺の屋根

味噌汁の香りの中に母がいる

川西市 野村静雄

匂のものを添えて肴が生きて出る

故郷の父少し遠慮をして帰り

正月はハワイへ行つてみんな留守

京都市 渡辺圭坊

何日も経って無性に腹が立ち

ライバルが大差をつけた年の暮れ

紅葉も散って天地は冬の章

尼崎市 住谷石舟

うしろ髪ひかれる孫が泣きわめく

足早に乾いた音がゆく師走

男一匹ひとりになってから泣こう

出雲市 伊藤寿美

煮ごこりが大好き遠い囲炉裏ばた

日溜りの中でポックリ死んだ母

味噌部屋に亡母の漬物石がある

箕面市 中嶋田実子

雪しんしん邪念を浄化するようにな

褒められて列から少し押し出され

立たされたままで運賃また値上げ

竹原市 岩本笑子

おめでとう子がいて夫がいて初春よ

レモンティーゆっくりくしゃが溶けてゆく

苦しみも時計のネジもゆるみだし

藤井寺市 中島志洋

盆梅を誉めて切り出す願いごと

柳に風賢い嫁の生きる知恵

鬼の居ぬ我が家仲良く豆を食べ

黒川紫香句碑建立募金のお願い

本社副主幹 黒川紫香先生は永年、川柳の普及と向上に貢献され、先に尼崎市文化功労賞を受賞されましたが、このたび先生の功績を永く後世に顕彰するため句碑を建立することとなりました。敷地は尼崎市大井戸公園で、左記要領により句碑建立の基金を広く本社同人ならびに各地柳友から募集したいと存じます。絶大なご支援をお願い申し上げます。

黒川紫香句碑建立実行委員会

記

一、賛助金 一口 二千元（何口でも結構です）

一、締切 平成四年四月十日（四月中に除募予定）

◎ご送金は現金封筒、小為替、郵便振替等で実行委員会事務局へ

〒601 尼崎市武庫之荘五―二五―一七（春城武庫坊方）

振替口座 大阪九―二三六四七（春城 年代宛）

自選集

恒松 町紅

大正とそりが合わない青リンゴ

茶話を梯子している冬の陣

跡取りが決まらぬままに除草剤

片べりの靴にも老化しのび寄る

お節介の癖が治らぬ総入れ歯

高杉 鬼遊

大正生れ節分のみめ掌に余る

冬を越す金魚に春がまだ来ない

容姿端麗そうでないのも雇われる

老人医療 福祉課に用があり

流れ着くさほどに遠くない岸だ

工藤 甲吉

アメリカが来るくるコメでやってくる

飲まれない食われなから義理を欠き

雨だ風だとサボってる一万歩

読みたくもなし書きたくもない 欠伸

美しく老いることなど考えず

谷垣 史好

ちっぽけなことかもしれないぬ生も死も

M寸がだぶだぶこれが現実だ

鍵束ちやらちやら親身なのは一つ

欠伸して猫の時計が回り出す

地球儀よ平和な時があつたかい

正本 水客

口下手を口実にして我を通す

話好きな人だと笑顔しまい込む

近い将来を語る男の眼が光る

さわやかに女盛りを逆立ちし

駄目押しのもりで余裕みせておく

本田 恵二朗

霜枯れをさせた手落ちを自嘲する

開眼を願う座禅で眠くなり

披露宴超特作のめおと雛

里ごころ乗せておくれよ流れ雲

和を保つ秘訣教えてくれた亡母

ノッポビルは嫌い坊さん頑張って
治るなら万の鶴でも折りまっせ
通天の紅葉も二人で見ればこそ
そういえば着物物四五年着てません
白樫一輪 卒寿の母元氣です

松川杜的

金井文秋

歩くのを趣味にしている万歩計
すぐ鼻へ落ちる眼鏡をもてあます
義務果たしたようにおせち出来上る
ストレスがたまり尖った声になる
おしゃれする分はパートで儲けます

月原宵明

五つ若く言って女を喜ばす
ゴルバチョフ共同体でクビになる
人間に怖じない烏腹が減り
悲しくも畳のふちに蹴つまずき
瀬戸内のドラマに逢った渡し舟

辻白溪子

怒ったら少し飲ますとすぐ治る
善人の言うたお世辞が物足りず
長生きが不満を口にせぬ平和
駅改装切符売場がまず移る
欲深い年寄りだから騙しよい

人嫌いになるマンションの鍵の穴
皿一枚破った女の胸騒ぎ
鈍才と愚妻が暮らす置き炬燵
四世代生きた男にある頑固
冬の絵の中に尋ね人が居る

岩本雀踊子

大矢十郎

父と子にある若好み貴好み
出迎への孫差し上げて顔蹴られ
カラットをかざす火鉢が見当らず
孫一人マルコメ味噌の坊に似る
相撲史に残る立合い舞の海

水粉千翁

覚音の乱れそれでも坂を越え
その時の明日を信じた友とおもう
見せしめのつもり昨日のありがたさ
おおらかに見つめわたしを見捨てない
右寄りの左に触れる掌を伸ばし

波多野五楽庵

十二月雪に恨みが深くなる
おまえがああ秋の童話のキリギリス
渋いぞと鳥に忠告してみよう
哀れにも馴れぬ美食をもて余す
天逝の二字が悲しい雨の墓地

八木千代

汗を拭き拭き福というものを探す
だしぬけに福そのあとに気をつける
福の舟騙し舟ではないように
残り福もしやもしやで終わりそう
福拾ったり捨てたりさてもこの世とは

児島与呂志

まあいいさ二月の風にもよく笑い
逃げ道に雑魚一尾がひっかかり
ポロポロになるまい傘を探しつつ
北風を背負うてくぐる繩のれん
せめてもの人生妻と支え合う

有働芳仙

山の神の山の山の文化章
お揃いの服が似合わぬ年になり
三代が住んで話がよくもつれ
除夜の鐘バブルの新語で打納め
子の夢と親の夢風の糸もつれ

藤井明朗

平成四年仕事へ気力満ちてくる
土地成金欲の脱税罰あたる
七草の縁起忘れぬ母の味
この位が丁度いい私の出世運
二十一世紀へ思い出つづる詩日記

遠山可住

いい女の何の持病か聞き忘れ
心地よい噂に揺れるイヤリング
仏にはなりとうはない血がさわぐ
初成りの柿の甘さを妻と分け
心配はいらぬ地球は回ってる

小林由多香

控え目に手を振る母へ励まされ
へそくりで少しい歯にしてもらう
冬の陽をいただくガラス窓を拭く
遊び球その一球を狙われた
四島の旅をそろそろ考える

久家代仕男

夕映えの芒野を吹く白い風
河豚刺しだなんてグルメの窮極よ
闇討ちを嫌う男の仕切り線
惨めさに耐えて来たから生きられる
マスコミの論理歪んでいませんか

藤村 女

悲しみに濡れた重たい喪服脱ぐ
ひっそりと咲く佗助の私語を聞く
八十路来る我が昭和史の耐えた道
ひたむきに生きた母の句文集
喜びの涙流れるままでいい

野田素身郎

禁煙車飴をなめなめ耐えている

一日のリズムが狂う休刊日

主治医より患者立派な髭を持ち

負けそうになって女房の顔を見る

入れ歯びったり沢庵ばりばり食すすむ

野村太茂津

ひっきりなしに友情便りきてくれる

峠まで手を引く背を押す声かける

若緑あと幾日か待つ二月

開き直って双手挙げると響きあう

幸せをくれる周りは友ばかり

小出智子

若いときはよいと言われた頃があり

ほどほどに幸せみかん籠に盛る

早いもの勝ちと夫婦で決めている

鴉鳴く何があったと言うのかい

わがこころ届かぬままに秋から冬

黒川紫香

夜回りの拍子木消えて風ばかり

つけのきく小料理店の灯が明かい

駅前のビジネスホテルから電話

抜き打ちに来るから嫌な奴になる

茶より水くれるいずもの女に会う

西田柳宏子

申年へよく見よく聞きよくしゃべろ

一病と仲よく歩む古希の坂

無事生きているぞと届く年賀状

さあ次は喜寿金婚へ歩を伸ばす

気の強い妻も矢張り年をとる

阿萬萬的

平凡 明星 漫画に負けて消えました

つづれこおろぎ遺書でも書こうかと思つ

暮れの足せかせるように冬の雲

老骨のネジの弛みを締める妻

年輪の数ほど成長しない僕

植村客遊子

盃へ笑いがこぼれる新春の酒

正月は飲もうと忘年会別れ

五本目の徳利本音がどぎつなり

花をよく咲かせる女性で和服好き

一人つ子同士の恋は親は無視

橘高薫風

開聞岳と相思相愛桜島

流謫の賦やよ俊寛も南洲も

ハブを見てアーケンピリア見て旅愁

砂むしの地獄極楽星を見て

これが遺書「平平凡凡」四つの文字

鹿児島島の旅

(奄美大島)

(指宿)

(知覧特攻基地)

川村好郎

東野大八

試作品として長男に生まれ

好郎

同じメーカーでありながら、頭の毛は薄いし、男前は落ちるし、声は悪いし、字は下手だし、ゼニは無いし、川柳はボチボチだし、いったい兄貴らしいところは何か。

と梅里(実弟)はうそぶく。正にそのとおり。梅里は同じ工場で第三番目にできたので、一級品と心得ているらしい。しかし、この試作品五十年経つが、世に捨てられもせず、案外持ちがいい(『川柳雑誌』第三九二号)。

「今でこそ私の頭の禿げつつあることは、余り苦にせずむしろ禿げるまで、如何に人生と戦ってきたか貴重なもののように思っているが、そろそろ薄くなりかけた四十五、六歳時分には非常に苦にし、どれだけ卑下したかわからず。人を見てもただ髪毛を内心比較し

喜んだり悲しんだりしたものである。富士山を見て、富士には裾野に毛があるが頂上は禿げている、おれと同じだなあと見るようになった。随って富士は崇高な山とも見えず、他人が私の顔を見て笑ったら頭のことだと思ひ込んでいた。当時そんなことで句がある。

散髪屋痛々しそうに分けてくれ 好郎

これは実感句である(『川柳雑誌』第四〇二号)。

「或る日、友達と阿倍野筋を歩いていたところ、電柱に、川村好郎師来る—金光教天王寺支部」のピラが貼ってあるのが眼についた。

『これ川村先生と同じ名前やな』『やっぱり先生やで、先生は金光さんの講師してはるんやな』ということから、先生が宗教育家であることを知った次第である(高杉鬼道書簡)。

「柳話は殊の外、説得力のある素晴らしい話

術で、ある年の西日本川柳大会の、一時間半にわたる話しぶりは、聴衆を感動させたものである。その時に感銘した島根県のS氏は、来年度の島根県文化連盟の大会には、是非講演をと約束されたほどであった。流れるような話術と説得力は、氏が信仰していた金光教の布教の先生であったことによるものだと、故K氏に聞かされたことがある。なんにしても塔社柳話の最右翼の人と私達は尊敬していた(西尾某悼文)。

明治35年10月25日大阪市阿倍野区生れ。大阪市立高等商業学校(現大阪市大)出身で、麻生路郎の学窓の後輩。この縁故から戦後復刊した川雑一筋を歩き、ひところ路郎と川雑誌上で近作柳樽の共選を担当、川柳塔社副理事長。川雑以来の大萬川柳のお馴染選者。

羽曳野市に、府立羽曳野病院という内科の総合病院があった。この療養患者の間で、好郎指導の、どんぐり川柳会が誕生し、三十余年も続いた。この退院患者によってOB会が結成され、十七年間の柳歴を重ねた。ここから塔の有力同人鬼遊・史好・酔々・岳人・弥生・吸江・一二三らが育った。好郎喜寿記念に上梓された川村好郎句集「遍歴」が出版されたのが昭和54年4月、集句は七百五十句。

この本の共選、装丁、出版関連のいっさい

の面倒を協力して仕上げたのが、このOB会のメンバーたちであった。

「この句集を出すに当り、先生は細かいことはおっしゃらずに、スマートで瀟洒な本」であること、出来るまで絶対内緒にすること」の二つの条件を出された。これには困った。川柳塔社副理事長という立場もある。恩師だからハイと言えぬ話ではない。しかし、先生は「わしのしたいようにさせてくれ」と頑張って譲らない。(中略)

グルメの先生でもあるので、随分おいしいものをお相伴させてもらった。あわびが大好物であった。お気に入りの宗右衛門町の「大萬」に行くと、黙っていても真つ先にあわびが出た。酒の呑み方はせっかちで、盃をなめるようにゆっくり味わいたい私は、いつも苦情をいった。それでも「おいノ」とまだ酒の残っている盃につこうとなさるのである。気のおけないところで、おいしいものをちよつといただき、さつと切りあげる。そんな寡聞気を好まれている」(谷垣史好「川柳塔」悼文)。

「羽曳野病院どんでん川柳会は、生真面目な一徹さで指導され、会は沢山の会員で盛大なものであった。常に、出席者の人数を案じられ、『たとえ一人になっても続けます』とおっしゃる情熱家であった。

私が退院したある日、私の家へ電話を頂き電話に出たのが父で、我が家はパニック。「娘にふさわしくない」と誤解と拒絶。先生にこの迷惑をおかけしたことであった(中略)。

先生と大萬川柳は有名で、川柳塔社の最も大きな春のイベントでもあった。とうとう第一位の連続の花梢さんには勝てなかった。今にして思えば、先生は常に女性を身近なものにされ、好みのタイプの女性の渦に満喫しておられたのである。長寿の秘訣は「常に好奇心と女性」とある。先生はこれで長寿を全うされたのである」(宮西弥生・同上)。

「松江梅里は、風邪一つひかない、壮健な一生だったが、私は生れてから今日まで病気の連続でどれだけ両親に心配させたかわからないので、よくも今日まで不思議に思っ程、全く恵まれて長生きさせて頂いたという他はない。

いのちまた足され継がれて喜寿の春、好郎梅里のいうとおり何のとりえもなく、社会的にも一家のためにもさしたる働きもなく、あとに遺す何物もなく、ただ長生きをして四十年近く、一度も中絶せず川柳の道を歩みつづけてきただけである。せめて喜寿を迎えさせて頂いたことを感謝し、喜ばねばならないとこの句集を残すことにしたのである。私の

一生の思い出を『遍歴』という題をつけた(昭和54年10月刊「遍歴」謝辞・川村好郎)。

この句集を出して十年近く長生きした好郎は、昭和63年9月4日老衰で死去。享年87。

「川柳の第一線を退かれてから好郎先生は夫婦互いに労りあいながら老いの人生を楽しんでいられました。(中略)しかし、川柳以外すべて頼りきっていられた奥さんが、昨年(昭和62年)十一月突然亡くなられたことは大変なショックだったよかったです。幸いお嬢さんと一緒に住まれたものの、寂しさに耐えられなかったのでしょうか」(藤井二三「悼文」)

「川柳に先生は要らない、と伝言を吐く川柳人がいる。川柳そのものは先生がいなくても、見よう見まねでそれらしきものは誰にも出来る。しかし、内在するところは人間の深さにはかならない。その精神は、師によって継承されるものではないだろうか。よき師に出会えたのは、何よりのしあわせ者である」(高杉鬼遊悼文)

うしろから見ると、べきものか女 好郎
手袋の片手のような妻であり
ありがたく残務果たせと喜寿給つ
〃 〃

▼次号は「丸山弓削平」

柳籠裏三篇研究 (十二丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

177 鬼かいんにや人かうゝ蚤日なしかし

七久保『毎日毎日、呵責なく取り立てに来る責鬼も、はじめのうちは地獄で鬼に会ったように身のすくむ思いがしたが、よくよく考えれば奴さんも商売上、そのように見えるだけのこと、鬼でも蛇でもなかったわい、という意であらう。

大野『「いんにや」(感動詞)は「いんや」の連声で、「いな」あるいは「いいえ」の意。従つて「怖がつているようだが、一体何者だね、鬼かい」「いいえ」「それでは、人かぬ」「う、え、」「人は人でもひなしかし日済貸です」。

佐藤『同。「うゝ蚤」は「うゝ」と「いゝえ」

と混同した言草で、半肯定半否定の気分があらう。とにかく「日済貸」は「高利貸」同様、人間的情愛があつては商売にならぬことを諷している句であらう。

鈴木『賛。歌舞伎の間答調を利用したのです。

岡田『なるほど、鈴木氏の説、面白し。

178 里へ文ぶたれまいらせ候と書キ

七久保『嫁ぎ先の出来事を逐一報告する類の嫁。

岩田『「里の嫁びいきと、それに甘つたれる嫁」という把握の仕方が笑いを生む。

さあそこをかんになんしてと里の母 第三二〇

さうであらさうて有ふと里のは、拾九三〇
そして、そうした把握概念を女文に具象化して、趣向したところが面白いのであらう。

すりこ木でふちまいらせと里へ文 拾一三九

岡田『「ぶたれ」は「打たれ」でしょう。「氣にいらねば帰つて来い」は現代的な解。

179 呑もんで四文くゝとすゝめてる

七久保『よく判らぬ。路上でやる小博打でもあらうか。「一文でいかゞ、当たれば四文だよ。どなたかおやりなさる方は……」と博打の呼び込み人のセリフでしょう。

佐藤『礎稿に賛。一文で四文になるのを「四割」といいます。割というのは倍の意味の賭博用語で、賭金に対して、勝つた者へは、二割、三割、四割とあり、まれに五割というものもあるようですが、一般には四割が最高、主題句は小賭博ながら最高率の四割を言つて、人の氣を引く方便に用いたものであらう。

三わりならばふせよふと女房いひ 一九二四

四わりでも坪ハこわいと女房いひ 二一〇

むごいやつ二文四文で式分ゆすり 二一八

一文・二文などという兎戯に等しい小賭博も行われたようである。主題句は、通行人に声をかけて誘うので、道中賭博と思われる。

鈴木 佐藤兄の説明でよく分かります。

こわそうに四割を伏せる松の内 九23

岡田 同。そして佐藤氏も言われているように、大道トバクの匂いが強い。西の市の大道トバクあたりと思っていた。

180 直助を出して左内を藪医置

七久保 直す、直さないを擬人化して洒落ただけのつまらぬ句。改めて解釈することもあ
るまい。

岩田 成程。すると直助・左内というのは医者
の下僕の一般的名であったのか？

佐藤 礎稿お見事。こういう洒落は江戸っ子
はまことにうまい。

出合茶屋下夕に岩内のんている 末27

鈴木 賛。よく出てくる駄洒落です。

岡田 駄洒落だけ。

181 番太郎風の中から首を出し

七久保 番太が手内職の風作りをしている
と、店頭で駄菓子を買いに子供がやって来て
「くださいな」と声をかけたら、「いらっし
やい」と風の中から首を出したとい
るのである。

鈴木 賛。番太郎は番小屋の番人で、安い給

料で町内に雇われたから内職を許されてい
た。

もちやそびの中から番太顔を出し 一五3

岡田 賛。

182 村の嬢奈良茶太夫とにげる也

七久保 「奈良茶太夫」は、安役者、また大
根役者転じてドサ回りの旅役者を意味してい
る。この語は、奈良物・奈良刀などのマヤカ
シ物の意味から派生した語である。あるいは
また、奈良茶飯などからの転用か。

句意は、村の嫁の一人が旅芝居を度々見物
に来ていて懇になり、手に手を取って駆け落
ちしたということ。

西原 山田五十鈴主演の「女紋」の如し。

佐藤 礎稿賛。奈良茶飯の「奈良茶」をも利
かせていようが、茶番劇程度の芝居しかでき

ぬ役者の意の洒落でもあろう。

村ぶげん娘が逃て芝居じやみ 二五17

鈴木 賛。

よめん女がにげたて村の芝居やみ

天六宮2

岡田 賛。

183 稽古せぬ芸でおどり子はやる也

七久保 本業の三味線で、きびしい練習をし
て一人前として客に侍るより、人間が持って
いる本能なら誰でも稽古せず、ましてや女
なら…。

ころぶからそれではやるとげい子いひ

五39

その方がおも三みせんはいかん事

天二松3

岡田 賛。

184 のびるだけうでを延してあくび也

七久保 このままでよく判る句。

岩田 賛。あくびにまで類型的の把握がある。

両の手であくびをぐつとさし上げる

拾九30

我力腕をわが手で持てのびをする 傍一23

岡田 賛。

NHK川柳・松山大会 3月15日(日)、

松山市総合コミュニティセンターで開催。宿

題と選者は①正しい②仲川たけし③皿④佐伯

みどり⑤面⑥橘高薫風、事前投句(各題2句)

は投句料1600円を添え、2月20日までに

国立市富士見台2-36NHK川柳松山大会へ

水煙抄

黒川紫香選

長岡京市 山田 葉子

巢立った子に過刺サービスしてしまふ

サントさんいると信じる子の笑顔

胸先にマグマをためて群れにいる

胸元の刃のぞかれないように

姑の味いつか盗んでみるつもり

松山市 宮尾 みのり

心機一転少しくわしい辞書を買う

小人閑居して雑念の日が終る

友だちもいっぱい持っている勝氣

振り逃げの策も一回きりならば

ひとりになってからああ言えはこう言えは

富山県 高島 五月

托鉢の尼に重なる山頭火

秀才でないから親と住んでいる

無言電話あなたは何が言いたいの

偏差値がここにもあった二度の職

トゲのある花はきれいに咲きたがる

尼崎市 児玉 歌子

減量を促している砂時計

糞り入れが済んでゆっくりする案山子

恨みっこなし夕焼けが美しい

母さんが今も信じる置きぐすり

鍵穴の奥説明が出来る

米子市 小塩 智加恵

オモチャ屋にニヤーと鳴く猫売っている

親族に釘打つ人が一人消え

右分けて気分を少し軽くする

階下から姑のくしゃみを三つ聞く

日が好いと隣の席も見合い席

鳥取県 大角 正道

祝福の握手は強くして返す

あの星が見える平和な北の空

読み返すときにやさしくなる日記

親となる日に近づいてゆくこよみ

とてもおいしい落下りんごをほおぼって

高槻市 守先伸子

冬の花どれも明治の母に似て
疲れたらのぞいてごらん万華鏡
真夜中の電話によろこび事はなし
あまりにも夫に似る子がチト憎い
幼な日の煮こごり今も舌で溶け

名古屋市 藤井高子

ちぎり絵に亡母恋うしじま冬の灯
いくさ果てれば視野にあらたな雪月花
B面で静かに密かに齢をとる
粗茶粗菓と運び客間の風を読む
巻人の嘘はあちこちほころびる

広島市 流奈美子

スケッチの旅景の中にいるわたし
裸婦像へ掛けてあげたい寒い朝
感動の起伏うすれて年を積む
熱い茶を一気に飲んで自己主張
自画像の瞳はるかな虹を追う

熊本県 大川幸子

スプーン一杯ほどの甘さの愛がある
温床で必死に赤くなるトマト
もう私齢数えるのよしました
怪物のような顔して餅ふくれ
名所旧跡あまり近くてつい疎遠

松山市 白石春嶺

貸している方から先にする会釈
北風に乗るチャルメラが路地を抜け
すれ違う下りは空いているラッシュ
銭湯を出てたこ焼きの列で冷え
小錦の馬力テレビが壊れそう

富田林市 池森子

秋風に雲も女も流される
傷の深さにいっぱい溜めている情け
落日の窓は朱色を恋しがる
耳の底まで冬の足音落ちてくる
走り出す妻を見送る台所

京都市 山海友熙

肩の凝り癒してくれるもの想い
カーテンの隙間が鏡に映ってる
じゅうたんの端に主人の気儘聞く
新築に猫のトイレの場所がない
天壇の赤い塔夕焼けに喋り出す

尼崎市 野瀬昌子

投げ出した靴にのぞく反抗期
人の裏見えて世間がこわくなる
さあ師走気合入れたが風邪で寝る
丁寧に包んだ上にまだ袋
おかゆ炊く妻も土鍋も古くなり

摂津市 木下道子

お日柄もよくて白菊威儀正す

齒の浮いたお世辞は嫌い床の菊

元校長子育て談義菊談義

ブルドーザーの陰にひっそり咲く野菊

仏様菊ともなかとどちらでも

鳥取県 大角幸代

胎動を感じる頃に春が来る

雨だれを二人で聞いて夜がふける

語らいの旅を二人ですることに

淋しい時はお腹と話しています

言い過ぎて心の棘がぬけません

久留米市 鶴久 百万両

高千穂の神話を鶴呑みして帰る

飛鳥壁画に妻へよう似た美女がいる

丸い絵が描けたら春の野を翔ぼう

勲五等と確かに読める師の墓標

椿散る宵は水子のこと思う

静岡市 沢田 きん

慰めてくれる嘘なら信じよう

肩の荷をおろし気儘なひとり旅

迷い道くぐり抜けての人生譜

別れ道もう振り向かぬ影法師

言い訳はせぬ神様が知っている

砂川市 大橋政良

無人駅 無の風景を持ち帰る

日溜りのお喋り少し着ぶくれる

嘘つきは嘘を楽しむようにつき

負けてやるつもり石が効いている

旭川市 朝倉大柏

正答が出ず取りあえず笑つとく

とうふ食うもう告白は忘れてる

平熱にもどるとなんと恥ずかしい

好きだよと言われる前に訣れよう

尼崎市 森安夢之助

どさくさの渦笹舟を妻が漕ぐ

出逢いの孫に軽い財布をはたいてる

撫で声で嘘八百を言うて去に

ひらたく生きて近所の人気者

尼崎市 的場十四郎

膨らみの少女の胸にある秘密

三代の老舗を守る割烹着

大観の美人に鼓動盗まれる

富山市 島 ひかる

大きな手で頭撫でられ妥協する

さざんかの垣根で休む万歩計

今朝もまた鳥がわたしに逢いにくる

テレパシーで恋のたずなを引いている

香川県 川崎 ひかり
幸せは夫いる子がいる老母がいる

建前も本音も言えず秋の風

例えばの話で言いたい事を言い

損得がやっぱりからんだ人の世話

和歌山市 田中 みね

くれもせぬ写真をまたも撮ってくれ

底冷えの街で一役買おうサンタ

社交辞令お若いですね真に受ける

雑用に追われちゃってと長電話

和歌山市 堀畑 靖子

言逃ればかり師走のカレンダー

饒舌に乗ってとことこ付いてゆく

とりなしを頼んだ夜の自己嫌悪

お正月迎える格好だけはつき

米子市 足立 由美子

結論が机の上に置いてある

ガラス戸を叩いた風と逢っている

行き詰まると首を回して見たくなる

しっぱ振り甘い話の方を向き

出雲市 岸 桂子

生活の知恵を姑から盗みとる

立ち直る事を約束して別れ

ひっそりともう咲いている藪椿

すこし危険な電話に今日のはりました

藤井寺市 高田 美代子

二ヶ月の財布は少しダイエット

真夜中に帰った猫に起こされる

ラッシュアワーにひとつを見失う

覗かない方がよかった舞台裏

柏原市 大峠 可動

初春や夢賜わりて月日在り

序列から抜けて衣の紐を解く

情熱の脆さを悟り椿散る

晩年はこんなものかな陽が落ちる

尼崎市 尾宮 弘治

ジャンケンにいつも負ける子煩悩

狭くても夫婦で痴話の台所

献体の遺書に余生を任せざる

曾孫を抱いて余生に陽が眩し

尼崎市 山本 すみ

歳時記も知らずハウスは花ざかり

開店から苦楽を共にした簾

孫とする指切りだから騙せない

みの虫は師走の風も気に止めず

熊本県 岩切 康子

台風にまさかの神木倒れてる

内緒にと言ってとことん聴かされる

山道で郵便夫に逢う雪模様

只ひとり入り日に見える贅沢さ

島根県 槻谷一葉

投函すボトンと期待かける音

菜園にご無沙汰をして落ちつかぬ

アフターサービスイい電器屋と三十年

ごめんねとやさしく注射するナース

和歌山市 山口三千子

吉報が届きシャンペン買いに行く

途中下車したとて鞆に治まらず

やつと壁とれたか明るさがもどる

目標がなくなり加速つく老化

今治市 渡辺南奉

冬に咲く花へ応援歌を送る

父母の恩を五十にして悟る

地球儀の丸をうたがい出した知恵

直線を守ろうとして肩が凝る

鳥取市 萩原美雪

子にかけの夢少しずつ修正し

あなただけめちやくちや好きよ離さない

何が効くってそりやお金が一番だ

日没にまぎれて愛を告白し

酒田市 永澤裕子

野良猫の姿見えずに霰落ち

義理と義理中の苦勞が言い出せず

黒白をはっきり決めたがる頑固

裸木の春を信じている夜寒

兵庫県 森脇和子

おべんちゃら言えずにつこりしてるだけ

身に余る言葉を糧にして眠る

不始末をかばう味方の背が温い

裏切りの日から身にしむ隙間風

大阪市 新井泰子

電子音がスーツの背中をつつく街

地球儀がまわるまわるよ歓喜乗せ

CMのつやつや髪を信じない

くもの糸のようにつながる賀状書く

福岡市 井崎ミサ子

相部屋のご縁で友達増えた旅

山里の小犬だれにも愛想良い

腰痛が休めサボレの合図する

おつかれの様子とニクイ気の配り

尼崎市 山田保蔵

実力はあるがスネに傷もある

颯爽と長い髪して長い足

行ったかと思うたらお迎えの幼稚園

人不足の割に主人出世せず

香川県 工藤吟笑

重箱の隅で暮すも処世術

禁煙も禁酒も明日からにする

線香の煙 観音目が開かず

数多くなつた白髪はもう抜かず

東子市 小山 悠 泉

帰りたい帰りたくない故郷思う
逃げ道を作って上げる嘘を言う
黄昏てぼつんと岬灯が寒い
拌まれる運をつかんだ神の石

和歌山市 森 茜

大きい方もう選んでいる赤ん坊
ストレスがたまるとセーターが増える
さわさわと鳴る竹の道つつましき
あちらたてこちらたてては躰きぬ

兵庫県 円 増 純 子

欲ばった願いを絵馬に書き綴る
亡母の齡越えた折から余生とも
子の帰省湯舟あふれるほどにする
真夜中のギターを星が聞いてくれ

十和田市 阿 部 喜久江

ひとめぼれ偽物騒ぎで世に知れる
マスコミの餌食にされたスキヤングル
口唇をトランペットに盗まれる
人間味失せてしまえば皆悪魔

静岡市 永 倉 柳 華

初対面胸に小波が押し寄せる
お早うが朝の気分を和らげる
胎教へようやく妻の座を確保
寝た振りで結構聞き耳立てている

熊本市 黒 田 緑

人格を食出すほどの自己顕示
三猿の教えが変る手の置き場
物よりも人を見分けるむずかしさ
立ち話まだ続いている邪魔な位置

尼崎市 鈴 木 良 征

ひとくせも二くせもある花椿
森へ行けばクラスメートにまた逢える
依怙地とも思う言い訳聞いてやる
ナンバーツリーの椅子で喇叭を磨いている

尼崎市 長 浜 澄 子

モンタンの詩が聞える落ち葉踏み
夢破れ故郷へ帰るトーシユーズ
白い息残して走るランドセル
親父太鼓まだ暫くは鳴るらしい

河内長野市 大 西 文 次

雲仙のマグマ学者を手古摺らす
粗供養を新幹線で持て余し
相談があると言うたら寝てしまふ
謝恩会恩師の顔に髭がない

岡山市 中 嶋 千恵子

古傷をやんわり包む母の愛
定年のそれから先の闇の中
ともかくも女の武器を磨いている
結論は謎を孕んだままで消え

静岡市 三浦つね

赤トンボ案山子に何か話しかけ
相談にのっては見だが金がない

七十年前の話をして笑い
赤い羽根家族一同買つて居る

熊本県 高野宵草

堂々と建前喋るバレるまで

地図見れば柳友はこんなに遠い人

凧ある日糸を切りたい唸り声

来て嬉し去つて楽しい孫がいる

熊本市 遠山夏生

ゴルフボール重い軽いとまだ未熟

社の内規べからずばかり多過ぎる

表札の埃はいつも忘れられ

この服になさいと少し妬いている

出雲市 原章峰

言い切つた言葉が足もとで濁く

結納が古い言葉を添えてくる

面会簿に次男と書いてふとさみし

一と月がこんなに早い締切日

出雲市 島重昭

真白いピアノが私に妥協する

もう一つの顔が見えてる三面鏡

たしなみに老いを繕う薄化粧

戒めをといつて今朝の軽い靴

芦屋市 黒田能子

しんしんと窓を開ければ白い朝
節分のほろ酔い鬼が帰り来る

宇宙から孫やつて来てお正月
若者の締める蛇口がかたすぎる

貝塚市 池田寿美子

ストレスとゴミは溜めないマイペース

歩きつつ今日も生きぬく風の私語

別れてから身近に迫るなつかしさ

上品な甘さに粹な京の店

和歌山市 玉置当代

花束を抱いて離職する背広

湯けむりに一息ついた旅ごころ

見ざる言わざる器用に渡れない私

ベルトコンベヤーのように婚礼進行す

尼崎市 佐野六浦

下心 深い話はあとにする

小さい耳も悪い話は聞いている

追いつけばまた離される万歩計

梅の木で似合わぬ雀鳴いている

尼崎市 中澤向西

地上げ屋が今日も立ってる裏の畑

枯れ落葉踏みしめてゆく物思い

夕陽がきれいゆつくり歩く風いだ浜

悪運が尽きて鼻くそ丸めてる

熊本市 北川 一進

億の額庶民に遠く聞くばかり

手をつなぐ中が可愛い孫だった

捨て猫に道草を食うランドセル

尼崎市 湊 修水

百八つの余韻に悔ゆることばかり

雲仙のマグマ怒ったままに冬

祝箸一人加えて屠蘇を酌む

姫路市 松本 一郎

陶器市ぶらり湯呑みを一つ買う

逢えるかも知れぬ期待の町へ出る

ことごとく毒づいた日を亡父母に託び

京都市 小林 英子

写経してとても優しい鬼になる

シクラメン匂う女の新春の部屋

赤い星消えて大國春遠し

岐阜県 渡辺 杏村

月ヶ瀬のニュースちらほら梅暦

窓ぎわで花芽をつけたヒヤシンス

春の使者母の野菜と露のトウ

西宮市 菊池 トミエ

憂さばらし酒は誰よりやさしくて

底辺の小石並んだしたたかさ

顔見世の棧敷着飾るためにある

香川県 田中 ふみ

満ち足りて世界旅行も夢じゃない

我が恥を愚痴と一緒に主張する

ファッション花香の匂いもバラエティー(線香工場見学)

兵庫県 倉垣 恵美

地卵の黄身がぼこんと盛り上り

白菜をさくさくと噛む平凡さ

それからはいそいそ返事待つばかり

堺市 桜井 莊次

矢印が横を向いてる分れ道

井勘定がとっても巧い五ツ玉

空想の波に溺れている女

枚方市 森本 節子

悠々と小春日和に身を預け

秋蝶の如く落ち葉が宙を舞う

無造作に鉢に盛られた煮ころがし

寝屋川市 豊福 路子

神さまには素直に詫びることができ

産休の娘とショッピング菊日和

コンタクトレンズに馴れぬ孫娘

兵庫県 酒井 靖子

風だけが騒ぐ静かな独り部屋

ぜいたくな世へ大正の数え唄

思い余る鬼が落書帳埋める

大阪市 吉川 哲 矢

学校を休んだ昼の白い雲

ふるさとの姿らぬ山を見に帰る

新世界気取って歩かないように

香川県 永峰 伽名子

憎い男の野心素早く衝いて出る

北風に打たれて強くなりました

底冷えに鱈鮎屋の暖簾かき分ける

松江市 安食 友子

好きでしたか細いことば隙間から

山寺の一本杉がまだあった

地元では小粒ばかりの蜆汁

寝屋川市 宮崎 菜月

真っ先に風来坊は木に凭れ

くやしさに殺気を孕む鎌の月

大空を区切りマンション建ち並ぶ

鳥取市 大坪 天涯

熟れ過ぎて小枝にひとつだけ残り

ひと駅もふた駅も乗り過ごすなり

再職の男で過去を喋らない

和歌山市 岩本 美智子

夫唱婦随ベッド並べて病んでいる

美しく老いてゆきたい姫鏡

親切が過ぎて敬遠されている

東大阪市 安永 暁子

優しそうな声で急所外さない

義理ひとつ郵便局に送り出す

成人の着物母の想いが沁みている

佐賀市 江口 万亀子

旅に出て手頃の土産買いたさる

手料理の塩あんばいは本まかせ

歩こう会六十路の意地にシツプ貼る

青森県 荒田 つる

煩惱を捨てて行きたい奥の院

札入れが札でふくらむ事もなし

日曜もたたき起こされ溝さらえ

今治市 越智 青園

十二月王手王手の金づまり

お言葉を返し冷や飯ばかり食う

猫も犬も肥えて御主人様に似る

東京都 山口 新子

どうやら首回らぬは月の末

お百度を踏もう私にできること

回復を祈るこぶしを握りしめ

八尾市 秦 正子

曖昧な言葉の裏に有る野心

満ち足りて首をかしげる倦怠期

面影が亡母と重なる石ばとけ

鳥取県 伊吹富恵

女一人呆ける隙間のない暮し
ぬるぬると昨日の嘘が膿んできた
歳末が宅急便で運ばれる

鳥取市 田賀八千代

枯れるまで女の顔で生きていく
ほどほどの位置で温もり確かめる
さよならがでさず灰皿壊せない

島根県 松本聖子

決心を鈍らす雨が降り止まぬ
振り返る時間もくれずまた暮れる
ボーナスが一晩うちに居っただけ

寝屋川市 井上すみれ

我が孫もいつか甲子園かも返し針
大正生れなんと気になる濡れ落葉
正月三日背すじのばししゃんとする

和歌山県 小倉アサ

逢いたくて散歩コースを逆にとる
ほどほどの痛みを抱いている温み
沿う釘を一本打った父子服

新潟県 高野不二

煙草止めた人だけ生きてるわけなし
カレンダー下げる場もない程貰い
口真似のように留守番電話言う

羽曳野市 芦田絢子

凭れたい人がもたれて来て困る
陸橋の風が多弁になってくる
やき餅を焼く情熱は失せました

大阪市 勢理客トミ子

用件に枝葉が伸びて長電話
休日の郵便受けをつい覗く
年の瀬や夜汽車の椅子に浅く掛け

西宮市 岡本道子

ママーとなく人形捨ててある師走
身に覚えあるから話よく通じ
回数券買って一回多く会う

鳴門市 八木芳水

変らない味が客呼ぶちさい店
おみくじのよいとこだけを拾い読む
これしきの金が謀反に走らせる

泉佐野市 真崎浪速子

葱刻むリズムに妻の幸がある
主客転倒不倫強請っている悪女
狭い日本双葉マークはまだ増える

姫路市 福島姫女

迷った末好きな湯豆腐こん夜また
しもやけの火鉢かざす手丸かった
ふんだんに高値の白菜夕餉鍋

良い嫁と言われているらし五目寿司
四面楚歌時を待つてる楽天家
食べ盛り二人いますという食費

相生市 中塚礎石

生きざまを孫が一番知っている
遠足がうまいと言った握り飯
首つりを着せて夫を放り出し

岡山県 土居ひでの

申歳の梅干菜になるという
約束の財布と走るプラモデル
見よう見まね母の歩いた道だから

静岡市 宇佐美寿美

大吉にからめた小指深く組む
言い訳を聞き流しておく胸の中
踏みしめて石橋渡る風の中

岡山県 後安ふさえ

ふる里もトンボ返りの年の暮れ
ほろ酔いの父だとわかる靴の音
年毎にだんだん頑固になる夫

池田市 水木博男

パパの顔どの子が画いても同じ顔
相談役 相談受けたためしなし
可愛いと言うが美人だとは言わず

鳥取市 加藤二代
地球の咳は火山爆発かも知れぬ
一粒の愛信じ切る女です

島根県 福岡博利
スラスラと鉛筆過去をしゃべり出す
菜園に小春日の汗もらう

松江府 浦辺静江
生命ある限り私もひた歩く
冷暖房に風の匂いも消されたよ

帯結ぶ度に手をかす亡母だった
一日があつというまに過ぎる暮れ
思い出の歌をリズムに万歩計

大阪市 小糸昭子

ひらかれぬ心を包むシクラメン
責任はすんだ女の肩パット
勝名乗り受けた力士の澄んだ汗

兵庫県 北川とみ子

半分を信じて易の灯をくぐる
子と住めぬ積木の椅子がひくすぎる
決断を鈍らず花の首が折れ

今治市 渡邊伊津志

奉仕する働きをする意匠展
箸使う手つきに親の愛光る
海に来て息をするのが楽になり

芦屋市 根来 敬

辻つまを合わす思案を見透かされ

亀一匹が首あげて見るひとの相

人間の飽食笑ってカラス鳴く

熊本県 増田 一 乗

修験者の呪文十字に火が燃える

ストレスを蹴飛ばす熱唱吟詩道

窓口が込み合う師走金融業

明石市 小川 醉 月

公園の小径しずかに老夫婦

石焼いもの声なつかしく夜がふける

手術あと見せてと孫が膝にくる

姫路市 福本 好 花

お神酒にと買うから神に笑われる

すすくと育てて親は邪魔になり

食堂の隅っこ狙う老い二人

唐津市 浜本 治 幸

周波数合うて示談が成立し

三人も寄れば秘密が洩れてくる

地獄耳風の噂をキャッチする

藤井寺市 田中 孝 子

老いひとり忙し師走の向い風

投句する氷雨の中を赤ポスト

残照の余白を飾る一行詩

静岡市 浅子 まつゑ

量よりも質が欲しいと老いの箸

医師曰く薬なるべく控えめに

菊花展苦心の作の揃いぶみ

和歌山市 山田 博 章

手に職を付けさせ仕事まで捜す

満点をもらって走る帰り道

情報が走る速さが侮れぬ

箕面市 岩津 ようじ

あたたかい嘘 病人も知っている

ワープロで来る神妙なお詫び状

子には子の親には親の年の暮れ

米子市 木村 はるえ

今朝逢った人の名前が出て来ない

北風と仲良くしよう冬の旅

古里の風も時には刺を持つ

鳥取県 小西 五十鈴

子守歌奏でるような皆生の湯

菊供え朝から亡母と語ります

尊氏の菊人形も枯れて初春

大阪市 清水 絹 子

一年の垢へさじきの顔見世や(雨座)

饒舌をピタリットとめたかに料理

保儉満期並のくらしへ上まむし

福岡県 本田 忠 男

青春の夢ふるさとにまだ残り

戸の締まる小さな音に一人言

葉の落ちた梢に寒く熟し柿

枚方市 海老池 洋

同居する前はやさしい嫁でした

お辞儀した看板立ててノロ工事

助手席に酔うた男の高野

松山市 竹 田 さやか

執着を捨ててさばさは落葉樹

パンをもつ散歩馴染みの鯉がいる

午前様待ってみかんの皮の山

西宮市 牧 淵 富喜子

伝統の枝 路路奥が守り抜く(金沢掃参の折)

ブティックでゴルパチヨフの話など

お隣の枯葉はどうもうちが好き

香川県 辻 上 よしみ

寝ては食べ食べては寝てのお正月

客が来て約束時間気にかかり

病む父の寝顔昔の強さなく

枚方市 濱 田 良 知

保険みな満期となつてから入院

昔ならとうに火花が散っている

この時とばかり先輩おだてあげ

寝屋川市 北 岡 波留吉

ふらふらと付け馬連れて朝帰り

一歩ゆずり円満な顔崩さない

悪妻を優しくさせた寒椿

大阪市 尾 崎 黄 紅

人妻と酌むあつけらかんでよし

美しい恋でした片恋でした

或る日無聊十年前の柳誌見る

和歌山市 西 村 和 成

二枚刃で頭の手入れ修行僧

三流の会社で競馬好きのボス

爪を切りながら言い訳考える

唐津市 福 島 紀 一

散りきつた銀杏が空に大欠伸

茹玉子ほどほどのとこ妻のこつ

折り込みに師走商戦焦り気味

兵庫県 中 野 とよ子

神様のいたずら過ぎて深い仲

なつかしい向う三軒もらい風呂

無事着いた電話のそばで安心し

岡山市 牧 野 秀 香

申の年迎える反省除夜の鐘

柳友や吟友出来て減らぬ賀状

内孫にゆうゆうパックでクリスマス

静岡市 小木久子

口裏を合わせ必死の予防戦
恋人を連れてきた娘に母は照れ
歌い終え余韻に浸る歌手の顔

宇部市 中村三良

酔狂な人が背を押す年忘れ
背のびしてゼニを数える音を聞き
葱坊主ゆっくり雲を見て背伸び

広島県 森川抜智

手品見る子ども真剣な目でみつめ
やさしい顔して辛辣な事を言い
亡母三十三回忌 二十三人あつまつた

大阪市 今西静子

畳の上でこけて怪我する年となり
院長が患者の履物そろえてる
風の子が散って広場闇の中

高槻市 小林紀美子

せつかくの講師の話が子守り歌
時々石膏になる夫婦です
朝食を立ち食いして行く茶の稽古

佐賀市 古川一徳

吉野悲史河内音頭にのるツアー
気くばりが裏目に主婦の差し出口
反省をしてから心の霧は晴れ

岡山県 大石あすなろ

春の陽に爪を研ぐのはやめておこ
土用干し亡母の匂いのする紬
あつさりと孫がさらった主導権

島根県 武島ちよえ

煮詰まった話に突然腹が空き
うるさいが軒と共に寝ています
スーパ-をぐるぐる回つただけの事

広島市 森田文

平坦な道しか知らぬ御所車
道消えてみんな振り向く沢の音
鳳仙花の弾けが見たい好奇心

神戸市 木村貴代子

一人旅 酒をすすめて連れになる
嫁がせた娘の部屋で昼の酒
難題にグラスの水とけるまま

奈良市 米田芳子

初めてと思えぬ人とティールーム
忘年会はねて夕餉へ主婦走る
はだかの木の強さ夕日をはね返し

鳥取県 山内芳江

競り上げるカニが横ばいして見せる
弱音など絶対吐かぬ寡婦の意地
嫁ぐ娘に魚料理を教えとく

岡山県 富坂志重

老い悲し話せば一つ事ばかり

ねぎらいの言葉に汗も消えて行く

健康がとでも楽しい暮れの道

和歌山県 吉田武治

笑わせた祝辞喝采したくなる

計算に明るい妻といる安堵

目標が出来て心が弾み出す

兵庫県 奥野テル

背中から師走が追うて来る寒さ

バス停で今日も川柳かと問われ

夏はいや冬もきらいと年を越す

豊中市 田中道胤

残り少ない日捲りに似た余名かな

小樽運河雪の風情を焼きつける

美味い粕汁作って妻に食べさせる

静岡市 柳沢たま

一円をまけてと言えず出すお札

灯を消して窓より誘う秋の月

想い出を詰めて同居の桐箆筒

広島市 中村要

ワープロに癪癪玉をくれてやる

粗大ゴミ昔の誇り放り捨て

急ぐ朝 自動ドアが故障する

唐津市 入江喜久亭

キープしたボトルが切れた夜のバー

夢にみた亡妻恋しくて寺詣り

下駄箱にそっと納めたちびた靴

兵庫県 玉田三重

突風が帽子をつれて木に宿る

畳替え妻をも替えて見たくなる

意の儘に返事ができる独り言

神戸市 岩田信義

子の進路決める眼鏡の度が合わず

玄関の靴がイロハの子沢山

老人会 病気の数を自慢にし

倉吉市 田中八太郎

がん首を揃えて煮つめ元の案

ふる里が迎えてくれた山の青

手に唾をつけて歛もつ目が生きる

岡山県 江口有一朗

仁徳帝のみ幸幸山の名を留め(古里の史跡)

仁徳帝慕う黒姫の足の跡

小町螢の光 平安の御代照らす

東大阪市 大平太一郎

念には念まず身のために知恵が要り

入学に小躍りしてる子より親

老いてなお胸騒ぎする誕生日

東大阪市 松山隆

猿芝居 花道の見えどう切らす

かゆい背かいてくれとは言えぬ嫁

静岡県 中西雅

りんごの娘みかんの国へお嫁入り

老舗とは重いのれんと血の絆

静岡県 青柳金吾

竹トンボ何と意外に難しい

つまりいた石に阿呆と怒鳴られた

松江市 松浦登志子

留守がちな妻のメニューが三つある

スーパ一の惣菜いつか母の味

米子市 服部朗子

紅い花小さい鉢にシツクなり

天窓のガラスが作るユートピア

岡山市 清水悠貴女

幸せを明日へつなぐ海の風

はき馴れた靴の重い日軽い日も

鳥取県 石谷美恵子

叱られにきた父の木が見当らぬ

吹き溜まり互いに過去を庇い合い

高知市 桑名知華子

囁きをイヤリングと聞いた夜

山茶花におはようと言う通勤路

吹田市 西岡豊

灯を消して思い思いの旅の宿

ありし日を語る地主の蔵二棟

香川県 田中スミエ

抱いた孫あつさりママの手にかえる

三人の娘がかたわらに居る米寿

唐津市 米倉さかえ

温もりの床に孫らはもぐり込む

孫娘部活弁当カラフルに

富田林市 山原昭水

クレヨンで童話の世界かいている

正直にものを言うから憎まれる

鳥取県 美浦美代子

民芸品並べた蔵で蕎麦を売る

沢蟹を客の数だけ捕りに行く

出雲市 富田蘭水

家計簿に妻の心がふんわりと

寝息のみ妻ぐつすりの雪の夜

静岡市 大石たき

何時来てもトンボ帰りの孫息子

三男は母親思いやさしい子

静岡市 片平静代

今日こそははつきり好きと言うつもり

泣いたのは私おこったのはあなた

赤トンボただ郷愁の中にいる
ロボットが似顔書いてる博覧会

静岡県 大村 正雄

初雪ととても思えぬ雪の量
結局は返事が来ないままに冬

鳥取市 近藤 秋星

引越してそばも届けぬ若夫婦
落ち葉焚くことも出来ないビル谷間

大阪市 川原 章久

胃薬の効目のないまま年が明け
あきらめた家の代りに車買い

大阪市 家村 高雄

星座きらきら無限の愛がある
下宿から洗濯物が着払い

今治市 和田 宏

誕生日覚えてくれた彼がいる
さりげなく自慢の品が置いてある

和歌山市 木村 親路

死ぬ気などないから人間ドック入り
手強いと知って姿勢ひくくする

鳥取県 山本 正光

紳士録にあるのかメールしきり来る
似たような人生を聞く控室

豊中市 みき わきみ

呑んでいる主を愛犬うるさがり
初恋の人も品良く老いている

唐津市 江川 春琴

或る女優脱いで撮らせて名を馳せる
軒かく人程早く入眠し

唐津市 山口 ふさ子

ふれあいの旅の地酒でひと寝いり
ちらほらと裏ばなしでる適齡期

池田市 木村 一笛

新畳洋間のように落ちつかぬ
話声 相手しだいによく変る

川西市 田中 喜俊

メルヘンの子供に添寝羽根布団
ばあちゃんに關係ないと通信簿

寝屋川市 太田 とし子

真直ぐに登り詰めても係長
人間のエゴ地球も異変四季も変

姫路市 山崎 治夢

電話から温い人柄もれてくる
気がつけばやっぱり人の世話してる

鳥取県 権代 康女

叱るだけ叱って父は何時も留守
髪型もまねて亡母を偲んでる

鳥取県 橋谷 静江

朝刊を斜めに読んで靴を穿き
母サンが使うと不思議よく切れる

岡山県 伏見 すみれ

島根県 菅田 かつ子

おいこらで今日も一日始まり
掛け違いボタンの穴が抗議する

鳥取県 今本 早苗

道草の味知っているランドセル
あったかい心の人のそばにいる

鳥取県 中西 智恵子

賽銭は小銭ばかりの石仏
白菊へ囲まれ遺影ほほえんで

鳥取市 谷口 侑里

凄く夢夫と宇宙へ旅に出る
息子には夫の悪口言うまいぞ

和歌山県 上岡 正直

うまいもの鳥から先に秋の味
この一年何してきたか日記とじ

岡山県 福原 悦子

結び目を確かめ合って和を保つ
煮豆たく追憶にある亡母の味

岡山県 後安 江山

恐い程不思議に当る母の勸
年金で楽しい余生趣味に生き

ひろうすを炊けばいねむり笑う顔
悪気など自分はないと言いきれぬ

八尾市 向井 しづ子

来世まで約して一人先に逝き
ラーメンの屋台に飛び込む雨宿り

寝屋川市 坂上 高栄

サンブルも入れて薬を医者がくれ
一時雨所によりは無責任

大阪市 山北 三三三

たこ焼きを食べて大阪好きになり
孫のこと一つ一つが気にかかり

大阪市 乾 哲静

預金帳引き出すばかりで入りがない
留守ですと九官鳥に断わられ

藤井寺市 菊地 繁男

生存の現況届け出すポスト
横にした銚子並べて飲み比べ

羽曳野市 山本 たけし

積雪が老妻に休めとご忠告
カラオケは楽しむだけと自嘲する

十和田市 小笠原 敏夫

妻の留守 五月蠅くないがチト淋し
誘惑に勝ってむなしさチト残り

八戸市 島田 昭

北国の日課もふえる雪おろし
目が治り幸せ袋が小さすぎ

香川県 植田 千カエ

新店舗ママがひとしお美しい
注射より娘の見舞の方が効く

鳥取県 久野 野草

幸せは母のキャリアで豆が煮え
結び目が母だとわかる荷が届く

岡山県 福原 辰江

父の目に眩しいほどの娘の脱皮
妻病んで戸惑うキッチン オンとオフ

大阪市 武田 昌三

宝くじ三十枚が精一ばい
最悪の子感をいつも考える

榎原市 西本 保夫

多忙にもばたばたしない影法師
張り合った後が苦いねお月さん

鳥取市 谷口 百合子

遺児達の白髪は増して胸せまる
台風をのがれし浜の姫小松

唐津市 野崎 ハル

日溜りの昔はなしが燃えてくる
土産物やでアリバイも買っておく

鳥取県 鈴木 公弘

夕焼の里にも明日の詩がある
だんらんの部屋で鍋物煮えたぎる

兵庫県 西井 つや子

口惜しさに流した涙糧とする
逃げたくて言うでは無いが荷が重い

岡山県 森下 正子

長き道藍受の父へ日本晴
老父と飲む番茶の湯気に亡母を置く

羽曳野市 徳山 みつこ

子守りの中で池のこわさを教えてる
梨の香をのせて観光バス帰る

鳥取県 橋本 孝由

川柳を書くチラシばかりふえる秋
孫自慢袋に詰めて小出しする

島根県 今川 三津江

ポーナスの一部はジャンボの夢に出し
にせものがお先にほれたひとめぼれ

大阪市 平井 露芳

軒下に大根吊るし落ち葉焚く
解体のソ連のなだれちと怖い

泉南市 坂根 流水

山茶花も咲いて初冬に彩を添え
今日流す汗は明日の虹となる

岡山県 杉本 伊久栄

奈良市 井上大

両花田嵐の日々も少ししあろ

罰金でベースアップの大相撲

泉佐野市 大工静子

お経読む最中風呂ブザーなり

悩む事亡夫恋う程喚く程

唐津市 山門幸夫

行きずりにふと行きずりに亡母を見る

雲仙の紅葉は今年もないままに

姫路市 服部一典

町工場バブルの泡だけ流れ来る

有名になれば親戚ふえてくる

静岡市 増田扶美

変人と言われて好きな道に生き

亡き父母の声が聞こえる十二月

和歌山県 三原究

ネクタイの外出だから気が締めまり

あちこちと踏んで自動ドアやっと開き

島根県 兒玉幸子

奥出雲 春まで雪を追うくらし

四季かわる峯寺の膳も冬の味

島根県 岩田三和

村の灯が十時に消える文化村

平凡を好む人たち寄っといで

鳥取市 中居武士

新築に家紋現わす菊瓦

へそくりを隠した場所を妻に聞き

唐津市 野田旭恒

良し悪しにつけて五の日に縁があり

小春日が続いて妻もハミングで

唐津市 山下剛司

日めくりも薄くなりあわただし

初孫を抱いた気持はどうだろう

岡山県 平田たけし

冬日和温い日ざしに豆を選ぶ

土を愛し土を友にし父の指

◆ジュニアの部

大阪市 新井晶子 (中二)

クリスマススローソクの夢ゆれている

冬が来て夢の吐息を凍らせる

大阪市 吉川星高 (小六)

長い首えさをとるのにひと苦労

ウホウホホ ゴリラにふんをなげられる

香川県 田中菜実子 (小四)

夢の橋通り抜けるとある未来

学校は北緯三十四度です

大阪市 吉川峰明 (小二)

お猿とね握手したんだいいだろう
明るいよやっぱり電気大切に

一人吟

秀句鑑賞

—1月号から

小林 由多香

考えるゆとりをくれぬ砂時計

高橋 千万子

考えてみれば当り前のことであるが、当り前を当り前に感じさせないと、ところに川柳の妙味がある。この句からは心のあせり、そして砂時計のすがた、形、しかけなどが想像されてくる。

貧しさの中で小犬がまた生まれ

岩本 笑子

いい品種の犬ではなさそう。雑種ほどよく生むそうであるが、小犬ってかわいいものである。しかし、飼うとなると大変。登録、注射、えさ、散歩、金も手もかかる。早くかわいがってくれる人を探したいもの。

今年まだボタンひとりで掛けられる

福本 英子

高齢化がすすみ、介護を受けなければならぬお年寄りが増えてゆくという。なりたか

はないが、いつかは来るかも知れない。初詣も元気ですませたし、まだまだ人様のお世話にならなくてもよさそう。

花びらの一枚ずつは頼りなし

田中 輝子

川柳家の目はこんなところにまで向けられる。物を見る目、考える力のすばらしさを感じさせられる。花びらの多いほど華麗さがあり、楽しませてくれる。「頼りなし」と言い切った結びに力強さがある。

先入観で胃袋ふぐをよせつけぬ

光井 玲子

高級魚となったふぐ。さんまやいわしを食べるようなわけにはいかないが、ふぐの句は沢山お目にかかって来た。しかしこの句は大変たのしい。先入観の恐さをひしと感じる。私は抵抗なくふぐのおいしさを信じている。夫の背を見て歩くくせつきました

島崎 富志子

こんな句が詠めるって大変すばらしいことです。ただ旦那の後を控え目に従ってゆくというばかりではない。旦那を気づかひながら歩く癖がついたという夫婦の愛が伝わって来てうらやましい。

石鹸のやさしい泡に勞わられ

本間 満津子

石鹸の泡は多く立つほど心地よいものであり、「やさしい泡」とは大変うまい表現と思う。一日の疲れを癒してくれるお風呂、女性らしい見つけと表現のとてもたのしい川柳である。

とうさんが居るから出せる空元氣

堀江 芳子

川柳でなければ表現できない人情の溢れた作品。こんな句がさらっと詠めるには、かなりの年季が積まれている。とうさんはお父さんでなく、当然旦那であり、家族の構成、雰囲気を感じられる。

ひとりのこされて黒豆だけを煮る

柴田 英壬子

十月にご主人を失くされたばかりの英壬子さんの実感句であろう。正月料理には欠かせない黒豆を煮る。元来、マメであるようにとの縁起からである。ご主人の分までマメでいて欲しいと願いたい。

元日にパンを食べると言う家族

松尾 柳石子

別にあつて不思議ではないが、昔から元日といえはお屠蘇、おせち料理、お雑煮で祝いのを常識として来たものである。こんなところへ素材の目を向ける川柳のおもしろさ、たのしさを格別である。

水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

榊本 蔭児

思いつきり泣くのは夜が更けてから

声田 絢子

この句を読んだ時、私の脳裏に二十数年前のことが蘇ってきた。若くして急逝した同僚の奥さんの氣丈さが、我々の間で随分、話題になったものだ。小さな子供を抱えての奥さんの姿には、男連中でさえ、涙を禁じえなかつたのに、奥さんは若い女の身で、葬式の前後も含めて、我々の前では一滴の涙も見せなかつた。最愛の夫を失って悲しくないはずはない。人目のない所では、それこそ涙の涸れるほど泣いたことだろう。しかし、悲しい時には、人前であろうと涙を流すのも、人間らしいと思うのだが…。

ひとつづぐら投げ返す石持っている

中尾 まゆみ

同感。周りの意見に何一つ反対せず、いつもにこにこ暮しているお人よしも結構かも

知れないが、たまには一石を投じるのも人間らしいし、人生も面白いのではないだろうか。川柳ならではの味である。

刹那刹那を女阿修羅の貌になる

池 森子

確かに女を言い得て妙。女流作家ならではの味があると思う。刹那と阿修羅という二つの梵語をうまく使ったテクニクは非凡。

刹那(梵刹那) || 極めて短い時間。阿修羅(梵Asura) || 釈迦を守護する八部衆の一つ。また六道のうちの阿修羅道の主、戦闘の神(中略)三面六臂像が多く、二臂は合掌し他臂は宝珠や弓矢を持つ。

奈良の興福寺で、国宝の阿修羅像を何回か拝んだことがある。端正な、女神とも見まがう容貌は、とても鬼神とは思えない。

恋の歌お顔存せぬ方がよい

宮尾 みのり

確かにそうかも…。会って想像とおり、またはそれ以上だったと言うことはまずない。たいていは幻滅の悲哀をかこつこととなる。それよりも、美しい情熱的な詩歌に胸をときめかしている方が、どんなに楽しいことか。

今日も又ふたつは増える笑い皺

流 奈美子

一昨日も昨日も、そして今日もまた笑って

暮せる作者を誠に羨ましく思う。しかし、人生はどんなに恵まれた人でも、時には苦しいことや悲しいことが起こるのが世間一般である。でも作者は、どんなことでも笑いとばし笑い皺の増えることさえ楽しんでる。誠に結構。

一日だけテレビを見ない修業する

足立 由美子

面白い句。その修業成就しましたか。たとえ一日だけにしても、テレビを見ないなんて私にはとても考えられない。無理に修業する必要もないと思うのだが…。

盛装をすると演技がたくなる

大川 幸子

人間誰しも盛装すると、人の目を意識し、自然と挙措が改まるもの。それを演技と見た作者の川柳眼。何でもないことをサラッと云っている。このような句が好きだ。

逢えた日の笑顔は特に美しい

沢田 きん

母さんに冷やかされ行く初デート

上鈴木 春枝

本当にそうだと思う。好きな人と逢うてきた娘の顔には、自然と笑みがこぼれるもの。公認の初デートの娘も、きつと美しい顔で帰ってくることだろう。

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

平成三年九月号〜十二月号

路郎賞候補作品

野村 太茂津

疑いの目で一線を引いている 弘津 柳慶
ひとりよがりの席に画鋏が落ちていた 丁坪サワ子

グモイ東京デマにほんろうされて冬 田村 新造

ジャングルで又もやお逢いした仏 坂口 公子
父さんの地図に曲がった道がない 川島風云児

キツト癒るよと妻の手相観る 山本規不風
尾を振らぬ男に飯面など要らぬ 吉岡 美房
距離置けば愛がひしひし押し寄せる 富上 光代

そつ言えば距離のとりにかた下手でした 天正 千梢
アメリカを撃ちてし止まんコンバイン 小池しげお
雲仙にすまないような稲の出来 天満三千代

作文に母は一番えらい人 吉村 一風
化けて出るくらい意地は持っている 越村 枯梢

乗り継いで継いでわたしにまだ着かぬ 西山 幸

幸せをつかむ片手をあけておく 奥田みつ子

黒川紫香

ワープロの手紙に愛を盛られても 内田結実
穴のあくほど赤ちゃんに視詰められ 福浦 勝晴

鍵束のひとつひとつに男の絵 奥山美智子

ぼけ防止のお守りでっせ旅土産 宮尾あいき
大ジョッキ仲間が多い方がよい 西出 楓楽
タイムカプセルわたしの恋も入れてある 田中 輝子

お隣も孫が来ている夏休み 原 さよ子
ある時は女同士になる母娘 小玉 満江
お隣の電話が鳴っている秋よ 小島 蘭幸
生たまごかけるご飯に穴をあけ 西村 早苗
泣きながらゆくのもあろう蟻の列 矢野佳雲

この坂の下で女が待つている 土橋 螢
一匹になって秋刀魚は反り返る 吉岡 美房
案内状が来たから美術館へ行く 菅井とも子
その割に夫の留守も忙しい 西口いわゑ

西田 柳宏子

シテとワキときどき交代して夫婦 西出楓楽
もつ一度会える嬉しい忘れ傘 本間満津子

憶病も単怯もやはり人間味 桜井 千秀

昨日より今日の自分がうんと好き 吉村一風

千羽鶴の一羽が小さい風の音 西山 幸
二度の職判コは小さいほうに音 矢野佳雲
ゆつくりと寝転ぶ夢をみる達磨 三宅 保州
たつぷりと湯吞二つに茶をそそぐ

針のない時計で凄いいことを言う 春城武庫坊

うそのない親子ですぐに口喧嘩 羽原 静歩
数珠もたぬ手でよし鐘の音に合わせ 中塚 遊峰

見返してやる気ゆつくり手を洗う 上田 翠光

妻の座に歳時記があり梅らつきよ 石川侃流洞
落リンゴ拾う無口のまま拾う 玉置重人
古里はいいな五衛門風呂がある 伊藤 寿美

阿萬 萬的

ハウス農業自然をコントロールする 岡本 清水
飽食の子供に成人病のつけ 福元みのる

道出来るそれでお墓が邪魔になり 行天千代
海流に乗れず養殖魚は泳ぐ 荻野鮫虎狼
ばけ防止のお守りてっせ旅土産 宮尾あいき
十人十色わたしを叱る色もあり 神夏磯典子
ひとりよがりの席に画鋲が落ちていた

建前と本音神代の昔より 羽原 静歩
自分から自分に嘘を言う落日 堀端 三男
老い哀し夫唱婦隨の便秘薬 福浦 勝晴
男いっぴきバチンコ玉がままならず

それだけのものと量りの針がいう 新家 完司
平和呆け安定剤を飲んでいる 樫谷 寿馬
ひとつ覚え二つ忘れて老いて行く 小西 雄々

足して二で割る悲しみとよろこびと 嘉数兆代賀
土橋 螢

書きかけの手紙のままの余生かな 永田俊子
持てるだけ持ってほしいなもの落し 本間満津子
甲虫ベットのつもりなどは無し 舟木与根一
淡雪の恋に鉛筆書き似合う 春木圭一郎
飲みに行く「月の砂漠」というドア 中村ゆきを
何事もなかったように萩が咲く 佐藤 奏月
天地無用貼られて故郷へ舞い戻る 舟渡杏花

父に遇う少年の瞳は男なり 稲葉 冬葉
雑兵に連帯感がしかと有る 森井 菁居
虫の音が揃う頃には嫁が来る 羽津川公乃
母親はお腹いっぱい食べさせる 橋元 美恵
瞑目と居眠りとは違う背 堀江 光子
アメリカを撃ちてしままんコンバイン 小池しげお
救命具はひとつあなたはどつします 木本 朱夏

風の中の羽のようなる政治かな 栗谷 春子

平熱で聞けば何でもない台詞 藤井 高子
猫の名をつけるに三日考える 勢理客トミ子
新築のにおいがいつの間にか消える 大坪天涯
見て見ない振りで歯車合つて来る

貧乏な昔はもつと夢があり 北川とみ子
嫁く娘に正座で話すこともなし 井上 直次
年金のくらしは猫の知らぬこと 松浦登志子
裸足になってふる里たしかめる 藤井 正雄
郵便屋さんが素通りをした長い午後 井上すみれ

べランダで煙吐いてる男の座 木下 道子
海鳴りを逃げて深海魚になった 池内かおり
部屋に鍵かけて始まる子の脱皮 池 森子
自己主張する雑草の根が深い 山本 すみ
森 三枝子

川柳塔賞候補作品

小出智子

台風が来ると夫婦の気が揃う 山海 友照
大らかな子の絵にほっとしています 竹田さやか

人ごとと思っておれぬ無縁幕 豊福 路子
自分より人の仕事が楽に見え 富士 トキ
暑いからなるべくボーとしています 江口有一朗
感心をしているだけで芸がない 田賀八千代
愛を知り嘘が上手になりました 田中 道胤
事務的にご処理下さいとの返事 田中 孝子
雪かきの疲れをほぐす柚子湯舟 森崎 忠祿
正堂堂ピンハネと言つ消費税 岩本美智子
ひまわりもうなだれていた終戦日

おばあさんの咳で寝不足してる猫 森安夢之助
生き方の違いに気付くちぎれ雲 児玉 歌子
宿題はみんな出来たかお父さん 山田 保蔵
死にたいと言つて三度の飯を食べ 大石たき
路地長屋隣もうちの鍵で開く 水木 博男
賞味期間切れたわたしの誕生日 木下 道子

貧乏な昔はもつと夢があり 井上 直次
甲斐性はないが火遊びだけはする 大西文次
同じ夢見て幸せに暮らしてる 大角 幸代
許すこともおほえ人間らしくなる 藤井高子
来客が門を出るまで吠えつづけ 岩切 康子

玉置重人

高杉鬼遊

橋高薫風

橋高薫風

橋高薫風

橋高薫風

何くわぬ顔で根まわし済んでいる

宮本かりん

庭の花花屋で値段見て帰り

菊池トミエ

黒田 緑

ゴミだけは隣に負けぬほどに出し

朝倉大柏

正論も年金ほどの軽さなり

中村 要

赤鉛筆ばかり減ってく父の汗

北川とみ子

一筋を歩む不器用かも知れぬ

宮尾みりのり

達観をしてから溢れだす絵皿

流 美奈子

妻の留守赤いトマトは丸のまま

大西 桂子

頼りない男で嘘もようつかぬ

渡辺 南奉

宮口笛生

バス停の冷えは足から這い上がり
白石春嶺
目の高さかえて心を休ませる
大角 幸代
一筋を歩む不器用かも知れぬ
宮尾みりのり
脳味噌の程度に合わず辞書を買う
大橋政良
腹の立つことはっかりと腹を立て
山田保蔵
歯車が噛み合うまでの油差し
黒田 緑
幸せな風が耳打ちして通る
酒井 靖子
みんないい人で油断をしてしまふ

高田美代子

沢田 きん

それなりに生きて幸福掴んでる

池 森子

終点で待つのはきつと妻だろう

嫁った娘の部屋で寝てみる座してみる

尾宮 弘治

秘密よと女の口が嬉しそう

上鈴木春枝

もっ少し分ってほしいから泣いた

大角正道

周波数合わせてみたい人がいる
長浜 澄子

板尾岳人

先頭を走らないから長持ちす
池田寿美子

満ち潮を見て欲のない背中
大橋 政良

一寸おくれて話がしたいちぎれ雲
大川幸子

ゆつくりと話をしたい白い雲
沢田 きん

受け皿が欲しくて鳩を飼ひ慣らす
鶴久百万両

逃げるのが下手で冬の森に居る
池 森子

すまみ風うわさ話を聞きたがる
松岡 幸子

無理な力を抜けば遠くが見えてくる
山本 友照

叛いてもやがては戻る母の海
山本 すみ

山下りて男は髭を剃りたがる
鈴木 良征

夕焼ける風の向うの赤とんぼ
菊池トミエ

ペン先から佳境に入る愛の章
中尾まゆみ

生き方の違いに気付くちぎれ雲
児玉 歌子

さようなら十指多弁な別れの譜
藤井 高子

物語 風が吹いたら幕が開く
新井 朋子

約束の小指謀反を考える
柏本 靖子

第15回鳥取県川柳大会

とき 3月29日(日) 午前10時開場

ところ 鳥取市立総合福祉センター

兼題 「文学」「正体」「通う」「守る」

「まもなく」「するい」「消毒」

「ハーサル」「庭」(各題2句)

堺番傘川柳会創立 65年記念川柳大会

とき 3月20日(日) 正午開場

ところ 堺市民会館大集会室

(堺市翁橋町2丁1-1)

宿題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「スリル」 杉森 節子選

「よもやま」 玉野可川人選

「風景」 木野由紀子選

「渡る」 加藤 翠谷選

「なさけ」 森中恵美子選

「生きる」 榎本 聰夢選

「この頃」 西尾 栗選

事前投句(2月29日締切)

「希望」 梶川雄次郎選

会費 3000円

(竹山逸郎句集「気流」記念留呈)

パーティ(申込制・4000円)

◎事前投句・申込先

〒590 堺市櫛屋東1丁2-2

堺番傘川柳会

堺番傘川柳会

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、く、ろ

(14)

橘高薫風

ロンドン君が亡くなった。

この年の川柳雑誌四月号には、「麻生LO
NDON君は本誌主幹麻生路郎先生の長男と
して大正八年八月九日、大阪市西成区三日路
町に生まれられ、昭和二年三月一日零時四十
五分、兵庫県武庫郡鳴尾に於て永眠されまし
た。行年九歳」との記事が写真と共に掲載さ
れている。

路郎は新春号の編集後記で、「小生の病氣
は十二月に入って軽快となり再び多忙裡の人
となつて居ります」と記しているが、その風
邪が一月から二月にかけて家族全員に伝染り、
次男のアートさんとリリさんは肺炎をおこし
四十度の高熱が続く。他の軽い人たちの中の
ロンドンさんは二月九日から床に臥し、絶食
状態となり、遂に三月一日ジフテリアでこの
世を去る。その葬儀に続いてリリさんの入院
手術、一家は最悪の事態を迎えた。

一年前の新春号には、

どの子どもどの子ども息災でお元日

という句を発表した路郎だが、その悲嘆は察

するに余りある。先月号で少し触れたが路郎

の子煩惱ぶりは多くの作品からも顕著である。

結界の中へうけとる子煩惱

子煩惱がつたんがつたんしてくらし

晝のふる泳ぐ氣にさえなる父よ

ある時は子をだんばしでくいとめる

告別式は三月二日鳴尾の自宅で営まれた。

病中の令息令嬢たちが抱かれたり、かかえ
られたりの焼香、受持訓導と学友の参列は涙
を誘った。大朝、大毎をはじめとする新聞が
筆を揃えて訃を伝えたところがあるが、それはLO
NDONという名前の特異さによるもので、
路郎は、ほぼ三ヶ月前に次のような内容の文
章を書いている。

「ロンドンやアートの名が、今の世から見
て変極である事から、新聞雑誌が宣伝してく
れたために、僕自身、ロンドンやアートの父
として知られている」。

路郎先生は編集の合間の雑談で、私に、ロ
ンドンの名は英国のキャピタルの意ではなく、
狼の生態などに明るいアメリカの経済学者ジ

ヤック・ロンドンにあやかつた名であること、
また、出生届を出したときも、即座に受け付
けてはもらえず、中央官庁へ問い合わせしてか
らの許可で、日数がかつたことを話して下
さつた。そして、

「四女の奈那が生まれた頃は経済界に打撃
のあつた大正九年だったので、私の生活も亦
最も險悪を呈していたから、

天井のひくさも知らず子は生れ

という句が、いまだにその當時を回想せしめ
ている」と書く。これも、奈那は、この貧し
い中に、いずくんぞ、いずくんぞ生まれ来し
やの意味あいだで命名したのでのお話であ
つた。そう言えば、アート(次男)、リリ(三
女)の音楽的な命名は、生活の安定に繋がつ
た故とも推測出来る。

川柳仲間から、ロンちゃんのお愛称で呼ばれ
た利発で小さきユーモリストの一周忌に発表
された路郎の一連の作品は、句集「旅人」に
収録されているが、路郎の魂はまだ定まら
ず浮遊している風である。

お父さんはやはり川柳々々云つてるよ

お前がいたらと思ひ出すと煙草ばかり喫う

お父さんはネ覚束なくも生きてる

お父さんの神経衰弱がわかるかい

湯ざめするまでお前と話を夢に来よ

句評リレー

十・十一・十二月号から

高須賀 金太
桜井 千秀
矢野 佳雲
土橋 螢

嫌という言葉にもある裏表

井上 白峰

金太 一読明快だけれど、それ以上に読者に訴えてくるものがない。原因は下五の裏表というありふれた言葉にあるのではないかと思ふ。

千秀 正面から取り組めば、それこそ訴えるものがないと思ふこの句、少々羽目を外してみてはいかがでしょう。男女間の微妙な色っぽさ加わると、裏表にも深い意味合いが込められている—そんな気がしますが。

佳雲 句意はストレートに伝わりますが、言い尽すと余韻を失う恐れがあります。千秀さんの言われたように、男女間に置いてみる

と想像が広がります。作者は嫌と言った時の仕草を考えてごらんと投げかけたようです。

螢 反語の説明に聞こえる。「いや」という言葉にもある裏おもて」と、もう一度書いて読んでみた。金太さん、千秀さんのおっしゃるとおり訴えてくるものが裏表で霞んでしまつて、羞恥から「好き」の表現を強めるために出す日本語である。佳雲さんのおっしゃるとおり、「いや」という言葉をもう一つ星が出るようにロマンチックな表現のほうがおもしろい。

金太 螢さんの「反語の説明に聞こえる」

が、この句のすべてを物語っています。

千秀 そうですね。「この嫌」は、佳雲さんのおっしゃる仕草が大きく物を言うと思ひます。仕草は即ちお人柄。螢さんの反語の意味合いもそこで生きてくるはずですよ。

佳雲 螢さんの「反語の説明に聞こえる」に参りました。だが作者がこどもストレートに言えるのは、あらゆる具体例を考えながらふと浮かんだ抽象句だからでないでしょうか。

螢 あっさり「言葉」でない具体的な行動表現をよしとする句の仕立て方のほうがよく分かる句になると思ひます。

黄昏は静かな湖を見てみよう

春 城 年代

金太 功成り名遂げて、今は過ぎ去つた日々を思い起こす毎日。こころ豊かに余生を送る作者を彷彿とさせます。「湖」は「海」の方が句に広がりがあつて良いのでは…。

千秀 さて「湖」から「海」へ広がりを出した場合、黄昏の静かさが失われてしまうのでは…。金太さんから異議が出るかも知れませんが、私はこの湖を見ている作者から、一抹の忙しさを消し去ることができません。

佳雲 名曲アルバムの表紙を見ているようです。お膳立てがあまり整いすぎた感じがしますが、「見ている」でなく、「見ていよう」に作者の意志を感じ、動中の静を感じます。

螢 いい句ですよ。年代さん、黄昏の人生で

はないでしよう。黄昏を湖面に映して明日のプランを考える。「黄昏の」のほうが私は好きです。哀愁の川柳はともむずかしいと思います。佳雲さんのおっしやるとおり、「見ていよう」に拍手をおくります。

金太 螢さんのおっしやるとおり「黄昏の」とした方が、これから何かをしようとする意欲が感じられていいと思います。

千秀 作品は作者と知己かそうでないかで鑑賞も変わってくる。人はしばしば傷つきやすく、そんな折りの句としてそっとしてあげたいのです。

佳雲 私もう一度、人生の黄昏に置きかえてみましたが、切り込みがきつすぎます。自然の黄昏と静けさと湖が三点セットになって、神とむき合っている姿とりたいのです。螢 金太さんの句評に「湖」と「海」、どちらにしても句の変化はないと思いますが、「静かな湖」「静かな海」はどちらかと言えば、湖面のほう詩的ではないでしょうか。

ブライドが側頭葉で邪魔をする

小池 しげお

金太 いつもすばらしい軽味の句を作られ

るしげおさんに脱帽。何と言っても、この句の場合、「側頭葉」に尽きるし、光っています。ただトップバッターとして、あえて問題提起をするのであれば、「が」「で」をそれぞれ「に」「が」にしてみましたらどうなるのでしょうか。

千秀 「側頭葉」は、日ごろ聞き慣れぬ言葉で、どうもピンと来ないので。辞書を引いて納得しました。初心者の方とお付き合いの多い私の場合、「頭の隅で」にしたいですね。

佳雲 句意は新しいものでありませんが、やはり側頭葉が新しい見付けでしょう。でも「頭の隅」も捨て難いと思います。

螢 私「側頭葉」が日常語でないので、ちよつと抵抗を感じる。読んでいても、凡人にその意味がわからない。しかし、ペテランになるとブライドが許さない側頭葉かも知れません。金太さんの句評のとおり軽味の句だから、しげおさんの側頭葉が現代を諷刺する。

金太 前頭葉に対しての側頭葉だから、こたわるようですが、「ブライドに側頭葉が邪魔をする」でなければ、そこそ私のブライドが許しません。

千秀 「側頭葉」が頭の隅に引つかかったまま離れてくれないので、二、三の方に尋ねてみましたところ、皆さんご存知でした。知

らぬは私ばかりとはまことに恥ずかしい次第、ここはあっさり脱帽のほかありません。

佳雲 単純にブライドが側頭葉（判断などを司る）を邪魔すると、人間の業を考えたい句だと思っていました。ブライドが判断の邪魔するよりも側頭葉に新味があります。

螢 ブライド・自尊心・自我・自慢・男・女・職階制など、この世に生きている限り持ち歩くもの、邪魔にならないようにしたいものです。

わが恋は角を曲がって行つたきり

田中 薫

金太 誰しも経験のあることを、「角を曲がって行つたきり」と表現したところにこの句の生命がある。しかしながら、上五がいかに古い感じがする。インパクトのある適切な言葉はないのでしょうか。

千秀 金太さんから、インパクトのある適切な言葉をとのご希望、「その恋は」なんて考へても見ましたが、こつ言うことは経験豊かな方ならず浮かんでくるのでしようが、どうも私では……

佳雲 「わが恋」と大上段に構え、行つた

きりでサラリ。中七の角を曲がるが効いて、残像すら残らぬ見事な別れ、まことに見事なそれつきりです。したがって「わが恋」でいいのでしょうか。

蟹 大胆にふられた曲り角っていいじゃない。見えなくなった恋を偲ぶのも、ベンチの二人の初恋も十人十色、思いおもしろい恋が通り過ぎてゆく。金太さんの恋、千秀さんの恋、佳雲さんの恋、愛してまうと言ってしまったら恋でなくなる葉隠れの恋こそ、真実の恋ではないだろうか。薫さんの恋は？

金太 「残像すら残らぬ見事な別れ」と言われた佳雲さんの言葉に納得。失恋の痛手を微塵も感じさせず、淡々と詠まれた作者に拍手を送ります。

千秀 「呼べばまだ間に合い、そんな曲がり角」こんな柳友の句が思い出され、対照的な感傷に浸っています。曲がり角の向こうまで気にかかる私、このお二人にはかないません。

佳雲 このさざりとした余情は何でしょう。上五と中七に「が」が二回あった後、下五、さざりと引いたりリズムのせいでしょう。

蟹 みなさんのご意見に何も付け加えることはありません。

ウソの輪をたぐれば母のところで切れ

高橋 千万里

金太 どこか言って欠点がなく、大変よくできた句だと思いが、迫ってくるものがない。作者が大ベテランだけに、そつなくまとまっていると言うか、技巧的と言うのか。:

千秀 作者が大ベテランとかしこまると、思い切って言えませんが、その点はお許し頂くとして、嘘も方便、まして母が子のためにつく嘘には必死の願いがあって当然。ただ母の「とこ」を「膝」とした方が、愛情が強調されるのではないのでしょうか。

佳雲 ウソの輪をたぐるを手がかりに、おらかな作者の掌の上で、母の温容・威容を見ることができました。

蟹 「ウソ・嘘」の輪と母はあまり馴染まないと思う。「輪をたぐる」も無理なような気がする。金太さん、千秀さんの句評にあるように、抽象に陥った句は実感句に負ける。もっと具体的に母を見て、母を詠んだ句がほしい。

金太 句評というのはむずかしいもの。作者の意図からの外れに陥っているかも知れない。

いと自責の念にかられる毎日です。

千秀 母を具体的に詠むとなると、厳しい母、優しい母の二通りに分かれそうです。その真ん中辺へ持ってくれば、この「嘘の輪」もたぐり寄せられて、実感句に近くなる。

佳雲 宝の山に入りながら、手も足も出ない感じ。母の像は浮かぶのですが、確かな像が結ばないのは、ウソの輪をたぐる現実が、私に読めないせいでしょう。不勉強な私に、母を詠むのにこういう手法もあると教えられました。

蟹 「母のとこ」の「とこ」も文芸では無理なような気がします。「ところ」「何処」「こ」と、あてはめてみようとしても、どうも陳腐になる。

まっ白な本をいつまで読むつもり

内田 結実

金太 徒労におわることをいつまでやっているのだ、と解釈しましたが、自信がありません。難解句だと思います。

千秀 難解句とおっしゃる金太さんと同じ思いにかられながらも、常に結実さんの川柳眼を絶賛してきた私として、今彼女は迷いの

測に立っているのだなとの思いで、心ゆくまでお読みなさいとしか申し上げられません。

佳雲 「いつまでも」とすると本人であり、「いつまでも」とすると、問いかけになるでしょう。「白紙の心にならぬと読めぬ本です。一生読むつもりです」と答えたかも知れません。

螢 活字が消えてなくなるまで読むつもり
の結実さんの句、佳雲さんの句評のように、
活字がとんで白くなるとときと、じっとみつめてまっ白になるとときがありますよね。そんな芸術性を川柳でよむすばらしさ、迷いからいま覚めた句だと思えます。「まっ白な本を」のまつまりがうまい。

金太 三氏それぞれの句評を拝読して、つくづく自分の鑑賞眼の弱さを感じさせられました。もっとももっと勉強しなければ、と痛感しています。

千秀 佳雲さんは「白紙の心にならぬと読めぬ本」と言われ、螢さんは「活字が消えてなくなるまで読むつもり」と解釈されていますが、私は少々違うように感じました。結実さんがまっ白い本と表現されたのは、ご自分の目の前の現実、あるいは目標ではないかと思う。巧くまとめられているが、迷いの真只中の句として胸を打たれました。

佳雲 千秀さんは、作者と親しい仲ということですが、それにしても心温まる白い本の解釈、なるほどなあと思われました。

螢 自分自身をみつめる句。反省を繰返す私と「まっ白な本」がいま目の前にあるような気がいたしました。

理論家の男が青い辞書をひく

鈴 木 良 征

金太 頑固で融通のきかない人物像が浮かび上がって来ますが、「青い辞書」に引っかけりを感じます。私の乏しい語彙には青い辞書はありません。

千秀 「青い辞書」に引っかけるところ全く私には解釈できません。そこで、あまりむつかしく考えず、兎に角、筋道を通したいのだが返答に困り、外来語辞典なんかでお茶を濁している——と、まあそんな辺りでご勘弁ください。

佳雲 青空とか、青い海とかの青でなく、未熟の青とりたいのは、前の方とおなじです。理論一辺倒を冷やかしたい気持を抑えて青い辞書とされた点に新味を覚えます。

螢 佳雲さんと同感です。「青い辞書」が

分かりにくいのが、「青い」のは若い、青二才とか、新しい辞書にも解される。理屈づくりの理論家が多い現代の諷刺のきいた良征さんの句、男が青いのか、青い辞書なのか、はつきりするともっといい句になると思えます。

金太 螢さんのおっしゃるのように、「青い辞書」とせず、「男が青い」とすれば、はつきりしてきます。

千秀 この度、図らずもお歴々のお仲間に加えて頂き、句評りレーの役を担った訳ですが、正直言って四苦八苦、お三方の足手まといではなかったかと心配です。

佳雲 螢さんの評に刺激され、読みの浅さを反省しました。理論家の男の概念で、節を通す男だが世情にうとい男を考えました。その男が引く辞書が青いとは、やはり血が通ってないということでしょうか。そう考ええると理論家の男「が」を「で」にしたらどうか、などと考えました。

螢 五七五の短律詩、川柳で男を読み抜くことは、自分に厳しくならなければ半端になると先輩に教えられたとおり、言っているのは容易だが、自分が男になり切るときには「理論家」だけでは弱いような気がします。句評りレーご苦労さまでした。とても教えられるところがありました。感謝します。

銀河系

河内天笑選

富田林市 藤田泰子
幸福が続きますよう腹八分
お休みよ企業戦士の弟よ
股引が絡んできます洗濯機

米子市 新正子
お祈りをしないケーキのイブが来る
頑張って遊ぶ 大きくなるために
春夏秋冬わたしはホットコーヒーを

米子市 八木千代
こんなとき笑える男頼もしい
洗面器の波はいくさの前ぶれか
人ひとり通れば消える砂絵かな

大阪府 藤田頂留子
板囲い昔がビルになるらしい
何が起きてもおかしくない世紀末
当分は売れ残るだろ世界地図
大阪府 榎本 露児
水族館魚の顔はみな真面目
俺と同じ顔と会うたら怖いだろ

和歌山市 内芝 登志代
坊さんをまた怒らせて古都ゆれる
雑草にも自惚れがあり凜と咲く

砂川市 大橋 政良
居酒屋に人間臭い灯がともる
おつむてんでんちゃん個性を持つている

岸和田市 芳地 狸村
役人を大阪弁でまいらせる
ときどきは暴走したくなる平和

米子市 澤田 千春
月の夜に仁王はマンボ踊り出す
いつかきつと島の夕日を見に帰る

唐津市 山口 高明
信頼をされたばかりに手が出せず
邪恋かな心で犯しはじめたり

富士宮市 渥美 弧秀
裸木のかすかに揺れて刻流れ
影法師重なり合つて数え唄

香川県 辻 上 よしみ
格好を気にせぬ娘気にかかり
カラオケの音が外れて場が和み

鳥取県 乾 隆風
青筋の中におやじの愛があり
ほどほどの目盛りがほしい一升ビン

羽曳野市 吉川 寿美
情報過多の海で溺れている河童
モジリアニの首か秋が深みゆく

吹田市 山本 希久子
とりとめもなし思い出を追う氷雨

反対に走りたい子の縄電車
米子市 石垣 花子
古傷へ妻はとぼけていてくれる
ここ掘れと犬が時々無理を言う

米子市 林 荒介
蠟燭の消える姿が焼き付いた
わたくしに袴りを迫る浪頭

海南市 三宅 保州
ナマケモノになりたい十日ぐらいなら
うるさいと一喝出来ぬから黙る

静岡市 沢田 きん
控え目に控え目にして誤解され
恋人のようにペットと暮らす日日

岡山県 清水 悠貴女
カタカナの街でとまどう冬帽子
橋いくつ渡ると母の背に届く

鳥取県 西原 艶子
運だめし危ない橋も渡ろうか
焚火してひととき若い日に戻る

倉吉市 最上 和枝
躓いてばかり師走が駆けていく
淋しくて野に冬帽子投げてみる

鳥根県 加本 義良
どれ程を生きる命か蕎麦の味
窓ガラス磨いて明日の絵を探す

鳥取県 権代 康女
両方の悪口聞いていておかし
体重を計った夜はめしを抜き

大阪市 北 勝美

なまけ者なまけることを考える

西宮市 奥田 みつ子

疑えば耳に住みつく小悪魔

和歌山市 堀畑 靖子

あの人がめつさ笑えない私

鳥取市 武田 帆雀

姉一人甘い批評はしてくれず

岡山県 山本 玉恵

疑いも持たずお山の水を呑む

鳥取県 美浦 美代子

いさぎよく落葉となつて天仰ぐ

兵庫県 遠山 可住

鉄砲が鳴ったら走るだけの犬

鳥取県 土橋 螢

善いことが降つて来そうな元旦だ

兵庫県 酒井 靖子

夕焼が川面をもやす胸燃やす

岡山県 小林 妻子

人間のこんなに苦い味だった

姫路市 大原 葉香

不平不満 底に沈めて川流れ

兵庫県 奥野 テル

待ち呆け欠伸に節がついて出る

鳥取市 大坪 天涯

看護婦が大きな口をして笑う

広島県 中村 要

とばつちり来そうな妻のダイエット

唐津市 福島 紀一
散髪の帰り口笛など吹いて

羽曳野市 田中 透太

時々はさかさまに見る妻の顔

熊本県 高野 宵草

妻の手に或る日生きてた母の味

大阪市 町田 達子

不器用な処世やっぱり君らしい

鳥取県 新家 完司

幻聴であろつか母が呼んでいる

竹原市 信本 博子

毒くもの美しさには参ります

寝屋川市 平松 かすみ

アイラブユー枕詞は抜きにして

和歌山市 桜井 千秀

念ずれば通ずるなんて甘いのよ

寝屋川市 江口 度

バーゲンセール仏壇よお前もか

東大阪市 松山 隆

表彰の紙一枚が身を縛り

唐津市 山口 ふさ子

欠陥は完全よりも美しい

姫路市 服部 一典

目につくは辞めた会社の求人広告

桜井市 岩本 雀踊子

枕の下流れているは過去の音

出雲市 久谷 まこと

不器用で踊る阿呆の列はずれ

岡山県 矢内 寿恵子
悲しみの数だけ炎える寒つばき

和歌山市 後藤 正子

冬の樹にふれてこころを持ち直す

大阪市 神夏磯 典子

尺八に男の重さだぶらせる

岡山県 江口 有一朗

恥ずかしさ楳に自分を磨かねば

熊本市 遠山 夏生

大の影投げて要に居る孤独

大阪市 大福 留吉

同病が待合室で知恵を貸し

青森市 工藤 甲吉

純情は爪の先まで惚れている

和歌山県 三原 究

病床の友に時間をあげ見舞う

和泉市 中川 楓

流されていまして休憩したいから

東大阪市 今岡 貞人

本心を書けぬ日もある日記帳

大阪市 川原 章久

バラ一輪愛の行方を聞いてみる

姫路市 中塚 遊峰

心眼で見れば仁王もやさしい瞳

松山市 谷 真風

真実は一つがやがや言うけれど

姫路市 丁坪 サワ子

輪の外で遠吠えしてる正義漢

倉敷市 小野 克 枝
なるようになると野良犬すましてる

鳥取県 春木 圭一郎
人妻と遊ぶつもりが遊ばれる

和歌山市 北山 好笑
もう止めの拍手と知らずまだ歌い

鳥取市 岩原 喬水
へそくりを隠した本を屑に出し

大阪市 井上 白峰
忘れたい事が心の隅に棲む

鳥取県 石谷 美恵子
よく出来た嫁で息子を尻に敷く

八戸市 島田 昭
仏壇のめし済んだころ茶をあげる

守口市 結城 君子
太公望同じ姿勢で並ぶなり

大阪市 尾崎 黄紅
銀行からの親展が妻にくる

米子市 金山 夕子
うちようてん馬鹿とも見えてるらしい

和歌山県 藤井 春子
バラ色に染めてポーナス消えて行き

和歌山市 古久保 和子
やっかいをかけると言うて母が来る

河内長野市 植村 喜代
食べて喋ってわたくしに隙だらけ

寝屋川市 堀江 光子
十二月には十二月八日あり

福岡県 本田 忠男
患って小さくなった旅プラン

大阪市 山北 三三三
幸せな余生に見える他人の目

尼崎市 春城 年代
考えさせてと言われたままで四季が逝き

和歌山市 山田 高夫
めしどきになると階段降りてくる

名古屋 藤井 高子
赤を纏うてもやっぱり冬は冬

米子市 茂理 高代
苦しいから微笑んでみる知恵もあり

和歌山市 山川 克子
ロングヘアー コピーガールが闊歩する

有田市 松井 かなめ
あこぎな事して繁昌とは不思議

大阪市 岡田 ふみ
サル山のボス争いに天下見る

大阪府 深日 白光子
名物に結構うまい物があり

池田市 岡本 吉太郎
誰か口切ると出る出る反対論

和歌山市 山口 三千子
披露宴最中ポケットベルが鳴り

西宮市 瀬尾 六郎太
私似よいや僕似だと秋篠宮家

岸和田市 清野 こう
えりちゃんの決め手は健康的な肌

大阪市 井上 太
グルメ好き総身が病ぐるみなり

八尾市 高杉 千歩
父祖の島橋桁となる冬挽歌

枚方市 海老池 洋
ファミコンの名手鉛筆削れない

唐津市 浜本 義美
長寿税とられるときがいつかくる

寝屋川市 岸野 あやめ
文化とやベットフードに好き嫌い

奈良市 宮口 笛生
贅沢に溺れてうまいものがない

箕面市 岩津 ようじ
PKOおれが征くんじゃないけれど

大阪市 板東 倫子
リンペンは死語でなかった地下の夜

西宮市 西口 いわゑ
それからは馬耳東風になっている

和歌山市 青枝 鉄治
忌憚なき意見でとんだ左遷の地

鳥取県 山内 芳江
あの丘を越えればきつと楽になる

寝屋川市 太田 とし子
頼まれもしないついでを買って出る

柏市 上鈴木 春枝
人妻の好意錯覚してみたい

香川県 川崎 ひかり
映画見た帰りはみんな主人公

高槻市 川島 諷云児
頂点の椅子に孤独が吊つてある

和歌山市 堀端 三男
腹の底から笑うと急に腹が減り

芦屋市 根来 敬
事故ほどに運命を知るものはない

姫路市 山崎 治夢
リーターになって話術の本を買い

鳥取県 土橋 はるお
仏壇の夫のへそくりだけ拝む

鳥取市 小谷 美っ千
耐え忍ぶ冬の砂丘に雪が舞う

唐津市 田口 虹汀
字の読めぬ鳥が知ってる禁猟区

弘前市 村田 善保
生者必滅 心の準備未だ成らず

西宮市 林 はつ絵
悪友の約束ばかり春を待つ

和歌山市 福本 英子
虚虚実実腹さぐり合う久しぶり

箕面市 椎江 清芳
横道へ曲ると顔の効く男

今治市 矢野 佳雲
身ぶり手ぶり入れると嘘も面白い

唐津市 中村 弘
青海が胸のつかえを吸うてくれ

弘前市 相馬 銀波
泪して見送る駅は風ばかり

豊中市 江口 明光
能面を脱いで朝までよく眠る

藤井寺市 中島 志洋
見かけより神経質な三枚目

唐津市 浜本 治幸
お人好し軽いジョークを真に受ける

和歌山市 田中 みね
日の目見て雑魚の態度がでかくなり

熊本市 北川 一進
家中を風邪かき回し逃げて行き

唐津市 山門 幸夫
相槌を打ったばかりに買わされる

鳥取市 美田 旋風
少しでも期待するから腹が立つ

倉吉市 奥谷 弘朗
満洲に男賭けたが消えちゃった

東子市 小山 悠泉
長生きをしてねと禁酒誓わされ

豊中市 辻川 慶子
忙中閑好き芝居はゆっくりと

笠岡市 松本 忠三
わたくしの採点多少依怙虫貞

八尾市 山下 美津留
へんくつが手抜きをしない鍋の味

豊中市 田中正坊
今年こそそのんびりしたいとも思う

岡山県 福原 辰江
嫁の荷をすいすい迎える赤トンボ

岸和田市 三輪 通彦
補聴器をONにして聞くよい話

茨木市 堀 良江
虚像実像楽しんで見る赤穂義士

有田市 生馬 芙美子
誘惑に負けず励んだ父の鉄

八尾市 秦 正子
朝もやのペールですこし若く見え

京都市 松川 杜的
容赦なく師走のカレンダー瘦せる

今治市 月原 宵明
ブランコが動かないまま十二月

唐津市 山下 剛司
忘年会の数は今年も妻に負け

大阪市 塩田 新一郎
さりげない顔で買ってる宝鏡

岡山県 池田 半仙
義理一つかたづかないで年を越す

倉敷市 田辺 灸六
花束を投げて追慕の供養波

唐津市 山門 タミ
茜空たき火の芋も焼けたころ

鳥取県 さえき やえ
台風をつくろい出来ぬままに冬

▼投句は、川柳塔用箋またはハガキに3句、
毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りく

ださい。

尚香のむ 八木千代選

多すぎる杭を抜いてる月の夜は

大阪市 北川 弘子

うまく説明ができるかどうかは分かりませんが、目の先の事にこだわり、暮らして続けているような毎日に身を置いていいますと、もちろんそれはそれで大切なことには違いないのですけれど、大きな道を見失うような不安に襲われてきます。私が月の下に立つのはそんな時です。それが僅かな時間であっても、私にとっては水蓮と触れ合うときなのです。

弘子さんの映像について自分の影を重ねてしまいましたが、どれだけ余分な杭をわが身にも周囲にも打っていたことかと。風通しをよくして心の風景をひろやかにしてもらえ。月の夜とは、そんな夜だと思ふのです。

一気に書いた便り一気にポストまで

和歌山市 田中 輝子

この勢い。この満ち潮のような凄じさに圧倒されて、私は心ぐるみ押し流されてしまいました。それも快く納得してその潮の中に身を投げてしまったのです。ポストへ走って行く風までが加速して、この歯切れのいいこと。目には見えないひたむきな念が見えてきて。川柳って、不思議な力の持ち主ですね。

少し遅れて歩く 憎まれないで済む

堺市 板野 美子

玉手箱ときどき煙入れ替える

和歌山市 桜井 千秀

苦に賞があるならきつと貰うだろう

米子市 茂理 高代

まじないはまだ効いてこず月沈む

和歌山市 木本 朱夏

人恋し記憶ばかりを継ぎ合わす

大阪府 鈴木 節子

ひとときのことばに揺れている景色

和歌山市 後藤 正子

山茶花も風が痛い

和歌山市 福本 英子

と夜啼きする

米子市 川上より子

宝物は他人が磨いてくれている

和歌山市 福本 英子

今日買った靴とどれだけ生きられる

藤井寺市 高田美代子

冬のブランコ少し高めにこいでいる

鳥取県 さえきやえ

おとし蓋 自我を煮詰めて煮含めて

和歌山市 西山 幸

ドラマ終わって箱は静かに蓋される

米子市 政岡日枝子

冬の底けんか相手が欲しくなる

大阪府 西出 楓楽

寒いスワンのように泳ぎたし

富田林市 藤田 泰子

ひび割れた壺といのちの話する

和歌山市 福井 桂香

生煮えのままでの年越すだろう

米子市 寺沢みどり

あの人が欠けても回る風車

島根県 松本 文子

人生の疲れがやってくる地下街

米子市 青戸 田鶴

若き日の今なら惑うこともない

八尾市 宮西 弥生

しゃぼん玉消えほんのくぼ撫でている

芦屋市 黒田 能子

われながらいとしと思う物忘れ

西宮市 林 はつ絵

折りふしの絵日記老いの風にいる

吹田市 栗谷 春子

暗闇に透かせば罪の幾千も

名古屋 藤井 高子

花の首たれて苦しい日が続く

金沢市 廣本 文子

山茶花の垣根も遠いことなりし

西宮市 奥田みつ子

窓ガラス叩くわたしをたたく電

尼崎市 春城 年代

とても静かに秋はわたしを追い詰める

米子市 白根 ふみ

わたくしをがっかりさせぬ試着室

富田林市 池 森子

自分史を書くと自分が現れる

米子市 林 瑞枝

修飾語使い古した冬の鬱

西宮市 西口いわゑ

ノーメイク明日の靴がまだ見えぬ

出雲市 園山多賀子

登りつめて私の夢は何だった

和歌山県 小倉 アサ

大阪府 上江洲勝子

宝島を今日も捜しているピエロ

自重する事最良と出たみくじ

透明になるまで本を読んでいる

時々は三步遅れて隙つくる

結び目がほどけたらしい裏切られ

人間も蟻もおいしい物へ列

大波に逢わない策を練っている

足元をすつきりさせて行く枝葉

どつと来てどつと出て行く露天風呂

歯車の合うとき合わぬ時 オイル

涙では深い悲しみ流せない

灰汁掬う女の業を掬うように

不揃いの編目にこころ覗かれる

限界を知って峠で矢をたたむ

私の涙も愛もベンの癖

少年に死んでもいえぬ母の恋

計のたよりあの味噌漬はもうこない

ここに来て子等に伝える亡母の愛

単線を乗り継いでゆくふきのとう

波長合うひとがこの世にいてくれる

間違いの電話切らずにお話を

ふれあいを飾にかけて生きて行く

越えてしまえばとても安らく姑の基地

何事もなかった病廊 午前二時

魂のウロウロ散歩二十五時

米子市 新 正子

和歌山市 堀畑 靖子

鳥取市 小谷美つ千

米子市 小塩智加恵

堺市 高橋千万里

米子市 石垣 花子

米子市 足立由美子

大阪市 津守 柳伸

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 山川 克子

和歌山市 内芝登志代

羽曳野市 芦田 絢子

鳥取県 石谷美恵子

兵庫県 奥野 テル

堺市 山本 半銭

弘前市 肥後和香子

八尾市 高杉 千歩

米子市 光井 玲子

堺市 桜沢あかり

鳥取県 西原 艶子

豊中市 辻川 慶子

貝塚市 池田寿美子

姫路市 丁坪サワ子

羽曳野市 吉川 寿美

竹原市 信本 博子

急ぎ足待つてる人がある

残月と歩幅を合わすウォーキング

ストレスの袋乾かす腹話術

女六十なにを急かさされ染める髪

近ごろの少女も読むやたくらべ

子の喧嘩 狂い出すのはお母さん

母ちゃんがおばはんになる反抗期

風にもたれ風に押されて冬に入る

眼のうろこ落ちないままに年明ける

この頁めくれば春の章になる

冬になる旅予約に跳んでいる

空き缶を蹴れば自由を主張する

瓶細工 弾んでみたい糸手まり

集団になると悪女の面を付け

もう誰も悪女の笛に踊らない

お百度の朝日優しい影くれる

良いのかな付けが来そうな日々平穩

想い出をひとつ開いてシクラメン

足の冷え恋は未完のまま暮れる

み仏のいのちを宿す如意宝珠

年末の子感が何故かよく当たる

新時代どう変わろうと年明け

◇

投句先 〒683 米子市花園町14

香川県 川崎ひかり

枚方市 浦辺 静水

姫路市 福本 好花

倉敷市 小野 克枝

寝屋川市 堀江 光子

寝屋川市 宮崎 菜月

大阪市 板東 倫子

岡山県 矢内寿恵子

米子市 木村 春枝

和歌山市 古久保和子

兵庫県 北川とみ子

岡山県 山本 玉恵

富田林市 片岡智恵子

守口市 結城 君子

出雲市 石倉美佐子

東京都 山口 新子

堺市 米谷 紫江

寝屋川市 柴田英壬子

西宮市 門谷たず子

米子市 服部 朗子

大阪市 町田 達子

和歌山市 松崎 幸子

八 木 千 代

仕える

吐田公一選



宮仕え済んでのんびり趣味に生き
如才なく仕えたんまり蓄めている
親子三代よくもまあ宮仕え
妥協することも覚えて宮仕え
追伸によく仕えよと書いておく
姑に仕える私が最後までも知れぬ
姑に仕え嫁にはうとまれる
上役の癖も覚えて女秘書
ひとり身になって野仏にも仕え
王様に仕えてうまい汁を吸い
寝たきりの母に仕えてまだ嫁けず
本音など仕舞っておこう宮仕え
片意地な男に無理な宮仕え
妻や子を背に耐えている宮仕え
仕えるも死語になりませう核家族
死火山のままで仕えた二十年
窓際で開き直って仕えてる
生涯を仕えて満ちたよい時代
宮仕え解けて気楽なルーブタイ
オイと言う呼名に仕え妻の皺
合理化の噂におびえる宮仕え
定年まで仕え個性は擦り減らし

ふさ子 正論を押えてくらす宮仕え
三男 三猿を守って仕えた母の皺
杜的 落葉ではないぞ二度目の宮仕え
たず子 宮仕え紙一枚へ踊らされ
喜子 地獄まで仕える秘書をボスは持ち
道胤 歩には歩の役割がある宮仕え
希久子 宮仕え今日を限りの定期券
高明 宮仕え白い鳥も飼うている
文子 肩書がなければ仕えたりしない
狸村 半世紀仕えた妻の抱く火種
度 仕えるの文字が消えてるギヤルの辞書
明人 尻尾ふることも覚えた宮仕え
白峰 宮仕え論吉のために我慢する
ちかし 人
千歩 宮仕え終えてゆっくり赤とんぼ
玉恵 地
新一郎 転々と紙一枚の宮仕え
温子 天
通彦 愛されて君に仕える手を洗う
三重 軸
美子 定退になって恋しい宮仕え
宵明

宮仕えボーカルフエイスが板につき
繩のれん肩を寄せ合う宮仕え
宮仕え過労死意識していても
偽善者に仕えて知った落し穴
三割は腹に納めて宮仕え
ノルマ追う月が冴えてる宮仕え
裏芸も時には杖の宮仕え

あやめ 赤が好き今年も赤い手帳買う
章 新しい手帳生年月日から
枯梢 手帳には血液型も書いておく
愛論 書くことがなくて手帳に暗れとかく
ただし 一月の手帳新年会こそなす
重人 イニシャルがやたらと多い娘の手帳
アサ マサンの手帳にゼニになる男
義美 過去の女手帳の隅で生きている
恭昌 先生と手帳出し合う歯科の椅子
倫子 手帳には月月火水木金金
サワ子 安産へ裏書きくれた母子手帳
彩子 税務署で話す手帳は別に持つ
善保 陽の目見ぬ没句いとい古手帳
高夫 自分史を書くに役立つ古手帳
しげお スケジュール秘書の手帳が指揮を取り
保州 ぼろぼろの手帳に秘める従軍記
鉄治 黒皮の手帳へ綴る点と線
奈美子 黒皮の手帳は俺の影法師
寿美 拾った手帳名前のないは救いなり
南奉 アリバイはずばり手帳の一頁
一花 アリバイを崩す手帳の走り書き

片上英一選



手帳

理瑛 笛生
四郎 恭昌
隆 ひかり
雀踊子 鉄治
あすき 白光子
しげお 明水
白光子 倫子
明水 仙吉郎
奈美子 奈美子
狸村 アサ
アサ 洛醉
春醉 杜的
杜的 枯梢

路 集

遅刻した罪を手帳が着てあげる
手帳からポトリと落ちた花名刺
美しい文字で手帳にある伏字
私だけ分かる記号のある手帳
暗号で株の損など書く手帳
手帳にある暗号妻はとうに知り
技術屋の会議手帳をまたちぎり
計画をたてた手帳は見捨てられ
手帳には書けぬ約束だつてある
冬の雲手帳無口になつてくる
スケジュール真つ白にして手帳病む
亡夫の手帳何度めくつたことだらう
亡くなった友の名消してある手帳
もみじ一枚葉となつている手帳
十二月になると反省する手帳

天牛のボケたらあかんが載る手帳
坊さんの手帳お布施の額を書き
話す前に手帳を出す男
老人になつたと役所から手帳
傷つた数だけ手帳重くなる

人 佳

正子
宵明
京子
愛論
あやめ
シマ子
度

卵

浅野房子選



安売りの卵へ二度目の市場籠
目玉焼それから今日が始動する
コロンパスの卵で負けぬ策を持つ
鶏にとつて卵は安すぎる
コロンパスの卵を揺するのほ若さ
病人が押しいただいた寒卵
無精卵私の知つたことでない
卵とは言わせたくない自己主張
海亀の卵へ温い波の音

冷蔵庫いつも卵のある安堵
卵にも言い分のある盛衰記
臓器移植医師の卵が持つ倫理
バーゲンの卵背中にも一人
家計簿の片棒担いでいる卵
精がつくわけではないが卵割る
スパーの目玉に並ぶ無精卵
戦中は卵の食える格でなし
無精卵ばかり食べてて子が出来ぬ
治らない風邪には老母の卵酒
どの家も卵料理は母の味
永遠のベストセラーだ目玉焼
二つ玉吉と信じて朝が出る

横綱の卵目指して朝稽古
朝駆けるスタミナ補給なま卵
母亀の涙が光る産卵期
お人好し他人の卵を抱いている
愛されておでんの卵黒くなり
殻付けたヒヨコが太いことを言う
プロ野球金の卵が二軍落ち
うちの孫医者のおで金が要り
今日も生む無精卵とはつゆ知らず
生卵久しむ医者には用はない
スパーの卵が衝動買いさせる
傍にいて欲しいに卵なせ沈む
杏村 卵だけ何時も一杯共稼ぎ
杜的 弁当の一隅たまご焼きつづく
正子 ゆで卵お城の桜散り急ぐ

洋 佳

公一
竜
正敏
虹江
四郎
高明
義美
ふさ子
枯梢
しげお
サワ子
雄々
富喜子
笛生
雀踊子

白峰
はるお
圭一郎
倫子
あやめ
保州
薫

抱卵のかたちで愛を溜めている
盛り場を器用に泳ぐ無精卵
無精卵暖め続ける恋を抱き
卵割る厨に朝の陽が温い

人 地 天 軸

文子
重人
信義
絹子
たず子
よし津
シマ子

初歩教室

題一 散歩

辻 白溪子

今月の題「散歩」は、着想の範囲が狭いためか大分、苦勞されたようです。特に犬を連れた散歩が目立ちました。

散歩がてら駅前広場のゴミ拾う 章久
 (駅前)の散歩気になるゴミがある)
 散歩道出会いがしらに恋仇 幸夫
 (犬)連れたライバルと会う散歩道)
 此の辺で何時もつまずく散歩道 金吾
 (つま)ずいた石を覚えていゝる散歩)
 腰伸ばし伸ばしながらの散歩道 義男
 (信号)を待たされ散歩腰伸ばす)
 病み上り廊下の散歩許される タミ
 (散歩)から帰ると見舞い待っていた)
 パンくずを持って散歩に出る日課 和子
 (パン)屑を持ってお寺へ来た散歩)
 降るよふないチョウ散る道散歩道 ひかり
 (銀杏)敷きつめた神社へ来た散歩)

車椅子桜紅葉の散歩道 高栄
 (紅葉)が散歩なごます車椅子)
 落葉踏む病後の夫の散歩道 志華子
 (落葉)踏む散歩病後と思われず)
 付合ってくれる散歩の人深す 姫女
 (人妻)と散歩したがるから困る)
 パチンコ屋までが散歩で入り浸り 好花
 (パチンコ)屋いつも素通りする散歩)
 万歩計の数字に急かれ散歩する 治夢
 (万歩)計散歩の好きな足と知る)
 あの花がもう咲く頃か散歩道 洋
 (花)咲いて散歩の道がなごませる)
 息災で散歩のあとの進む食 芳水
 (食前)の散歩日課にしてる父)
 病み上り散歩の足が不足言う 三重
 (看護)婦が付添い少しする散歩)
 愛犬が吠えて散歩に誘い出す 志重
 (当然)のように散歩をせかす犬)
 散歩道工事が道を変えさせる 静子
 (年度)末工事が邪魔をする散歩)
 生駒の灯鼓動おさまる散歩道 隆
 (散歩)する視野をなごます生駒の灯)
 散歩して母と唄った赤とんぼ 春風
 (赤とんぼ)母と散歩の前を飛ぶ)
 ジョギングも散歩もできぬ程太り 晋
 (ジョギング)を散歩に替えるほど太り)
 散歩する足を伸ばせと万歩計 轍
 (万歩)計散歩楽しくなる日課)
 湿布薬貼っているよな散歩道 平枝
 (湿布)薬貼って散歩を休まない)
 散歩して腹をすかした朝の飯 忠男
 (食前)の散歩を欠かさない余生)
 足早にネオンを尋ね夜の散歩 明吉
 (誘惑)をネオンにされている散歩)
 ねぎらいをかけて散歩の車椅子 君江
 (車椅子)としばらく散歩連れになり)
 人間が好きで雑踏散歩する 知華子
 (雑踏)が好きで散歩が苦にならず)
 散歩して選挙カーから手を振られ 繁男
 (散歩)へも手を振り抜け目ない選挙)
 犬連れぬ手ぶら散歩が間が抜ける 保夫
 (犬)連れた人へ散歩が道ゆずる)
 行先は犬が知ってる散歩道 高雄
 (行先)を犬に委かしている散歩)
 散歩道美人を見ればふり返り 忠治
 (散歩)道犬も美人へ振り返り)
 お医者から散歩のお許し出たけれど 辰男
 (お医)者から散歩すすめるほど治る)
 長命に賭ける散歩を欠かせない ふさ子
 (体操)も散歩も欠かさない長寿)
 散歩の代りラジオ体操しています 侑里
 (散歩)とりやめて体操してる雨)

いつも会う人が気になる散歩道 治江

(いつも会う人が病気が出会うわな) 秀香

散歩道色とりどりの落葉踏み 秀香

(散歩道落葉に冷えが溜ってる) よしみ

手をつなぎ散歩した夜を思い出し よしみ

(散歩する夜はしつかり手を繋ぐ) マサエ

好きな道犬に従う散歩道 マサエ

(散歩する道にも犬の好き嫌い) 一乗

古い二人朝の散歩を日課にし 一乗

(定年から散歩を日課にした夫婦) ふみ

孫と孫幸せごっこ散歩道 ふみ

(孫二人離れた散歩を羨まれ) 敬

散歩でもするかと重い腰たたく 敬

(散歩でもしたらと邪魔な粗大ゴミ) とし子

あの方も独り散歩のベレー帽 とし子

(年寄の散歩に似合うベレー帽) すみれ

散歩道見知らぬ人のよい笑顔 すみれ

擦れちがう人がぶつぶつ言う散歩) ますみ

(反省をしながら散歩してかえる) 正子

(痴話げんか少し反省する散歩) 正子

もすが鳴きふと立止まる散歩みち 正子

(見慣れない鳥に散歩の足とまる) しづ子

散歩道さざんか通火碎流 しづ子

(火碎流散歩できない道にかえ) 太一郎

生き生きと散歩に今朝も八十路越え 太一郎

(生き甲斐の散歩八十路の足達者)

散歩して来ると一杯目販機で 和枝

(目販機へ立寄り散歩息を抜く) 方子

ビルの群京の散歩に影おとす 方子

(ビル谷間縫うて散歩の寒い京) 彩子

散歩道野仏の目も春の彩 彩子

(野仏も目をつむってる散歩みち) 絢子

菊咲いて散歩の足が持たらず 絢子

(散歩する足をなごます菊の鉢) 春枝

よちよちの子が指示をする散歩道 春枝

(列車見えるとこまで孫と来た散歩) 友照

哲学の道師の面影を散歩する 友照

(哲学の道が詩人に合う散歩) 富喜子

早朝の目覚め急に散歩する 富喜子

(食前の散歩家族は起きてない) 純子

決めたよに何時もものこて逢う散歩 純子

(大連れた美人といつも会う散歩) みつこ

冬うらら孫と散歩はポストまで みつこ

(ポストまでの散歩は孫がついてくる) 喜代子

散歩道いつの間やら友が出来 喜代子

(声をかけられて散歩の連れが出来) 美代子

散歩道犬はめられて友となる 美代子

(ほめられた犬尾を振っている散歩) 隆雄

朝の道太股ぐいぐい出る散歩 隆雄

(無意識に散歩が急ぐ朝の冷え) 暁子

陽をあびて散歩させてる車椅子 暁子

(車椅子陽差しが誘い散歩する)

二人して歩けば月も追いかける 善保

(公園の散歩へ月がついてくる) 仙吉郎

万歩計まだまだ足らぬが足弱り 仙吉郎

(万歩計つけて散歩の足が伸び) 方子

散歩道去年の畑も家が建ち 方子

(家建って散歩が来ない径になり) とし子

夕焼に足をとられている散歩 とし子

(夕焼を背なに散歩をして帰る) 忠治

老眼鏡忘れ本屋を素通りし 忠治

(散歩して本屋へ眼鏡忘れて来) 春風

散歩道農家の水菜買って去に 春風

(穫りたての野菜売ってる散歩道) 好花

散歩する言うて煙草買いに行き 好花

(散歩するついでに煙草買うてくる) 治江

今月の着想・表現の好い句 治江

リハビリの散歩の杖に冬の風 治江

散り銀杏踏むのが惜しい散歩道 ますみ

許可が出て酸素ボンベを曳く散歩 晋

参考句 晋

へリコプター空の散歩は高くつく 杏村

私の句 杏村

捨て犬が尾を振り付いて来る散歩

題「この辺」 2月15日締切(4月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白漢子

朝一番 七草きざむ母達者
兄ちゃんが一番先に叱られる
受付に一番美人置いてある
母の打った釘が一番きいてる
一番好きな人には添えぬ寒椿
一番の馳走は嫁の笑い声
しよっぱなが一番強い奴に遭う
遺言をあける一番前へ行く
一番と一番どちらも泣いている
ここ一番に居ったためしのない夫
朴訥な人で一番手が早い
用のない男が一番先に来る
何食べても一番旨いコメのメシ
ここ一番の妻の強さを当てる
古里の老母が一番気にかかる
せつかちで一番前に乗る電車
ひたすらに歩く一番星光る
泣きみその妻が一番頼られる
一番に羽化した蝶に敵が待つ
宝くじ一番ちがいの慌てよう
ここ一番効かぬ男の太郎冠者
一番の悪だつたのが立候補
奥座敷 一番怖い咳払い
一番でうなずいてる囀
なりふりかまわず春一番に逢いにゆく
ここ一番 男に潮が満ちて来る

朱夏 美代子 笛生 しげお たつお 典子 武庫坊 外吉 路児 一風 天笑 透太 勝晴 たつお 保州 外吉 重人 一風 紫香 狸村 ただし 笛生 章久 栗 螢 隆 楓云児 元紀

此処は一番あなたに譲る下ごころ
人 反旗持ついちばんおとなしい男
地 一番を競いはしない蟻の列
天 一番丸い円を描くのは老いた母
軸 一番は嫌い器に添わぬから
兼題「案内」 田中正坊選
子備校の案内状が先に来る
金の無い方が案内する飲み屋
朴訥な案内に会う母の里
案内をされる敵のどまん中
案内はするが責任負いまへん
口下手な案内徹に入り細に入り
初春へ案内されてゆく賀状
案内があるから来たにけむたがる
案内が後ろへ来る交差点
かんじんなどが消える案内板
案内するのに困る地下迷路
東海道 道案内に一里塚
喪の家を訪う矢印にみちびかれ
案内はなくとも西へ西へゆく
葬儀屋の矢印が有る寒い道
ラブホテル案内人の無表情
ご案内の二人へ仲居さんの勘
朴訥な方言ガイド親しまれ

美代子 天笑 絹子 楓楽 年代 正子 緑良 温子 雀踊子 月子 太茂津 窟佑 度 薫 高雄 智子 楓楽 (小)英子 倫子 外吉 満津子

旅を倍楽しくさせる名ガイド
バスガイドお国訛りがうけている
案内板に伝言板の前で待ち
案内板にいくつか嘘のあるお寺
ガイドブック片手に秘境の湯もみ唄
いそぐのに自慢の庭を案内し
バックカスに案内されて夢の国
案内はやっぱり金のいる話
まかせよう山には山の案内人
案内状ちよっぴり虚栄も盛つてある
案内のマイクおたくが燃えています
案内をされて手の鳴る方へゆく
水着ショーの案内が来る寒の入り
どうぞこちらへ税務署のもの静か
佳
案内のマイクが僕を呼んでいる
説明に詰まればガイド歌にする
初夢へガイドブックを積んで寝る
会長が案内して作る作業服
案内状が届かぬ魔女が病んでいる
人
古里へ案内したい人が居る
地
案内を乞えば山茶花散りかかる
天
案内に厳しさがあり永平寺
軸
政治家の案内状が来て困る

透太 白浜子 グン吉 寿美 トメ子 射月芳 重人 はつ絵 萬的 天笑 幸 美代子 外吉 天笑 薫 美房 勝美 寿美 保州 いわゑ 笛生 正坊

兼題「占う」 西田 柳宏子 選

占いでまた没になる設計図
 占いは今年も阪神ビリと出る
 占うはポーナス袋の中味だろ
 今日だけは占う言葉信じよう
 茶柱で占う朝の軽い靴
 占つてくれはるアంతはどないです
 コンピューター占い明るすぎないか
 占いに凝つて自分を見失う
 占いがまちまちに出る初詣
 よつぱどの悩み八卦の灯に座り
 新しいロシア占う世界の目
 嫌なことだけは占いよう当たり
 母さんの占い夢をアラスする
 初春の毬 弾む今年へ賭けている
 タタヤから好き放題を言う手相
 占いは努力がいると付け加え
 占いをけなして男盛りなり
 占いの凶をも吉にした努力
 占いの二度目の妻を信じよう
 恙なく占うこともない夫婦
 占いを信じも少し待つとする
 笹竹に問うて迷いを深うする
 どん底に來て墨色を見て貰う
 大吉と出たから買ったタケユタカ
 今日運勢 読んで出社の靴を履く
 当たらない八卦にほつとする命
 占つてから縛れた夫婦ゴマ

温子 利武 雀踊子 拔智 勝美 凡九郎 保州 諷云児 二南 笛生 道胤 度胤 ダン吉 天笑 薫 菅 頂留子 栗 幸 白溪子 寿美 たつお 金太 三男 典子 柳英子

占いの列にさみしい僕がいる
 トランプ占い独りの部屋は底冷えて
 占いを梯子している寒い耳
 占つた星の一つは乱を抱く
 占いがはずれて今日を無事ている
 笹竹で人の運勢かきまぜる
 健康を占う朝のティーカップ
 占いの言つたよい時期とうに過ぎ
 占いで変えた名前が他人めき
 おみくじをひいて淀まで切符買う
 人
 収穫を土に占う太い指
 地
 占いはコイン一つで済む決意
 天
 病室へみくじの吉をもつてゆく
 軸
 占いに心の奥まで踏み込まれ
 兼題「笑顔」 橋高 薫 風 選
 サア其処は作りものでもよい笑顔
 往年の笑顔懐し原節子
 母にだけはいつも笑顔を見せておく
 いい汗が光る勝者のいい笑顔
 親も子も笑顔で貰うお年玉
 むるいお茶出され笑顔が作れない
 作り笑い声にならない声を出し
 自画像の笑顔に少し嘘がある

ダン吉 萬的 寿美 元紀 武庫坊 雅文 衛正子 一風 絹子 外吉 隆 満津子 柳宏子 凡九郎 雅文 惠空 重人 二南 柳英子 二三 柳英子

赤ちゃんの頃から次女は笑顔よし
 病室は笑顔になってドアを開け
 世渡りが上手になってきた笑顔
 にこにここともうかりまっかあきまへん
 受付の笑顔に女が見えた杜風
 皮肉言う時も女将にある笑顔
 とつとときの笑顔あなたを騙すとき
 身構えてすまう美人の笑顔には
 仏像のかすかな笑顔とむなり
 母の笑顔あけほけという椿咲く
 少年の笑顔にヒヤシンスが残る
 亡母の写真に何故か笑つた顔がない
 しわいっぱいの母の笑顔はだませない
 オルゴール母の笑顔がつめてある
 晩酌の笑顔は亡父に似るとい
 敵の矢を上手に受けておく笑顔
 笑顔には弱いと孫に見抜かれる
 正月の大きな笑顔写される
 福笑い伸々出来ぬ笑い顔
 億のつく保険をかけている笑顔
 母ちゃんの笑顔に負けたなと思
 う久しぶり大皿出している笑顔
 ライバルの笑顔 火繩の匂いする
 笑顔だけ総理ハト派のようである
 佳
 赤ちゃんの笑顔に勝てる訳がない
 砂時計 返した笑顔に切り替える
 逆転勝訴 老いた笑顔が痛ましい
 再生紙 笑顔を見せぬ紙人形

智子 絹子 美房 正坊 萬的 重人 美房 トメ子 はつ絵 元紀 薫 一風 いわゑ 章 寿子 二南 笛生 道胤 三男 月子 昭子 寿美 ダン吉 金太 信義 たつお 岳人

皇室の写真 笑顔に声がない

葉

カレンダールの美女も疲れて来る笑顔

雅文

紀子さまの笑顔にどんとん乳が出る

弥生

憂い持つ笑顔 男は放つとけず

英千子

致しましよ役者としての笑顔なら

薫風

兼題「国」

西尾

葉選

皇太子妃を国中で待つ春を待つ

たず子

南国のドラマへ星が降りそそぐ

寿子

国は今 日の丸という踏み絵置く

はつ絵

国富んで女ばかりが強くなる

楓楽

壁取れてひとつの国になる歓喜

庸佑

お隣の国と仲良くなりたくい

天笑

北国の風 峨々として縷々として

ただし

捨てたつむりの故郷と切れぬ国訛り

緑良

国境紛争 島国は有難い
忠誠を誓った国が泡と消え
圧力に不甲斐ないなと思う国
金持ちの国で育った幸不幸
国栄え部分部分にあるはずみ
靖国の母は今でも粗衣粗食
国柄を言葉の端に匂わせる
お年玉もらえる国でよかつたね
長寿国 余生で生きる人ばかり
国民に知らずと山が動かない

重人

強国もバラバラになる今世紀

トメ子

この国に生まれて先祖の井戸守る

弥生

あらたまる幸 日の本の柳箸

柳伸

神々の国も人間くさくなり

文子

三色旗 春また遠いクレムリン

小英子

大根の葉っぱ流れる国があり

岳人

国民として日本を自慢する

柳宏子

なろう事なら鎖国をしたい米談義

千秀

飽食の国で情けに飢えている

壽美

雪国で育つて粘り強くなる

千正子

国引きの神話が生きている出雲

年代

お国の為の命はととも軽かった

規不風

日本の国が今一番に面白い

智子

この国に生まれ振り袖着ています

三男

村おこしのひとつイノブタ共和国
ニッポンの国だよ日本語で喋れ
長寿国出生率は低下する
キリストも釈迦もこなしした神の国
カチューシャの国の雪解け待つボルガ

しげお
雅文
度
ただし

傾国の美女 王様を愛さない

英千子

地 天

国訛りのとても可愛い嫁が来る

規不風

天

国消えて核が残っている恐怖

落児

軸

ロマンスもなく国境の駅を発つ

葉

（清記—楓楽）

寒中お見舞い申し上げます

3月29日 第15回鳥取県川柳大会へ来なんせ

川柳塔とっとり

池上よしお

池本山人

岩田秀和

岩田輪多朗

岩原喬水

上田俊路

小林由多香

武田帆雀

武田粗粒

谷口侑里

中島一步

西原艶子

早瀬友夫

春木圭一郎

福田多可志

前田一枝

美田旋風

山沢新風

おどろけ

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守 所定の原
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

東大阪市民川柳会

森下

愛論報

自然減り天然記念物増える
来た道を帰る月明かりの海亀
別れ言葉が溜る夕映えの港
緩やかなうねりに港は気を許す
ドラマを作ろう吊り橋をゆする
又それぞれ橋の長さを持つている
秋深し天女も腹が減ってくる
たこ焼きの味にうるさい天女たち
一流が電車に乗れば記事になる
一流が揃うと森は鳴咽する
終章は美で飾りたい道を選ぶ
マイウエー反骨の眉爽やかに
遺言に心と書いて筆をおく
太陽へ両手ひろげているところ
一輪の花のところに救われる
仕返しにくる港に残してきた影
妻ばかり褒めるゲストが気に入らぬ

度 作二郎
森子
修六
堯巨
幸子
孤舟
勝
国公
甘平
宗悟
章
外吉
南岳
湖風
白兔
シマ子

大物のゲスト堂々遅刻する

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

愛論

生き様を映すわたしの姫鏡
マネキンも裸にされて衣替え
真実を語る弁士にもらい泣き
つまされて泣いたドラマへある余韻 ①美恵子
人生を綴るドラマの八十年
明月にドラマチックの二人影
ラストシーン月に召されてかぐや姫
旧校舍木目はドラマを知りつくす
故郷を湖底に沈めて来たドラマ
不思議だな妻が噂を皿にもり
母さんが使うと不思議よく切れる
へりで墜ち傘寿を生きている不思議
秋祭り賽銭箱も身がまえる
騒がれていつの間にもやら忘れられ

山人 伊久栄 吟平 秀香 半仙 江山 江正 邦人 志重 すみれ 恒心 賛平 ふさえ

翠洋会

井上 照子報

老いさげて句忘れ鍋の忘年会
一滴も呑めぬ男の黒田節
産声にうなづく宵の地藏さん
霜柱ふたりしてのむ風邪ぐすり
ときどきは波長合わせて二人旅
老い禁句永きを願う母思ふ
小銭ばかりポケットふくらむ替スボン
また師走おかしいほどに歳かさね
わてもまだ女でっせと喜寿の母
来る年はひらき直ろうつたもみじ

綾子 蛙 絹子 さと美 千歩 照子 登志子 春子 ひろ子 宏子

無い袖も振らねば越せぬ坂もある
図書館のこは変らぬ十二月
友の手を振り切り何をつかむのか
一日のゲームを賽の目が喰う
ひとりの湯溢れさせてる満ちている
動くかにみえたがやはり山眠る
二度読んだ誓詞俵せつかん娘
水槽のふぐと暫くにらめつこ
頑張れと浮世離れをささぬ妻
シナリオが途中で狂う余命表
蟹と河豚道頓堀で迷てはる
警察に微動だにせぬ太い眉
七五三見栄はる母子借衣装
ラッシュには吊り輪に結べ長い髪
もっ少し情けが欲しい紙の皿
自由とは本をかぶつてする昼寝
特攻機思い出すよな歩の王手
爪に火を点して銭がたまらない

楓楽 光子 みつ子 幸 結実 英一 兼治郎 しげお 東雲 正坊 すすむ 宣司 仙吉郎 拓生 透太 正雄 恭昌 鬼遊

岩美川柳会

羽津川公乃報

挨拶が人と人との輪をつなぐ
お役所の挨拶肩がしやちこぼる
口下手の挨拶すぐに握手する
挨拶の仕方の本も買っている
断わりの挨拶女房任せです
挨拶なしで恋の破局が忍び寄る
野も山も動いて春の挨拶す
挨拶も営業用でそつがない
挨拶に行つて指切り迫られる

民子 かつ江 美恵子 公乃 芳江 八千代 美代子 單車 大漁

挨拶をきれいに交わす棘ととげ
花束がともきれいな世辞を言う

三幸川柳教室

三宅

保州報

ふるさとの山に誓った大銀杏

誓いなど無いが阿吽の息が合う

大器晩成心に誓う雑魚の意地

誓い合う迷いが晴れるレモンティー

簡単に誓う男の二枚舌

ジローへの誓いを破るウエディング

怠慢へ誓いの石が重くなる

この次は軽い葛籠を持つ誓い

宣誓の声凜として秋の天

街のボスそんな顔した犬に会う

傘一本ふたりで歩く雨の街

憂き晴らす街でストレス溜めてくる

ジーンズが似合うわたしの好きな街

活性化街の歴史を脱いで行く

青春を見つけた街の古本屋

ベレー帽買った気にさせた秋の街

平穏な街を軍歌が突っ走る

街角で喜怒哀楽を呑むポスト

ならぶから私も並ぶ中華街

友達も八百屋も風呂も消えた街

胸深く火花しずめて妥協する

能面をはずせば火花とび散ろう

掛掛屋の鞆の火花少年期

呼出しは火花の跡を掃いている
名刀は火花を散らすこともない

忠良 照女

博章

町子

みね

好笑

鉄治

公子

和子

幸子

高夫

靖子

千枝子

かなめ

当代

道子

昭枝

朱夏

守

よし子

精子

正一

幸子

茜

正秋

正雄

桂香

有り余る力で掘っている墓穴
引力に負けそう今日の冴えた月
井の中で明日に力んでいる蛙
理性ふと抱いた力が抜けてくる
力なら駿馬に負けはしない駄馬

川柳岩出

小倉

アサ報

一言が噂になって流れだす

寄りかかる術もなかった日の痛み

痛いところ癒してくれる母の胸

一言が喜怒哀楽を弄び

どの口も本音飛び出る酒の席

痛いところ避ける情けの夫婦愛

あの痛み今は癒され語りぐさ

毎日を痛さ身をせめ技磨く

一言が多くて縁が遠ざかる

痛いところ突くネタ一つとっておき

喜びも痛みもあって人は生き

叩かれて痛いと言わぬ反抗期

庇うほど痛い局所によく当り

一言を言わず別れた冬の駅

一言が胸に刺さって眠れない

あの時の一言わたし変えました

友情へ本音で語り合う絆

時々は本音ちらりとのおぞかせる

南大阪川柳会

金井

文秋報

ぼけ封じの寺で珈琲のみたくなる
自家用車で来なかったのは飲むつもり

千秀 孝子

親 踊齋

保州

昌子

和子

愛子

春子

千鶴子

悦男

正直

正市

喜直

正義

千代子

英子

達子

瑞穂

美枝子

紳一郎

忠雄

精子

与呂志

文秋報

作二郎

文秋

佳句地十選 (1月号から)

高須賀 金太郎

半分は妻が画き足す虹の橋

支えあう杖がときどきもめている

今日こそは秘密話そう髪洗う

酒のみの妻熱からずぬるからず

一目ずつ編みつつづける私の巢

深々と頭を下げている野心

文才はないが一つも嘘はない

筆跡を辿れば残る思っつかい

生きるのに時々意地の手を借りる

すくすくと育つ葉が母にある

氣にしつつ飲んでる葉の副作用
話わかる奴やと飲める婿をほめ
怠慢にさせる炬燵が温かい
適当に怠け長生きしています
雑草の男怠けること知らず
怠けてるようで構想練るタバコ
回復期怠り勝ちになる葉

バラのとげ尖っているのも自己主張

三歳の主張は口をとがらせる

棒グラフ伸びず課長の声尖る

尖らかす口調が妥協許さない

尖らかった顔丸くなる鍋の湯気

反抗期甘えた口を尖らせる

研ぎすます耳へ殺気が尖りだす

研ぎすます耳へ殺気が尖りだす

研ぎすます耳へ殺気が尖りだす

研ぎすます耳へ殺気が尖りだす

研ぎすます耳へ殺気が尖りだす

勝美 柳宏子

智子

度

真柳

しんじ

二南

萬的

重人

信治

シメ子

トミ子

岩信

柳伸

文平

柳伸

紫香

きみえ

美緒

志洋

しげお

呑天

アサ

花梢

粗食になれて心豊かに孫を抱く
使えますバチ当りますゴミの山
粗末でも心の温い母の膳
粗末でも汗も苦勞も知る野良着
グイエット今日も粗食に甘んじる
昭和史を生きて粗末に出来ぬ過去
目立つのが嫌で粗末に服で行く
戦力となる日が恐い自衛隊

身におばえないならんで恐がるの
三人寄れば恐い事考える
恐さ知らずの若い正義が椅子を蹴る
恐しい人だ怒ったことがない
恐い事考えていてトリカブト
恐い顔いつもと違う母の声

川柳塔唐津支部

久保 正敏報

深傷負う山肌哀れ血を流し
画用紙の白いままに腿せている
霜除けの鉢に新聞蒲団掛け
美しく老いてゆきたい少しでも
觀光地域もさまざま飾りもの
旅帰りの父の位牌へ土産供え
物忘れ呆けがきたのか古希近し
格好のいいことはかり言うて去に
障害をのり越え友の秀句あり
袖にされ見返す玉の輿へ乗る
台風後曲り胡瓜も飛んで売れ
帰りには杖を忘れる程になり
泡くわぬほどにポーナスくだされる

冬 葉 直 子 章 久 文 江 智 久 シマ子 久 子 覚然坊 頂留子 悟郎 寿美 文子 雀踊子 庸 佑

鶴鶴を犬が刈田を追いまわし
遠足の子らに紛れて天守閣
酔眼に出会う女はみな美人
ひたむきに役場に勤め無位無冠
年輪を磨いて挑む新春の句座

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

筆まめで悪筆なんか気にしない
福運を祈る賽銭軽い音
運勢を信じた父の丸い肩
運命は糸を手繰って見れば妻
運命の糸を繰って見れば妻
運命とあきらめ減った妻の愚痴
正直に生きても運が向いて来ず
悪筆もユーモア父の書く色紙
悪筆でいつも賀状を書きしぶり
悪筆の顔を賀状にのせて来る
ちよつと絵を添えて悪筆やわらげる

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

白波の向こうに竜宮城がある
さざ波に洗ってほしい罪一つ
突然に娑婆の高波打ち上げる
波にのる人生でしたお父さん
波風のかなないほどの財布抱く
かく乱の余波かも知れぬ侮れぬ
樽に眠るワインも波を抱えている
波がしらす今日は私も削られる

幸 夫 タミ 剛 司 朴 竜 正 敏 紫 香 夢之助 十四郎 向 西 鹿 太 勇次郎 勝 利 弘 治 いわお 修 水 定 人 歌 子

思い出の手箱に子らの声がする
兎箱の中でも何時も明るいよ
錆びた鍵外して箱に秋の風
針箱に母が重なる風が風ぐ
ぜいたくな箱に乗せられ海までも
風呂敷におさまる箱をよっている
かあさんと沖繩からのチョコの箱
箱の中でからからとなる夫の音
そばにいてびつくり箱を開けてはし
箱の底に嘘が少しずつたまる
首桶に似ている夏の帽子箱

川柳ささやま社

遠山 可住報

心掛けよくてまさかの役に立ち
花嫁の母で口紅つけられる
平凡に生きた夫婦に乾杯す
祖母の背に過去の秘密がまといつき
消費税の響きになれた台所
欠伸したとたんにお経ふと忘れ
針箱に昔のロマン秘めて老い
合格の電話がびびき茶がうまい
つますけばいまだに響く母の声
響き合う心で過疎の灯は消さぬ
響き合う絵に抱かせる愛の詩
大あくび気兼ねのいらぬ一人部屋
人並みに赤種も固くしめ
人並みの線からもれぬ子を信じ
かみころすあくびへ意見まだ続き
女去るあくび一つを置いて去る

富美子 八重子 恵 子 千 春 瑞 枝 亜 弥 教 子 松 子 日 枝 子 千 代 純 子 恵 美 とよ子 貞 子 美 智子 富 美 つや子 とみ子 靖 子 百合子 和 子 ヒサ子 エキオ テル 素 水 文 平

骨拾う秘密がこぼれないように

川柳後楽吟社

従野 健一報

昔出した汗と涙がくれる幸

舌が滑って三十娘の齢を聞く

自分史へ赤と黒とを綯い合わせ

口八丁シナリオなしでよく喋り

澄んだ目にふつと不安がわいてくる

ささやかな幸カタカタとミシン踏む

秋が澄み聞いてはならぬことも聞け

ロボットになって花を恋しがる

無視されて他人を見返す石を抱き

本心に泣いた女が眉を引く

美しい菩薩は汚れた手で書けぬ

長生きの秘訣根っからのお人好し

懸命に生きる背中を夕陽押す

先頭を堂々と行く父の舟

太陽熱の凄さは風呂がただで沸き

宅配で届く野菜に土がつき

可住

たけ志

義親

吟平

拓治

美智子

柳五郎

進

桃風

正秀

博友

哲郎

佐加恵

健一

可住

たけ志

義親

吟平

拓治

美智子

柳五郎

進

桃風

正秀

博友

哲郎

佐加恵

健一

玉水

浄美

秋月

岳詩

大鷹

朱玉

サワ子

輝月

礎石

葉香

葉香

葉香

葉香

葉香

葉香

葉香

葉香

葉香

ウイナナス像へソから下は見せません

みんなまで言わせず先手とるゆとり

悪縁と気づいた時は子が二人

見え捨てて仕舞えば世間氣にならず

つき次と友も言うてる身の不調

身辺の整理せかせる通夜帰

世は丸く捨てる神ありや拾う神

意気込んで描いた絵ひとり納得し

赤い糸微かに引いて今を生き

姉ちゃんでしよ母が厳しい二歳上

酔っている客をベンチが抱いている

ハネムーン成田を避けて帰国する

嬉しくもない正月を心待ち

叱られた数だけ亡父がなつかしい

甘党にしては見事な黒田節

悲子

三青

雨雀

春蘭

美代

嘉

茂章

姫女

はる子

好花

三重

一典

遊夢

客遊子

客遊子

客遊子

客遊子

客遊子

悲子

三青

雨雀

春蘭

美代

嘉

茂章

姫女

はる子

好花

三重

一典

遊夢

客遊子

いつ寝起きしても気ままな老いの部屋

遠慮なくテレビ大きくかける部屋

花のある部屋でひととき蝶になる

着替するかくれ場もない団地部屋

シヨールーム同じ間取りと思えない

娘嫁ぎ父に書斎をアレセント

又しても部屋中捜す老眼鏡

霜おりて部屋鉢花でにぎやかに

孫が来て部屋は玩具のお祭りだ

女房からのがれてはつと一人部屋

豪邸を夢見る部屋のすきま風

妻の留守六畳半分あいている

部屋にまで汐の香とどく旅の宿

風みどり部屋から猫は出せと言う

部屋にまで汐の香とどく旅の宿

ワンルーム共働きの新世帯

ご先祖とお話できる母の部屋

トシエ

ますみ

朝子

みき子

しのぶ

弥生

明子

俊子

千枝子

すすむ

龍

弘直

龍襄

一風

美津留

友甫

トシエ

ますみ

朝子

みき子

しのぶ

弥生

明子

俊子

千枝子

すすむ

龍

弘直

龍襄

一風

美津留

友甫

鬼遊

千のうを聞いた熟女の耳かざり

円高も円安もない老夫婦

この一円昔々は海だった

アメリカが円の強さにむくれている

日記には円満でない僕がいる

聴診器を注射がカパーする

おくやみは苦手で妻に依頼する

二万円切ったと値引き二百円

川柳塔とつとり

岩原 喬水報

過疎の町人もお金も逃げてゆく

過疎荒らし地上げ屋鬼がのし歩く

過疎に居て余生気楽に過ごします

村長が嫁さん探す過疎の村

人情と水を自慢の過疎に生き

過疎の良さ自然と風の詩がある

過疎が好き水も空気もみなきれい

四季の絵が好きで過疎から離れない

柿の皮剥いて過疎地の夜を守る

そろそろと歩けよ孫が声かける

六十路坂そろそろボケも見え隠れ

根回しが済んでそろそろ罫を張る

夜が明けるそろそろ別れねばならぬ

枯葉舞う老いはそろそろ冬仕度

午前二時そろそろ家へ帰ろうか

松葉ガニそろそろとときそうな頃

天国と地獄そろそろ見極める

ランクより人間性が気にかかる

金になりゃランクは平の方がいい

一 弥

さよ子

こう

通彦

ガン吉

浪速子

萬助

武助

喬水報

暁

砂山花

多可志

輪多朗

享

山人

旋風

一京

静生

行男

よしお

帆雀

俊路

明美

圭一郎

粗粒

螢

艶子

友夫

定退がランクの枷を取り外す

自己評価より低いランクに胃が痛む

ランクアップすると受験息が切れ

ランク下げ一山にして売りつくす

落ちるだけ落ちたランクだ面白い

おっぱい川柳会

木村 明人報

今更と思えど銀杯ありがたし

週休が七日で時間持て余す

青畳退院した主包み込み

仲裁は火種あおつた張本人

和解したはずが心を読み切れず

足音がやさしくなつて嫁に行く

スイッチを忘れて今朝の飯がない

雲仙が荒れて市長のヒゲが伸び

黙秘権つづくはずない家族です

お月さん私見つめて歩かす気

食足りて茶碗の音に目が覚めず

つり込まれついつい歩調合わせてる

議員なら一度はほしい総理の座

アヤトリの紐がゴチャゴチャいやになる

音のある所へモグラ近寄らず

初めから無理を承知で引受ける

月の末商品券が出演です

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

影法師走ればすたすたついて来る

満腹になればなつたで雀たち

群雀となりの娘に虫がつく

喬水

侑里

洋々

一枝

由多香

明人報

迷観子

明人

白柳子

ひかり

よしみ

いさむ

かおり

迷貫

ふみ

マサエ

吟笑

スミエ

正雪

小菜実子

放任

伽名子

千カエ

鈴江

かつ子

ヒデ子

シャッターをおろしてからのドラマです

この話シャッター閉めてからにする

走ろうと思えど前がつかえてる

天地人息を切らして走る虫

青二才知らないくせに先走る

走るのはおよしと亡母がたしなめる

台風の通過待ってる腕時計

俄雨月ほつたらかして雲走る

シャッターの隙間四島に光射し

雲走る何かなすことあるごとく

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

八起き目の勇気をくれた娘の手紙

誤字ばかりの恋文今も捨てられぬ

封切れば墨の香匂う女文字

電話では言えなかつたと手紙くる

万感のため息とんちようが降りる

午前零時かほちやの馬車のため息が

ため息が続くと白い風が吹く

ため息が落ちたリンゴの鎮魂歌

さかさまの立場になつて無理を聞く

さかさまに走つて温い風に会つ

さかさまに振つても一円まだ足らん

つなぎ目のない夢信じまた夢をみる

信じられずカルテの裏を読んでいる

信じてた背中をポンとたたかれる

車椅子母の心根信じきり

何かを信じ今年も渡り鳥が来る

たわむれに信じて神にうとまれる

芳枝

聖子

ちよえ

はるみ

歳栄

民子

悦良

博利

清泉

白汀

諷云児

年代

道胤

絹子

いわゑ

はつ絵

武庫坊

富喜子

白漢子

透太

ひろ子

義子

たす子

能子

春蘭

萬的

英子

撫でられて撫でられておびんずる様の顔がない杜的
 コメコメとコメの押し売り始まりそつ
 注ぎ足して今日一日を充ち足りる 保蔵
 おとなりの菊袋めから朝を出る 房子
 暮の街ベーターベンを聴くのどか みつ子
 裸婦の像横の蘇鉄に菰を巻く トミエ
 猿芝居ではない猿の芸術賞 てる
 責任を果して枯葉舞い落ちる よし津
 他人の子の作文読んで泣かされる しげお
 三步先歩く妻です平和です 芳子
 戦いは勝たねはならぬ寒椿 正坊
 錆ついた通用門が開いたまま 正とし
 春ですね色封筒で来る手紙 紫香

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

薄い縁をとでも大事にする継母 三男
 野心多く薄い空気を吸っている 千寿子
 ただ一度最後の亡母の薄化粧 由紀子
 薄幸の尼僧に受ける守り札 英子
 薄給の肩を寄せ合う縄のれん 瑞穂
 薄利多売夫婦で稼ぐ小商い 登志代
 薄っぺらな言い訳でした師走風 紫香
 街の情けの薄さに似てる枯落葉 萬的
 薄化粧する頃からの嫉妬心 和成
 脇役で通す我が身へ鞭を打つ 寿子
 男には打たねばならぬ杭がある 保州
 胸を打つ話 心に灯がともり 度
 げんこつで打たれた傷を大事がり しげお
 照る日曇る日打ち込むものが一つある 克子

逃げを打つ策を用心深く練る
 頬を打つ雨も時には友となる
 打てば響く夫の顔が疲れてる
 父が打つ破れ太鼓がもう聞けぬ
 義理の席手拍子だけは打っておこ
 頼り甲斐打つべきときはちゃんど打つ
 争いの渦をのがれて貝になる
 渦中から抜け出すための黙秘権
 渦消えて汚職主が返り咲き
 渦の巻く方へは竿をあきらめる
 三猿で渦中を知らぬ井の蛙
 高騰の渦に拗ねてる市場籠
 渦巻き底に沈没船がある
 普通色出せずに渦が付きまとう
 渦にいてさらりと躲す風当たり
 すかし絵の和紙に渦巻く嫉妬心

川柳大阪 高須賀金太報

万葉のもみじ名所が色づかぬ
 真直ぐなお方で人がけむたがり
 自惚れを孫に見せてる古写真
 追いつめて少し逃げ路開けておき
 縄のれん愚痴をつまみに飲む男
 冬ボートナスやっぱりバブル足を引く
 あのゲスト来るなら会に出て見よう
 満天の星に明日を信じよう
 日の荒いふるいに乗ったときあらめる
 変化球投げたらさきと落とすだろ
 落ちこぼれどこかに君の生きる道

垣根越し幼馴染みの恋愛ばえ
 精一杯生きろよ垣根の赤トンボ
 好き同士垣根を超えた深い仲
 おはよの挨拶今朝も垣根ごし
 霧が出てハンドル握る手がすくむ
 夜霧また僕に投じた謎一つ
 悪友だから本当のこと言うてくれ

川柳藤井寺 高田美代子報

仕残した仕事へ夜の不整脈
 暮らし向き子の成績も中ぐらい
 松葉蟹ふぐに負けない肘を張り
 せっかちは一聞き十を読み違い
 せっかちが服着たよううちの人の
 せっかちな妻の時計は進みがち
 せっかちが帰った後に美女が来る
 少しせっかち少しきれいな妻である
 せっかちなあなた分も生きてる
 せっかちな人には見えぬ京訛り
 せっかちに生きて明日を見失う
 湯につかり旅の満足かみしめる
 ただ聞いてやれば満足祖母の愚痴
 満足な顔で納まる霊櫃車
 不足でも満足顔で世を渡る
 満足な顔で松茸食べている
 ねぎらいの言葉ひとつで満足す
 露天風呂皆満足の首が浮く
 満ち足りて浮世の音は聞こえない
 口少し開けて満足して寝てる

三吉 まつお 天平 一步 敏 凡九郎 金太 金太 ケイ子 淑子 てつお 政代 たかし 寿美 昭子 吸江 トミ子 志洋 美房 繁男 みのる 寿美子 宗一 利武 智久 悦子 与呂志

満ち足りて海の深さがわからない
満足な夢という字がまだ書けぬ
満足な答が出ないまま眠る

赤札が店を大きくする不思議
赤シャツを着ます元気になりそうだ
内緒ごとみんな知ってる赤ポスト

赤い灯に今日もつかまり終電車
赤い螢を逃がしてそれからの喝き

城北川柳会

吐田 公一報

小柄だが太っ腹ですうちの母
落ちこぼれになりたくないといと八十つとめ

泡立てて茶碗の底の邪を払う
親方が日の丸だから太っ腹

母の日に果物かごに本添えて
泡立草去年はきれいと思つたが

真木御陵哀話を綴る順徳帝
亡姉の忌山萩こぼれ風流る

心の垢落とす石鹼妻が持つ
奈落まで落ちても悔いぬ人といる

休養をとらない蟻で疎まれる
華道展女の意地が透き通り

起立して唄う歌あり国技館
なんだ坂こんな坂だと六十路坂

順調に太っています育児帳
見送りの母だけがまだ立っている

里の句秋の匂いを持ち帰る
子はみんな巣立ち夫婦の朝の膳

主婦と言う誇り休養ままならず

透太
一屯
美代子
三夫

三郎
三郎
キミ子
和夫

森子

川柳はびきの

久留美
寿美礼
昭子
秀夫

八重子
ふみ
仙吉郎
登美子

典子
公一
小夜子
静歩

史風
きくゑ
温子
静子

佐津乃
春蘭
達子

頑固な汚れやさしい泡にかなわない
虫の夜半古きロマンの夢に覚め
愚痴を聞くへのへのもへ書きながら

年金へ糸瓜のようにぶらさがり
雷が落ちても母の避雷針
茶がうまいこんな幸せ忘れてた

穂やかに素直に余生過ごしたい

塩満

敏報

ありがたいことにそこそこ忙しい
一歩二歩さがれば見える人の貌

カレンダ―あと一枚にある重み
追伸がさしせまつてる十二月

蟹のフルコースが誘う北の旅
浮き雲に行方を問うてみたとても

わが家にもアツシ―君がいるらしい
人は皆終の棲家に柿熟す

不況風子報出してる気象庁
アメリカの影がお米を追いつめる

普段着に着替えて急に腹が減り
大正の夢は阪妻双葉山

政治家の悲願土下座も何のその
誰がための安保か米の攘夷論

墨染の袖ゆつたりと布施を呑む
傷ついたらんごに温い手が伸びる

レルルからはずれ男の目が冴える
秋の陽に猫といっしよに背を伸ばす

米買えとあの手この手で攻めたてる
平手打ち土俵上なら許される

満津子
千世子
倫子
ただし

新一郎
白峰
右近

敏報

重人
美代子
ケイ子
与呂志

たかし
絢子
吐来
胡村

たけし
悦子
たかし
志洋

かつみ
晋昇
晋

みつこ
ガン吉
敦子

利武
岩信

いい嫁で学歴などは口にせず
政策にどこか間違いはあるらしい
楠なんぞ要らぬが帽子離さない

億のつく土地とは知らぬ草の群れ
新組閣の中に疑惑の椅子がある
コメ開放栗田荒れて波高く

涙腺がテレビドラマについきられ
ワープロに鏡餅でも飾ろうか

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

国会に新風入れたベレー帽
ベレー帽かぶる角度でインテリ―

二科展の夢は捨てないベレー帽
ベレー帽かぶると海はお喋りだ

キャンパスに夢を盛りこむベレー帽
根回しが見えすいている多数決

根回しも知らぬ純情さを買われ
根回しに誤算逃がした青い鳥

根回しに効かない鬼が一人いる
まっすぐな樹に根回しなど要らぬ

ばちばちと苦楽共にし友が減り
戦争の苦楽の友の賀状来る

苦も楽も夢中で過ぎて共白髪
苦も楽もあって多彩な老後です

苦楽越え夫婦年輪重ね合う
古代史は庶民の苦楽に触れていず

誇大した苦楽で受ける立志伝
苦も楽も知った男の広い胸

シマ子
志津江
美津留
キミ子

末一
昭平
登代
敏

敏報

敏之
房子
園歩

薫子
澄子
文夫

敬
勇次郎
英子
諷云児

正一
正子
六浦
しげる

昌子
萬的
二南

武庫坊

秋紅葉人人の京の寺

禁酒禁煙百まで生きて何になる

信楽でタヌキ夫婦が睦まじく

大スターが逝って昭和が遠ざかる

三味弾くように落葉散ってくる

恨みっこなし夕焼けが美しい

職退いたとたんに街の役がつき

高槻川柳サークル卯の花 辻白溪子報

今日もまた円滑にすぎ夕焼ける

歳の差もあって仲よし秋なごむ

ほんやりと父の私語きく羅漢寺

万歩計つけて公園まで孫と

とびきりの美人男に縁がない

不都合な事は棚上げする政治

新宅に人形がほしい違い棚

ほんやりと見てたら安う負けときま

風邪気味を口実スポンで来たおんな

ほんやりと母の心が分かりかけ

身の程をわきまえている吊戸棚

ほんやりと寛いでいる独り酒

紅葉狩りわざわざ遠くへいつて観る

鍵の穴すこし不思議なおとこ靴

蔵の棚亡父のはやきが並んでる

円滑に運んだことが気に召さぬ

棚はたの金星肩で息をする

付け馬とほんやり帰る午前様

老眼も孫も涙を溜めて聞く

保蔵 風子 杜的 歌子 紫香 スミ子 節子 静江 恵美子 正坊 上志子 春風 紫香 萬的 杜的 芳子 英子 榮子 けいお 武庫坊 年代 二南 波留吉 茶の子 庸佑

控え目に居る人柄を頼られる
二日酔はんやりとしか覚えてず

尼崎尾浜川柳会 前田いわお報

湯豆腐へ湯気がふつつ雪見酒

湯どうふに冷めた二人の影法師

湯どうふの湯気の向うに妻がいる

湯豆腐の湯気が家族の輪を深め

湯豆腐を吹いて熱燗父の笑み

湯豆腐に噂の女煮えつまる

湯どうふと洋酒が合わぬ京の街

せつがちがゆっくりリズムを嘲笑い

美術館出れば二人に枯葉舞う

雲流る慕標追憶ゆっくりと

ゆっくりとしては居られぬ師走風

減量を促している砂時計

ゆっくりと本音を喋る二枚舌

元気がど鳥から犬の便り来る

ティーポット他人を憎まぬこにする

子を思いゆっくり締める岩田帯

万歩計落葉の道を踏みながら

旅プラン早や心だけ駆け巡る

京都塔の会 松川 杜的報

水琴の音は邪心が消える音

雑音をみな沈めこみ心字池

花頭窓すばり灯籠の位置がある

襖絵の孔雀に夫唱婦隨見る

相国寺塔頭にある文化の灯

飄云児 白溪子

向西 鹿太

昌子 保蔵

勇次郎 修水

十四郎 尚利

江美 澄子

すみ 歌子

夢之助 敏之

石舟 弘治

紫香 いわお

飛鳥 求芽

杜的 静江

何かも昔のまんま碑が語る

役付きになれば定年見えてくる

役員が決まってお喋りはずみ出す

主役の夢いともみてます葱坊主

役付きになつて眼鏡も替えました

大役を果たしたようにばら崩れ

先を読みすぎて相手とすれ違つ

参謀は皮算用の票を読む

くり返し読む亡き母の温い文字

腹の底読むと結局カネのこと

主婦だった頃人生の華でした

悪女にもノラにもなれず主婦で老い

旅に出ても時々主婦の顔をみせ

それぞれの思い出旧師老い給つ

買う人もないに自分を売りに来る

芸術も読書も秋の味覚かと

もう何度かえるか老いのクラス会

味噌汁の味から主婦の一年生

七転八起まだある馬力うらやまし

サルビアの炎え立つ村の公民館

看病の疲れ染み込むそば枕

軽口を叩きトラブル巻き起こし

一円も混じつて瓶の義援金

妻は旅昼寝を起こす電話ベル

御仏に逢いたく朝夕灯を点し

秋更けて紅葉織りなす京の山

房子 倫子

百合子 萬的

いわゑ 葉子

三求 英子

ただし 栄

正坊 美穂

てる 水客

笑女 達子

芳子 圭坊

武庫坊 年代

花代子 僕川報

永倉 水雄

正雄 金吾

たき 静江

たき

そりかえる背中幼児の自己主張
 言い訳はせぬ神様が知っている
 間引菜も野菜不足で喜ばれ
 ライバルと笑顔で飲むも芸のうち
 また聞きの話見てきたように言い
 ロボットに年季の腕を持つてかれ

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

風止んで砂漠は別の顔になる
 シヤム猫の砂買いに行く雨三日
 砂の塔家族がみんな好き勝手
 ヒュルヒュルと風の心になる砂丘
 山茶花梅雨まさかと思ふ友が逝く
 まさかとは思ふがカメラ飲んでみる
 ほんさんに出会ふヌードのかぶりつき
 初めての点滴時計とにらめっこ
 帳尻を合せ茶にする大晦日
 金婚式ひび割れ鍋をつくろいつ
 霜うすく名もない草の薄化粧
 まさかとは思ふ産科の門くぐる
 盆栽のすそにきれいな砂をしき
 子の部屋もノックしなけりや開けられぬ
 遠い昔思い出す夜は風邪ごこち
 人と出逢い何か一つを学びとる
 ジャンボくじまさかの夢を待っている
 砂埃前後ダンブにはさまれて
 鍋料理あれもこれもと市場籠
 なんとなく足を速める暮の街
 捨て犬も振り向きながらついてくる

つね きん まつゑ 静代 久子 柳華
 きく子 とく子 田英子 ただし 芳子 圭坊 吉太郎 一笛 登代子 富子 幸子 すすて 路児 博史 悟郎 明光 明吉 慶子 薫 しばお

十二時を過ぎて平気という娘
 夢を見た都会で夢を見失う
 来客もそわそわしている十二月
 暮からの心残りか年を越し
 医者に酒止められました十二月
 欠勤の会社へ妻が来たそうな
 かけひきで今年も暮れる永田町
 下着だけはきっちり洗う卒寿です

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

別れると噂の夫婦ラストまで
 しんがりで満足している俺の影
 周遊のラスト豪華な夜にする
 ラストにてようやく数珠が手になじむ
 ラストシーン女が一人皿洗う
 明日あすとラストの近いこと忘れ
 天の句が出るまで待っている自信
 ラストの日すがりつきたい弥陀の手に
 折角のこの世だラスト急ぐまい
 自分史のラストシーンはハッピーだ
 父の樹がラストに枯れてむくわれぬ
 ラストシーンに抱いてやる女がいる
 この俺のラストシーンは神まかせ
 自画像へラストを飾る紅を塗る
 ラストまで五年と決めて旅を選ぶ
 ラストラストの声に追われる十二月
 ラストまで不馴れな幹事落ちつかず
 スナックの恋のラストは○が切れ
 ザ・エンドへ名画の余韻身に沁みる

登志実 武庫坊 白漢子 薫風 萬的 紫香 正坊 杜的
 信子 紫映 温子 仙岳 たつみ 梅朗 妻子 ひさ子 柳風 幸子 雄々 螢 松盛 典子 宗光 小鹿 みほの 八太朗 杜的

メロドラマ目を皿にして見るラスト
 老残のラストスバート駄句ひねり
 ラストまで踊って門限気にしてる
 ラストでもいいではないかご当選
 俺だってラストを飾る夢がある

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

仇打ち後ろ姿を追いつづけ
 仇打ちのわらじはとうに編み上がる
 仇討ちの場面になると雪が降る
 ロボットの仇のように使われる
 言い分があつて仇に甘んじる
 どうどつとと一本道をくる仇
 家計簿をやつと手ばなす晦日そば
 家計簿の数字は生きてきたあかし
 家計にも特別予算組み入れる
 家計簿が三日坊主で泣いている
 一豊の妻になろうと貯めている
 家計簿の赤字はみんな僕ですか
 追憶の鍋にはなべの一人言
 なつかしい電話夕餉の鍋焦がす
 ぶく鍋が丁度煮えたら不意の客
 小さな夢持つてる鍋を磨く妻
 慈善鍋小さい善意呼びとめる
 寄せ鍋のアクをとるのもリズムカル
 世渡り上手な猿も木から落ち
 懺悔して猿握り飯欲しがらぬ
 おとなりは申年らしい初出産
 猿のようにいつも反省しています

早苗 静恵 雄々 ちかし たつみ 房子 秀子 小鹿 邦代 太泡 鶴丸 文子 清志 満江 雀踊子 代仕男 友子 米子 多賀子 静江 しみえ

三猿を真似て余生を丸く生き
猿まねですまぬ世界になりました
あれ以来猿知恵まわす柿の種
売り出しのチラシを見ると落ちつかず
売り出しの法被が映える紅の色
売り出しのチラシはメモにできかねる
踊るだけ踊らせてから店じまい
大売出し地球の裏は瘦せている

川柳たけはら

森井 菁居報

義良 長三 与根一 登志子 芳枝 寿美子 叮紅

ローマ字で私の名前かけますよ
はちみつをそのままたべたあますぎた
雑踏を父娘で歩くあたかき
誰も来ん言うから行ってみたくなる
温もりを一つもらった初対面
三朝の湯から大山秋日和
過去一つもみじの谷において来る
献立をあれこれ話聴きながら
会長の二分の一の寄付にする
孫担ぐ祭御輿の明るさよ
木魚打つ阿弥陀如来のお出ましか
置き土産のセーター編む娘
趣味一つ風にも彩が有りました
円満主義軽く他人にあしらわれ
あう度に犬も馴染みのかおになる
三泊四日留守をくどくど娘に頼む
せかせかと空の青さを忘れてた
ゴキブリへ瞬発力は衰えず
水替えてめたかの会話聞いている

小4千枝 蘭幸 菁居 麻代 夏喜 喜美子 静佳 勲 ヤスエ 浪子 喜久恵 一枝 清水 栄恵 愛子 淑子 房子 比呂子

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

残り火を吹いて明日へ繋ごうか
仕事した汗をもったいなく洗う
恋人ならときめくだろう秋の駅
法堂の障子のしろしともしろし
考えつきで落ちる紅葉の美学かな
師の前に出ると女の子に戻る
過労死になるよりなまけものになる
誠実に誠実によと天の声
六十の羽を纏う旅に出る
傷つかぬ鉄のころがほしい日も
海から降りると平凡なおじいちゃん

一路 笑子 貞子 不朽 静風 伸子 幹風 笹舟 玲子 白狐 千代美 欣之 弘直 美津留 夕花 森子 覚然坊 シマ子 しんじ 年人 柳宏子 春子 美幸 かつみ 雅士 正子 隆

富柳会

池

森子報

電話ぐらいせいと母から手紙くる
駆け足できた人生に残る悔い
昼会うて夜も電話の長ばなし
電話では言えぬと足を運ばせる
電話でも見えるお顔の国なまり
長電話彼氏と母に感づかれ
通話料気にかねながらもしゃべりこむ
もどれない橋とも知らず買物に
手に辞表腹きめて行く社長室
安いで買ったと妻にだまされる
一ぱいの酒も許さぬネズミトリ
買う人の買い手の言葉用意する
冬の星空いっばいに夢をかく
幕下りて舞台一ぱい紙の雪

一風 甘平 英一 二南 勝美 喜風 朝子 頂留子 恒明 晋吾 悦郎 和子

親子でも師弟のけじめ修業中
夫婦でもけじめが大事末ながく
登山靴けじめけじめの音がする
長幼のけじめをつける床柱
煩惱が今朝も元気に頭出し
その齢でお元気ですね放つといて
欠席の理由妻の知恵を借り
無欠席誇って凡句並べてる
会議室空席目だつ年の暮
欠席のなぞを解いてるボタン鍋
結婚を決めた心に浮気虫
決心も出来ず馬鹿にもなりきれず
男だもん心に決めて口にせぬ

昭水 生子 花梢 莊次 和夫 美房 智久 絹子 二三子 維久子 登子 透太

(伊) 勇

グイエット決心だけで食同じ
 決心はしたが一步を踏み出せず
 アメリカがにぶり決心またゆらぎ
 遺言を書く決心が未だつかぬ
 けじめ少しずらして恋の風ぐるま

川柳塔鹿野みか月忘年句会 土橋螢報

日曜も祝日もない母の暦
 知恵袋破れたらしい物忘れ
 一秒を破る苦勞の日を重ね
 いざという時に持ち出す顔がある
 何時までも亡母の顔から抜けだせぬ
 北酒場へ行くベレー帽よく似合う
 胎盤を破って孫が顔を出す
 赤い丸暦に印すうれしい日
 行商のおばさん頼むわしづかみ
 いい顔がそらい夕餉の膳かこむ
 真夜中にゴソゴソ凡夫這いまわる
 魂にとけこむような法話聞く
 戦死した父は息子の顔知らず
 ペン先へ魂こめて詩を書く
 あの親の子供にしては型破り
 自画像に亡夫の魂生きつつけ
 退院の印こよみに太く書く
 精魂をつなぎつないで書きあげる
 老ゆるもの育つものあり曆古る
 ひらかなの嘘がとつくにはれている
 法話聞く喜ぶ顔に寺で会う
 フレッシュな顔を並べた朝の市

花子 柳太 文次 森子
 みさ子 房子 公弘 富恵 明美 幸枝 節子 睦子 八重子 喜与志 信江 静江 くに子 幸江 芙美 かつ乃 智恵子 三千代 静生 久枝 汲香

灰皿が一杯になる嫁ばなし
 庭石の顔にも泥は塗られまい
 魂もすこし汚れて五十歳
 母になるよろこびへまた指を折る
 北を指す磁石に邪念などはない
 陽のしずむラストシーンを描いてみる
 わたくしの魂多分黒だろう
 花が咲くように笑った顔と会う

むらくも川柳会

藤井

明朗報

駆け足で初ボーンナスの子がもどる
 嫁がせる心いそがしまた佗し
 強すぎる相手だったと負け惜しみ
 親切な余韻の残る傘たたむ
 うとうとと夢路へ誘う暖房車
 木枯しの夜は民話を思い出す
 母の形見今も大事になつかしむ
 思い出は六根清浄峯寺坂
 相手との呼吸を合わす術を知る
 思い出をたどれば母の海に出る
 敏隠す老眼鏡がよく似合い
 似合うまでねばる女の試着室
 盆栽に閑心もって冬に入る
 体形が良くて和服の似合うひと
 関心をひこうといたずらして見せる
 口揃え似合う似合うとすすめられ
 地球へのやさしい関心集める輪
 駆け足は止めてたゆまぬ亀になる
 十大ニュース指にも余る年暮れる

隆風 完司 幸代 正道 ときお きみ子 正朗 芳子 秀子 義良 峰雪 愛子 幸子 三津江 一葉 翠晶 保子 八重子 寿 さくら ふさえ 節江 昭子 林蔵 藤子

駆け足が好きで得意のはねこんま
 まな板の音いそがしい十二月
 師走風財布やたらにいそがしい
 ひい孫のいたずら守りもいそがしい
 ちらほらと娘に白髪見えはじめ
 詫び入れて相手の気持和らげる
 ならめつこ穴のあくほど見る相手
 小半日お茶に招ばれていそがしい
 親切を仇にしているへそまがり
 年の暮れみんな守る火の用心
 十二月街いそがしい顔になる

明 美恵女 常子 仲子 島子 幸夫 静子 千里 ヤス子 百代 はる代

▼一路賞・各地柳壇賞選考委員決まる

平成3年度一路賞の選考委員は児島与呂志
 政岡日枝子・川島諷云児、同各地柳壇賞の選
 考委員は波多野五楽庵・園山多賀子・小池し
 げおの各氏に決定、両賞とも『川柳塔』4月
 号で授賞者を発表し、4月本社句会(7日)
 で表彰式を行います。(川柳塔社)

■各地句会だより

川柳塔あおもり

小寺花峯

川柳塔あおもりの結成は、工藤甲吉・波多野五楽庵・田中叶・真喜内實・斉藤劔氏ら五人が集まった弘前市の飲み屋街で、「川柳塔の支部みたいなものを作ったらどうか」と誰からともなく話が出て、「それでは作ろうじゃないか」と話が決まったのは、今から五年前の昭和六十二年十一月三日の文化の日のことでした。

この時は、飲んだ席上での話だけで終るのではないかと思われましたが、まず五楽庵氏はその気になり、結成のために東奔西走いたしました。

そして、具体的に話を進めるため、五楽庵氏宅に集まって会合を重ねながら、蟬の声も聞かれ始めようとしている昭和の最後の年となった昭和六十三年七月三日、弘前市鍛冶町「弥三郎」で設立総会を兼ねた句会を開催したところ、十二人の参加者があり、全員の拍

手で「川柳塔あおもり」が陽の目を見ることになりました。

この会の特徴は、隔月に五楽庵氏宅で「川柳研究会」と称する勉強会を開催して会員の川柳技術の向上を図ると同時に、年三回の会員誌の発行、五月の「花見句会」、七月の「納涼句会」、十月の「茸を食べる会」、十二月の「忘年句会」など年四回の句会も開き、會員の親睦を図っております。句会は常時十四、五人の参加者ですが、和気藹々とそれはそれは楽しい雰囲気包まれます。句会は弘前市



青森市で開いた花見句会

内を中心にかけていますが、会員は現在三十余名で県下全域に散らばっていることから、年に一、二回は弘前市を脱出して開催するよう努めております。

さらに、「目玉」としては、會員の個人句集（百句集）を年三回を目途に発行していることとす。これは五楽庵氏の発案で「地域の人々に読んでいただくことにより川柳啓蒙の一端にもなり、自分史の記録にもしていただくのが目的である」と現在までベテラン、新人を含めて四人が個人句集を発刊しております。また、昨年五月には日川協にも加盟し、確実に一人歩きを始めました。

今年、設立総会から四年目、実質的に産声を上げて会合を重ねた昭和六十二年から五年目になります。そこで十月には一つの節目として、「川柳塔あおもり五周年記念大会」を盛大に催したいと考えておりますので、その節は沢山の方々のご参加を心からお待ちしております。

最後に、「小さな柳社には、小さな真心がある。小粒なりに山椒のスパイスを巧かせた個性のある川柳塔あおもりにしよう」が五楽庵会長の口癖で、今後もこの精神に基づき、小さな明りをいつまでも灯し続けていきたいと思っております。

柳界展望

編集部

★第27回川柳塔きやらはく

忘年句会は旧年12月1日、米吾ビルで開かれ、次の各氏が秀句賞に選ばれた。

今日の皿 雪しんしんと

積るなり 長町 一吠

落し穴すこし遊んでから

見上げ 金築 雨学

神様は火の見櫓の上にいる 江原とみお

仏さまの箱が仰山つんで

ある 江原とみお

少女らが着くとやさしく

なる島よ 天根 夢草

目立たないように赤旗振

っている 岸 桂子

曖昧な首が山ほど積んで

ある 金築 雨学

淋しさよコトリと倒す砂

時計 市村 京子

悪態をつかねば罅割れる
ガラス 番野多賀子

やつとやつと机の微笑み
が解る 中原 諷人

一本の藁を見捨てぬ波が
ある 加藤きよと

★川柳塔きやらはくは12月
3日、新役員を決定した。

結成以来、会長をつとめて
きた八木千代さんの後任と
して林荒介氏(事務局兼務)

副会長に林瑞枝(渉外担当)

政岡日枝子(会計担当)の
両氏を選任した。

★いずれも川柳会忘年句会は
12月15日、53名が参加して

開かれ、次の4氏が秀句賞
に輝いた。

得心の涙を拭いて明日を
待つ 高野 律子

本当の内助 表に出たが
らぬ 黒川 紫香

過去はみな水に流した設
計図 佐々木 裕

お早うさん白く磨いた歯
が笑う 堀江 芳子

★長崎川柳社主催の雲仙全
国誌上川柳大会における課
題「出直し」に本社同人の
住谷石舟氏の次の句が特選
となった。

リンゴの唄から出直しを
した焦土

★京都塔の会は12月17日の
年末句会で平成3年の最優
秀賞に川島諷云児氏、得点
賞に次の6氏を決定した。

①阿萬萬的②松川杜的③都
倉求芽④田中正坊⑤川島諷
云児・藤村ノ女

★朝日新聞大阪版掲載「朝
日なむお柳壇」の恒例の十
秀が12月27日付で発表され
た。最優秀句は次のとおり

で、堺川柳会の中川楓(永
幌市)を決定、1月12日の
新春川柳大会で表彰した。

★西宮北口川柳会は平成3
年の最優秀賞に小池しげお
氏、優秀賞に次の6氏を決
定、1月13日の新年句会で

表彰した。①門谷たず子②
墨作二郎③山本礫④川島諷

云児⑤春城武庫坊・西口い
わゑ

★いずれも川柳会は1月19日
の新年句会で平成3年度の
いずも賞の表彰を行った。

＜いずも大賞＞
パン焼きながら取り残さ
れる日の怖さ 佐々木裕

＜同友大賞＞
め葉がしみいるいいきか
せるように 榎原秀子

同じ紅さして亡母と別れ
けり 中川 永子

＜片岡つとむ選＞
あのように齢をとりたい
人がいる 小林すみ子

★北日本放送・ラジオ川柳
でこのほど誌友の島ひかる
さんの次の句が最優秀句に
選ばれた

ひとめぼれしたのはにせ
ものかもしれない

★坊農柳弘氏の川柳塔同人
一乾王朗氏の番傘同人昇格
を祝賀する奈良番傘新春句
会は1月12日、奈良そごう
バンケットルームで開催。

★柳都川柳社は平成3年度
の柳都賞に進藤一車氏(札
幌市)を決定、1月12日の

★西宮北口川柳会は平成3
年の最優秀賞に小池しげお
氏、優秀賞に次の6氏を決
定、1月13日の新年句会で

表彰した。①門谷たず子②
墨作二郎③山本礫④川島諷

云児⑤春城武庫坊・西口い
わゑ

★いずれも川柳会は1月19日
の新年句会で平成3年度の
いずも賞の表彰を行った。

＜いずも大賞＞
パン焼きながら取り残さ
れる日の怖さ 佐々木裕

＜同友大賞＞
め葉がしみいるいいきか
せるように 榎原秀子

★弓削川柳社は平成3年度
二賞を次のとおり決めた。

＜紋土賞＞
黄昏のいのちへ青い空が
ある 横部牛歩

＜弓削川柳社賞＞
美しい老後を生きる種を
播く 妹尾道子

★竹原川柳会の平成3年度
最優秀作は次のとおりで、
優秀作一席に岩本笑子、同
二席に井上邦男・池田勲の
各氏を決定した。

まっ白になる一日があり
ました 脇本政己

表彰した。①門谷たず子②
墨作二郎③山本礫④川島諷

云児⑤春城武庫坊・西口い
わゑ

★いずれも川柳会は1月19日
の新年句会で平成3年度の
いずも賞の表彰を行った。

＜いずも大賞＞
パン焼きながら取り残さ
れる日の怖さ 佐々木裕

＜同友大賞＞
め葉がしみいるいいきか
せるように 榎原秀子

★弓削川柳社は平成3年度
二賞を次のとおり決めた。

＜紋土賞＞
黄昏のいのちへ青い空が
ある 横部牛歩

＜弓削川柳社賞＞
美しい老後を生きる種を
播く 妹尾道子

★川柳岡山社は川柳ますかつと賞の特別功労賞に本社参与の本田恵二朗氏を決定授賞した。

★柳樽寺川柳会は前年度の川柳人賞を発表した。

地球を汚して人間少しずつ狂い 吉田 泉陽

★川柳カレンダー第4回全国川柳(誌上)大会は西尾

栗本社主幹ら12氏を選者として募集を行っている。投句は雑詠(新作)3句を所

定用紙に記入(1人1枚)2月29日までに送ること

し、投句料は無料、発表は平成5年・川柳カレンダー

投句先は〒194-01東京都町田市金井町424サン・メ

イルビル内・日本伝統美保存会文化部全国川柳誌上大

会係

★平成3年度年間賞発表・ふあうすと川柳大会は4月

26日午前11時から神戸市立婦人会館で開く。宿題は、

棚・葉・摺む・滲む・泡・越す・グルメ・辞書で、各題2句、会費2000円(記念品・昼食呈)

★番傘川柳本社主幹磯野いさむ氏の叙勲祝賀川柳大会は5月5日午前11時から月

華殿で開かれる。

★番傘折鶴川柳会創立40周年・中尾飛鳥句集「あすか」

発刊記念川柳大会は5月17日午前11時から大阪府中小

企業文化会館で開く。宿題は「沖」「親友」「願い」

「大物」「ゆとり」「光る」「飼う」「無口」「わかる」

各題2句、出句締切12時半

会費3000円(句集・記念品・発表誌・軽食呈)

事前投句「一筋」(中尾飛鳥選)は4月20日までに〒

565豊中市新千里西町2-1 A23-310中尾飛鳥方

番傘折鶴川柳会へ。▽句集刊行△

新同人推薦

中井 ゆき
— 薫風・千代・瑞枝・日枝子推薦

しら (B6判・150p) 青枝鉄治氏らが追悼句を寄

しら (B6判・150p) が12月1日付で川柳

あしなみ会から発行された

正本水客氏らが序文、辻白

漢子・植村客遊子氏らが故

人を偲ぶ文を寄せ、昭和30

年代から各年代ごとに作品

が収録されている。

■小砂白汀川柳句集「鮎」(A5判・200ページ)

がこのほど、わかあゆ川柳会から刊行された。同句集

には橋高薫風理事長が序文を寄せている。

▽おたより△

■児島与呂志氏(参与・和歌山県)「宮尾あいきさん

の訃報を知り、ご冥福をお祈りします。不幸な火災に

遭われた時、亡母の形見の衣類一行李を持参し、喜ん

でもらったのを覚えていま

す。川柳好きの笑いを絶や

さない作家でした。ちょっとの心が深い深い心の付合

いとなったのを思い出して

おります」

■瀬川英一遺句集「昇鮎」(B6・96頁)が遺族により刊行された。同氏は三幸

川柳教室の会員で、同教室の桜井千秀さんが追悼文、

京都の会	25日(火)午後1時から 次・加える・前後	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費 400円 投句料 62円切手 3枚
岸和田川柳会	27日(木)午後6時から 気鋭・空白・景気・後援	岸和田市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内
原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です)
〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(日)午後1時から 演技(共選)・流す(共選)・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入ル 〒593 堺市壘上緑町2-9-2 河内天笑
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から 願 い・出 発・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 商 魂・秘 密・親馬鹿	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	9日(日)午後1時から 大きい・丘・踊る・(折る)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後1時から 豆・くやしい・気付く・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
八尾市民 川 柳 会	11日(火)午後6時から 秘密・豆・包む・針	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
富 柳 会	13日(木)午後1時半から 指 図・札 束・流 石	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正午から ゴシップ・損・我慢・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 白・入口・そろそろ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(水)午後6時から 和・乱・約・迷	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21日(金) 正午から 鍵・平凡・粥・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
南 海 川 柳 会	21日(金)午後6時から 近所・寒波・交叉・知人	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 東 大 阪	22日(土)午後6時から 嫁・寒・ぼちぼち・舞台	東大阪市立社会教育センター 近鉄布北北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日)午後1時から 偶然・離れる・チョコレート・(贖物)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

編集後記

せくしている私には何ともうらやましかった。

★もともとスペインという

★絶えて久しく日記をつけ
る習慣を失っていた私が一
念発起、昨年から「十年日
記」をつけはじめたことを
この欄で書いたが、どうや
ら一年分を完了し、二年目
に入っている。一日わずか
五行なのでその日の会合、
仕事、通信とトピックスを
メモするだけだが、後から
読むとその週、その月にお
ける私を軸とする動きが浮
かび上がってくる。

★昨年暮れ、古本屋で見つ
けた堀田善衛著『スペイン
430日』（ちくま文庫）
を読んだ。一九七七年七月
から430日間にわたるス
ペイン滞在日記だが、仕事
柄とはいえず、当時、還暦を
過ぎたばかりの著者がこの
よさうな自由な時間を持てた
ことが、古希を越えてあく

国には興味があり、今年の
オリンピックや万国博がす
めば一度は訪れたいと思っ
ているが、それにしても他
人の日記がこんなに面白い
とは思ってもみなかった。

夫人とともに北スペインの
小村に住み、読書と思索の
日々の中でヨーロッパの歴
史と現実を再発見し、それ
を飾らない文章で淡々とつ
づっている。

★その中の一例「芸術につ
いて、あれほど沢山いる貴
族の子女で画家や音楽家に
なった者がほとんどいない
ことからヨーロッパ社会に
おけるその地位についてふ
れ、「アーティストという
ことは過大にも過小にも
評価してはならない」とし
ている。さて本号は、通巻
七七七号にあたる。」(正)

○小さな声で告白するのだ
が、ときどき「川柳をやめ
たら、どんなに気楽だろう」
と思うことがある。身辺の
雑用に追われ、飛ぶように
毎日が過ぎてゆく。気がつ
くと、目前に句会や投句締
切日が迫っている。

○泡食つて家事を早々に切
り上げて机に向う。ところ
が、じつくり没頭できるか
と言えば、そうは問屋は卸
さない。孫が膝へよじ登っ
てくる。友達からの電話が
ついつい長くなる。そんな
時に限つてぜひ見たいテレ
ビがある。読みかけの本が
誘惑する。などなど。

○当然の結果、あせりとい
らだちの中、必死の形相で
取り組む。たまにはゆとり
を持って作句することもあ
るのだが、それがいい評価
を受けるとも限らない。ど
ちらにしる苦労した作品が
抜けないと、特に句会では

人の作品がとてつもなく上
手に思え、消え入りたい心
境になる。

○そんな時は、昨年鬼籍に
入られたあいきさんから聞
いた、清水白柳さんの言葉
を反芻する。するとまた意
欲が湧いてきて、川柳をや
めるのはやめにしよう、と
思うのである。

「人の作品が上手いと感じ
る時は、自分も伸びている
時です」

●私の見るTVは、殆ど時
代劇である。そして同じ裁
判ものでも加藤剛（大岡越
前）の「厳しく詮議の上追
つて極刑に処す」よりも、

松方弘樹（名奉行遠山の金
さん）の「市中引き回しの
上打首獄門、余の者終生遠
島」の方がすかつとする。

また水戸黄門より中村主水
や藤枝梅安が好きである。

私の正体は直截的で残酷な
のかも知れない。筋書きは

きまりきった勸善懲悪で、
頭を空にしてボンヤリ見て
る内に、溜っているフランス
トレーションが融けていく
ような気がする。

●所で「大江戸捜査網」と
いうのに「隠密同心心得の
条」というさわりがあって
「我が命我が物と思わず……
己の器量あくまで陰に、使
命如何とも果すべし云々」
新聞と雑誌では性格は異な
るが、編集者とは、この穩
密同心のような者ではない
かとかねがね思っている。

●雑誌の編集者は伯楽であ
る。優れた馬を見いだし、
育て、存分に活躍する場を
提供せねばならない。馬を
措いて伯楽自身が走り回っ
たのでは漫画である。改行
や行数等枝葉で単なる割付
けの技巧に過ぎない。要は
内容である。川柳塔に蝟集
する駿馬達が競う様を夢見
た正月であった。(射)

作品募集

4月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 葉選
 水煙抄(10句) 黒川 紫香選
 銀河系(3句) 河内 天笑選
 茴香の花(3句) 八木 千代選
 吟「握る」 藤村 亜成選
 課題(3句) 「苗」 岩佐 丹吉選
 「なかなか」 田中 輝子選
 初歩教室「この辺」(3句) 辻 白溪子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

5月号
初歩教室

課題吟「速い」「休む」「音楽」
 「揺れる」

本社2月句会

日時 2月7日(金) 午後5時半
 会場 メンズファッションセンター3階
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
 おはなし
 兼題 「柔かい」 神夏磯 典子選
 「包む」 板尾 岳人選
 「草」 辻 白溪子選
 「寝転ぶ」 高杉 鬼遊選
 「薄い」 西尾 葉選
 席題 1題 当日発表 各題2句以内
 会費 500円
 投句 柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
 投句料310円(62円切手5枚)同封のこと

本社3月句会 6日(金)

兼題 「一人」「覚える」「切符」
 「椅子」「欲」

夜市川柳募集

第9回「祀」 森中恵美子選
 ハガキに3句 2月末締切
 投句先 〒593 堺市堀上緑町5-9-2
 河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「音」 橘高 薫風選
 ハガキに3句 2月10日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
 NHK大阪放送局
 「ラジオセンター」川柳係
 発表 2月23日(日)ラジオ第1放送
 午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「地図」 森中恵美子選
 ハガキに3句 2月15日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
 大手前ウサミビル3階
 西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料51円)

半年分 三千八百円(送料共)

平成四年 一月二十五日印刷
 平成四年 二月二日発行

〒545

編集兼 西尾 葉
 発行人 藤原 童心
 印刷所 大阪府阿倍野区三好町二丁目一〇一六
 ウェルラ第2ビル202号室
 発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1691 四番
 振替口座大阪 8133368 八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成四年二月二十五日印刷
平成四年二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻七七七号

川柳塔

二月号



白島海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない

収容人員 45名

客室 13室

舞台付広間 42畳

駐車場 乗用車10台

冷暖房完備

さん ぶ そう
旅館 金峰荘

〒685 島根県隠岐郡西郷町

TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

TEL (06) 330-0006(代)

FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6886

定価

六百元(送料 五十円)